
ワナビ荘の住人たち

動野たけのこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワナビ荘の住人たち

【Nコード】

N2217W

【作者名】

動野たけのこ

【あらすじ】

ワナビ（小説家や漫画家などになる夢を持つ若者たち）たちが集う「ワナビ荘」は今日もにぎやかである。コンクールに応募する者しない者、作品を書きながらも仕事をする者しない者、遊ぶ者遊ばない者、夢を叶える者叶えられない者……。さまざまな愉快な（当社比）仲間たちが繰り広げる自己満足エンタテインメント。

本物の作家志望の方はどうか怒らずに、広い心でお読みいただければ幸いです。

プロローグという名の登場人物紹介

「お兄ちゃん！ 起きて、お兄ちゃん！ 早くしないと遅刻しちゃ
うよう！」

「朝っぱらからうるさいなあ、かわいいブラコンの妹子。はいはい
いま起きるよ、おはよう……… ってうげえ！ お前朝からなんて格好
してやがる！」

「ふええ、ぼんやりしておぱんつ履くの忘れてたよう………」

「っておいおい、そんなことよりもうこんな時間！ 急いでもギリ
ギリ間に合うか微妙だぜ！」

「なーにやってるのよー、早くしないと置いてくわよー。冴えない
クセになぜか周囲からモテモテ男くん！」

「あー、元気系幼馴染子！ 待っててくれ、今すぐそっちに行くか
ら」

「きゃー、なんでズボン履いてないのよー！」

「うわっ、うっかり忘れてたぜ！ これじゃかわいいブラコンの妹
子のこと笑えねえや！」

「せーんぱいつ。今日もいい天気ですね」

「うわっ、天然系おっぱい後輩子、朝から抱きつくなー！ う、腕
に何かやわらかいものが当たってるうゝ！」

「ちよつとー、冴えないクセになぜか周囲からモテモテ男くん、な
に鼻の下伸ばしてるのよ！ ちよつとこっち来なさい！」

「いででで！ 耳を引っぱるな、千切れる、ひいいい！」

「なんですかー、元気系幼馴染子先輩、冴えないクセになぜか周囲
からモテモテ男先輩を一人占めしないでくださいー」

「お、お兄ちゃんのこと一番好きなのはわたしだもん！ 一緒にお
風呂入ってるんだもん！」

「ひ、ひいいい！ そ、そんなところ引っぱっちゃらめええ！ 千切
れるゝ！ ひぎいいい」

「うがあああー！」

僕は自分で書いた原稿を解読不能になるまで細かく破り捨てた。

ワナビという人種がいる。

ワナビじゃない。ワナビである。

間違えないように。

ワナビとは、つまるところ、漫画家だとか、小説家だとか、ミュージシャンだとか、そういうのに「なりたい人」を指す。

wanna beをそのまま日本語読んだものである。

ある意味で差別的ニュアンスで使われることもある。時には皮肉な意味を込めて呼ばれることもあるそうだ（おそらく作家志望者にはそれなりに厄介な人格の人が多いせいだと僕は個人的に推測している）。

まあ要するに、僕のような奴のことだ。

僕はライトノベル作家になりたいと思っている。

本気だ。嘘じゃない。

けっこ本気で、作家業で一生食べていきたいと思っている。

僕には心から尊敬し、崇めているライトノベル作家がいる。「城島ダイヤ」と言うのだが、ちなみに性別は不明である、この人は本当に素敵なライトノベルを書くのだ。

あるときはファンタジー、あるときはミステリ、あるときは学園モノ……、ライトノベルと呼ばれるジャンルのほぼ全てを網羅し、なお実力の底を見せない、怪物のような作家。筆も早く、怖ろしいペースで新作を刊行する。今やライトノベル界のエースと言っている人物だ。

そして高校のとき、この人の作品に出会った僕は、あつという間に彼に心酔した。こんなに素晴らしい世界があつたなんて。それからというもの、僕はありつただけの小遣いをはたいて彼の本を全て購入、繰り返し読んだものだ。それどころか、勢い余って彼の作品で

二次創作を行い、ネットや同人誌で発表するようになった。今思うと恥ずかし出来のものもたくさん生み出してきたけれど、若気のいたりということだけでひ許していただきたい。だって、「物語を書く」という行為は、本当に楽しかったのだから。

そして、受験勉強を経て大学に入り、僕は本格的に小説を書き始めるのだった。あの、城島先生のようになるために。彼の描くような、素敵な世界を僕も創り上げて、多くの人を魅了したい。純粹な願望から、そして書くということの楽しみから、僕はこの世界を志したのだった。

さて、そんな僕が、いざ一人暮らしの寮を選ぼうと、大学の生協に相談しに行ったとき、あるトンデモナイ広告が目に入ったのだ。

「『なりたいもの』がある若者、夢を追う若者よ、集え！ 格安合同生活寮『ワナビ荘』」

僕は不覚にも、そんなふざけた広告を興味本位で手にとってしまったのだ。それが全ての間違いの始まりだったのである（と、興味本位で先を読んでいただけそうなおアオリを入れてみるのだが興味を持っていただけたかはわからない。人の興味を引くというのは難しいものである）。

「うおおお！ まー君の作品キタコレじゃない！ ほらほら、『道塚魔太郎氏、一次選考突破』だって書いてあるわよ！ これ、まー君のことよね、すっごーい！」

「しょせんまだ一次選考ですよ。言ってみれば大学受験におけるエリミネイト、足切りみたいなもんです。ここから先が一気に厳しくなるんです」

「ワン」

「そうは言いますけど、今まで小説賞で一次選考通過できたのまー君だけですよ？ もうちょっと自信持ってもいいと思います」

「まぐれですよ、まぐれ」

「もっちーもこっちに来てみるといいわよ。そして思う存分まー氏に嫉妬して苦悶に表情を歪めるといいわ」

「ワン」

卓を囲んでパソコンを覗き込んでいる三人の男女、と一匹。彼らを少し離れた距離から眺めている僕という構図。どうやらまー君の作品が有名出版社の小説大賞でいいとこまで行っているらしい。ちなみにもっちーとは僕のことだ。

まー君は都内で「ゴーストタクシー」なる斬新で新しい事業を切り開こうとしている、タクシー運転手のワナビだ。髪の毛が真っ赤なので誤解されやすいが、紳士的な好成年なのだ。さらに小説の才能もある。彼はホラー小説家志望なのだ。ついでに横文字が好きだ。使い方はかなり怪しいが。

「くっそー、あたし漫画はこの間ダメだったのよねー。今回ののはけっこう自信あつただけだな。血と汗と涙と鼻水の結晶」

「リョーコさんは鼻水みたいな余計なものを入れるから良くないんだと思いますけど……。さすがのあれには私もドン引いてしまいましたし」

「リョーコさんは鼻水っていうよりカウパー液を作中に垂れ流し過ぎなんじゃあ……」

「ワン」

「何よー！　しょせん素人には私の芸術なんて理解できないんだー！　うがー！」

ボタンとばかりに倒れ込むリョーコさんは美容師兼腐女子である。三次元二次元、イケメンフツメンちよいブサメン、有機物無機物、何でもいける人である。ぐちよくちよである。ゴスロリファッションとかをコミケで着る。残念ながらメガネはかけていない。残念というのは僕の主観的感想である。

リョーコさんは主にBL小説を書く。BL漫画も描く。いつかBLで芥川賞を取る、と息巻いている。あたしは第二の三島由紀夫になるんだー、と大言壮語なりョーコさん。おそらく何か勘違いして

おられる。

「そういうのんちゃんはどうなのよー。この間言ってた声優オーディションに、エントリーしたんでしょー」

「あ、あれはエントリーじゃなくて、声優事務所の方に演技を聞いてもらって、感想をお聞きしただけです！ ダメ元っていうか、最初からけなされるのを覚悟で行ったし、これで何か、結果を残すっていうか、そういう目的じゃなかったっていうか……」

「ほら、そーやって最初から自分で逃げ道を作っちゃう。それが良くないのよー。ね、まー君もそう思うでしょー」

「はあ、そうですねえ。のんちゃんの声質はとってもファンタジックでチャーミングですから、あとは演技力さえ整えばプロ顔負けのステキな声優が一人ここに誕生しますよ。いつそリョーコさんの作品に声でも当ててみてはいかがですか？ 動画サイトでアップするとか」

「……それ、もうやりました」

やったのか。

「しかし、リョーコさんと組むと絡み合う美少年の声ばかりやられるからもうイヤです……。方向性の違いで結成二日でユニット解散しましたね」

「それでも二日持ったんですね」

この大人しい感じを強調する三点リーダを使いこなす、何とも奥ゆかしい少女は、のんちゃんである。彼女は専門学校生で、声優を目指しているんだとか。こうして謙遜……、というか、どちらかと言えば自分を卑下しているような、内気でマイナス思考に寄りがちなどころはあるが、実のところ声質は素晴らしいものがある。将来を期待される、我が荘の看板娘だ。

別に彼女はとりたてて美少女というわけでもないが、僕は彼女が大好きである。背が低く、髪形はさえないおかつぱで前髪が長く、分厚いメガネをかけていて、服装ははつきり言ってダサく、人とハキハキと話すのも苦手……。この垢抜けなさ、ダメさが何とも愛

おいしいのだ。皆さんにもこういう経験はありではないだろうか？
（内気な彼女と仲良くなった理由については後述しようと思う。いつになるかわからないけど）

「ワン」

さつきからワンとかうるさい奴が一匹いるのでついでに紹介しておこう。この犬はカフカである。恥ずかしい名前だ。僕も言うのすら恥ずかしい。小説家志望が自分のペットに文豪の名前をつけるというのはよくあることだが、断っておくが、こいつは僕のペットでも何でも無い。このアパートの大家の飼い犬だ。

以前リョーコが「こいつの名前カフカじゃなくてザムザにしない？」と提案したが飼い主に直々に却下された。僕はいい名前だと思っただけどなあ（ここでクスツと笑っていただければ本望である）。

さらにちなみに、犬というのは正確には「ワン」とは鳴かないものである。せいぜい英語表現の「バウワウ」くらいが順当なところだろう。日本語の「ワン」は英語圏では「one」と聞こえるらしいが、もし「ワンワン」と犬が鳴いたならば「one-one」に聞こえることだろう。一対一のいい勝負である。何が、と冷静な突っ込みを入れられる前にこの話題は切り上げよう。

そういえば猫も「にゃー」とは鳴かないだろうな。英語で発音すると「near」だろうか。ネイティヴの猫語の発音をよく聞くと「なーお」とも言っているような……。ちなみに猫語のネイティヴは日本では本物の猫と豊崎愛生くらいである。

何を言っているのか……。とりあえず話を戻したい（どこへ）。

「さーさ、みんななにやってるのう？ さつさと机の上片付けて。ご飯の時間よう。今日はね、アタシ特製・旬の食材の納豆鍋！ これさえ食べればあなた方もお肌つやつやになるわよう、ブホホホ」「あ、D」。おっつー。あのね、まー君の小説が一次選考突破したんだよー」

「あらま、ホント！？ おンめんデントう。やだ、お祝いしなく

ちや。あとでケーキでも買ってこないと。ちょうど納豆鍋でよかったわあ」

「え、納豆鍋つてめでたい料理だったの？」

最後に部屋にのっそりと入ってきたエブロン姿のオネエ系キャラは、（うすうす勘付いているかとは思われるが）残念ながら女性ではない。というか、髭面である。もう言い訳のしようがないほど、気持ちいいくらいに、男らしいかついオッサンである。身長一九〇近くあるのではないかという巨体に、全身引き締まった筋肉を持つ。髪の毛はレゲエ系の……、何と呼ぶのかよくわからないが、全ての毛を三つ編みにしているかのような、とにかく手間のかかりそうなヘアスタイルをしている。

彼の名はDJ。その名の通り、ふだんは彼の経営するクラブでデイスクジヨッキーをしている。沖縄出身。彼がワナビ歴が一番長い。実に二〇年近く、宗教や家族愛をテーマに小説を書いては投稿し続け、ボツを食らっている。その数、実に二百と十三。そこまで落ちれば、普通ならさすがに「才能なし」と断じて諦めると思うのだが、彼は違うらしい。

「理解されるものだけが小説じゃないの。生み出す、ということは人間のスピリットと、自然界のグレートスピリッツ、すなわち私たちの信仰対象がダイレクトに接続されることであり、私はその神聖な行為自体に価値を見出すの」

と、わかるようなわからないようなことを言う。なるほど、これでは出版社にも理解はされまい。彼の話に頷きながらも密かにそう思う僕である。

そして彼は、この、僕たちワナビの住むボロアパート「ワナビ荘」の主人でもある。（ゆえにカフカの飼い主でもある。どうでもいい情報おわり）

大家であると同時に、僕たちの良き理解者であり、親代わりのような存在。

ちなみに「ワナビ荘」というのは僕らが勝手に決めたあだ名であ

り、正式名称は「ハイツ」だかなんだか、特に面白味もないものだ（当たり前である）。

DJはこのアパート名のセンスについてだけは今でも悔やんでいる。もつと「ハイセンスでグルーヴィーな名前にしておけばよかった」と（グルーヴィーがどういうことを指すのか、例によって僕は聞かずに聞いた。聞くと話が長くなって面倒だからだ）。

はてさて、都内某所にひっそりと存在するこの「ワナビ荘」、果たして平成の「トキワ荘」となり得るのか。それはいくら何でも志が高過ぎか。まあでも、夢はでかいに越したことはない。

そんな感じで、以下、夢を追い続けるオタクたちのしょーもないエピソードが展開される。

本当にどうしようもないので、正統派（？）ライトノベルファンの方々はお怒りになるかもしれないが、そういった方々はここに至るまでに既に脱落していると思われるので、気にせずに進めることにする。

細かいことを気にしていたらワナビなんてやってられないのである。

第1話 ゴーストタクシーにうってつけの夜 その1

「それにしても、これ、タクシー？」

僕は思わず素で訪ねてしまった。僕の中の「タクシー」という普通名詞の指す概念が、ガラガラと音を立てて崩れ去っていくような感覚だ（これ、実に陳腐な表現だが僕は気に入っている。最初に考えた奴は天才だ）。

「よく暴走車と間違われますよ。コップに追いかけることもあります。何が何でもタクシーです、の一言で押し通してますけど」「コップ？ ああ、警察のことね……」

ワナビ荘の、身を屈めないと入れないほど狭くて暗い車庫の中である。狭さゆえかDJはここを「ケツの穴」と呼ぶ。まったくもって下品な男だ。

僕はまー君お気に入りのタクシーを見せてもらっていた。黒を基調とした車体には数えきれないドロ、血しぶき、コウモリが描かれており、ボンネットとドアパネルに、大鎌を持った半裸の悪魔っぽい女の子が鎮座している。街中でこれが走っているのを見たらと思うと、軽くホラーである。

分類上は痛車なんだろうが、その、何というか、方向性が違う。何と違うのかわからないけど。

「こつちに来てからびっくりしました。彼らはちゃんとジョブをこなしますからね」

「四国の方ではこなさないの？」

「こなさないですねえ。向こうには悪意のない奴なら見逃す文化があります」

日本語のイントネーションがおかしいが、別にまー君は帰国子女とかではない。純血の高知生まれ四国男児である。しかし彼は話を盛るクセがあるので、彼の言うことは話半分に聞いておいた方が無難だ。

「東京のコップは偉いですよ。ワナビと同じくらい偉いです」

「ワナビって偉いの？」

「はい、コップと同じくらい偉いです」

「……はあ……」

「ぶふっ」

先ほどから運転席に座って、ハンドルを掴みながら運転ごっこをしていたのんちゃんが吹き出した。見ると、肩を震わせて口元を抑え、すっかりツボにはまった様子であった。今の会話のどこに面白いところがあったのか甚だ疑問である。

僕はふと目についた、フェンダーミラーにぶら下がっている、玉の飛び出たゾンビストラップを手に持ってみた。ころころと掌で転がしてみる。悪趣味なアクセサリーだ。運転中に何かの間違いで紐が切れ、目の前に落ちてきたらと思うとぞっとする。

「『ゴーストタクシー』は全く新しいビジネスモデルです。そもそも、タクシー業界にはいま一つ遊び心がない。街を走っているタクシーはみんな地味です。もっと面白味のある、パトカーや救急車のようなデザインのタクシーが走っていてもいいと思うのですが」

「紛らわし過ぎるだろそれは……」

「そこで、移動する必要はなくても、思わずみんなが乗りたくなるようなタクシーを作ろうと思いついたわけです。ファミリー、カッブル、おじいちゃんおばあちゃん、みんなが気軽に使えるような」

「そのターゲットを想定してなぜこのデザインになる！？」

「お化け屋敷はみんな大好きです」

「おじいちゃんおばあちゃんを脅かしてどうする。びっくりしすぎてポックリ逝っちゃったら、お化けが一体増えることになるぞ」

「さらに、走行中にもさまざまなアトラクションが車内で展開します。車がカーブを曲がると、CGで窓の外からお化けが襲ってくる映像が流れます」

「走行中に脅かすのかよ！ 危な過ぎるだろそれは！」

「とても良い出来ですよ。僕もときどきびっくりします」

「フロントウィンドウにも出てくるのかよ！ もうちょっと乗客の安全とか考えてくれ！ その企画自体がホラーだよ！」

「発想はなかなかいいと思うんですが、いま一つ集客率が良くないですねえ。まず誰もタクシーだと認識してくれないんですよ。で、タクシーを待っていていそうな人の前に停車すると逃げられる。子どもになら受けると思って、しょっちゅう道行く親子に声をかけてるんですが、子どもには泣き出されてしまうし、親には通報されてしまうし、散々です。最近は暇だから女子中学生を追い回したりしてます」

「実は申し開きのできない状況まで行ってるんじゃないかお前……」
「いいなあ、かつこいいなあ。運転したいです」

僕たちの話なんてまるで聞いていなかったかのように目を輝かしながらプップーとクラクションを鳴らし、タクシーを発信させようとするのんちゃん。能天気というか、マイペースな奴なのである。

僕はまー君との会話で荒んでいた心がほんの少しだけ癒された。

「ああ、ちよつとちよつと。やめてくださいよ、キー差したままなんですから、本当に動いちゃいます」

「というかのんちゃん、あんた免許持ってただろ。いまどき無免許運転とか飲酒運転とかやったら、『ついったあ』っていう怖いサイトで捕捉されて、さらに『まとめさいと』っていうもつと怖いサイトで晒されて全国的に有名になるんだぞ。知ってるか？」

「コップも動き出しますよ。ちよつとでも逃げようとしたらバキューンって、フロントガラスに穴が開きます」

「東京の警官はそんな簡単に発砲しねえよ。というか、四国でもしねえだろ」

「します。僕も仮免中に四発撃ち込まれました。今でも痕が残っています」

絶対に嘘だ。

「そつだ、せつだから今日は僕の営業についてきますか。『ゴーストタクシー』というアトラクションの素晴らしさを目の当たり

にすれば、きつとみなさんの考えも変わると思います」

「僕たちが乗ってたら他のお客が乗れないだろ。そもそも、君の仲間だと思われること自体が怖いんだけどな、僕としては」

「まあまあそう言わずに。のんちゃんと一緒に乗ってればそれだけでホラー要素も増しますし」

「失礼千万です！　こう見えてもわたくし、花も恥じらう乙女でござりましてよ！」

しゃべり方が変だ。

「いざ乗れって言われると、確かにすつごく乗りたくないな、痛車って……。道行く人々と目が合っただけで恥ずかしくて憤死しそうだ」

「それがだんだん快感になってくるんですよ」

ああ、僕の恥ずかしい姿をもっと見て……。という感じだろうか。とりあえず、ハマると怖そうなことだけはわかる。ぜひとも遠慮させていただきたい。

「一晩くらいいいじゃないですか。今なら友人待遇ということで十パーセントオフにしておきますよ」

「金とるんかい！」

「あ、いいこと思いつきました。もの凄いスピードで料金メーターの数値が上がっていくタクシー。これが一番スリルがあってドキドキするんじゃないでしょうか？」

というか普通にホラーだ。

早くも小説だとか創作だとかから話が逸れまくっており、読んでいてだんだん不安になる展開かと察しする。「あれ？　これ、小説家になりたい人の話だね？　ちゃんと本筋に戻るの？」という声が聞こえてきそう。僕だってそう思う。

ご安心召されよ、不安なのは語っている僕とて同じである。無責任だと思いになるかもしれないが、まあこの不安に揺られながらページをめくり続けるのも、ホラー小説としてはまた一興。

物語にしてもタクシーにしても、行きつく先がわからない乗り物

ほど恐ろしいものはない。

あなたもそう思うだろうか？

第1話 ゴーストタクシーにうってつけの夜 その2

で、案の定、泣かれた。

子どもに。

「うわあぁ〜ん、お化け怖いよ〜、怖いよ〜！」

「すいません、そこでもう降ろしてもらえますか。お金は払いますんで」

「も、申し訳ないです……」

ぎゃんぎゃん泣きわめく子どもの手を引っぱりながら、母親が一刻も早くタクシーから離れようとしている、そんな様子がサイドミラーから嫌というほど良く見えた。車両の中で三人は、誰からともなく悩ましい溜息をつくのだった。

「ほらね。こんな感じでフィニッシュ、一丁上がりです」

「なんでしてやったりみたいないなセリフなんだよ！ 何かをやり遂げたような顔をするな！ 嫌な奴だなホントにもうっ！」

「もっちーがぎゃあぎゃあうるさかったのも、子どもをおびえさせた原因の一つかと思うよ……」

「仕方ないだろ、怖かったんだから！」

まー君製作の『ゴーストタクシー』は走行中四方八方の窓ガラスに妖怪やら幽霊のCGが浮かび上がり、乗客を脅かすというものののだが、実際に目の当たりにするとその無駄なリアルさに心底驚かされた。頭が割れていたり、目玉がこぼれていたり、血しぶきが飛んできたり、そういうギミックに力入れるか、普通？ どこがファミリー向けだ。大人でもトラウマになるぞ。

僕たちはあの後、街に出て乗ってくれそうなお客を探していたのだが、案の定誰も彼もがゴーストタクシーを目にした瞬間に、クモの子を散らすようにさーっとその場からいなくなってしまう、とても商売どころではない状況であった。仕方なく僕がその辺の親子に声をかけ、頭を下げ下げ、やっとの思いで乗ってもらったのだが……

…。

「せっかくの僕の努力をフイにしやがって……。確かに凝った作りだし、ごく一部のマニアには受けそうだけど、一般人はどう考えても乗らないぞ。こんなもの」

「じゃあそのマニアをロックオン、狙い撃ちすればいいわけです。

きつと今の日本にはホラーファンは六千万人くらいいますから、広告を新聞などに載せれば注文が殺到するはず。寝る暇ありません」

「人口の半分がホラーファンかよ。どんな計算だ……」

「まさにどんな判断だ、金をドブにすてる気が、ですね」

金はもう相当額ドブに捨てていそうだけどな……。

「そもそも、なんでこんな怖いタクシー作っただんですか？ ホラーファンなのはわかりますけど、ここまでお金をかける情熱はちょっと、普通じゃない、っていうか……」

「確かに。どういう経緯でこんなものを造ろうと思いつたのか知りたいね」

「……………話せば長くなります」

長くななのか。それじゃやっぱいいや、と言おうとしたが、まー君はすでに語り口調で話し始めていた。失敗した、余計な事言うんじゃないかった。激しく後悔。

「あれは、僕が東京に飛び出してきたばかりの、まだピカピカのルーキー、大学新入生の頃でした。桜咲くフレッシュな季節、長くつらかった受験勉強から解放された僕は、さっそくホラー作品を愛好するサークルに入り、そこであるキュートでミステリアスな女性と出会いました」

（語り口調が気持ち悪いな。今のうちに逃げとくか）

（知りたいっていったのはもっちゃだよ。責任持って最後まで聞かべきだよ。……だけど私は先に帰らせてもらっけど）

（あつ、バカヤロ、逃げんじゃねえ）

（私は無関係、ナッシントウドウだよ！ これにてドロンさせていただくでござるよ、ニンニン）

（まー君のなんちゃって英語が移ってる！？　そしてドロンするって古いな！　何時代から来た古代人だよお前は。カンブリア期か）
（前から思ってたけど、もっちーは私を女扱いする気が皆無だね…）

「彼女は名前を　仮にみつちゃんとしておきましょう。みつちゃんはサークルの談笑の輪にも入らず、いつもサイレント無口で、部屋の片隅で本を読んでいるような女性でした。自分でホラー小説を書いているようでしたが、性格ははっきり言って暗く、周りのメンバーたちからはちょっと距離を置かれていたというのが実のところです。ひよんな時に僕は彼女と二人きりになって話す機会を得ました。そこで、僕は彼女のサプライジング、思わぬ一面を目にするこ
とになります」

（おいおい、そんなクールのテンプレートみたいな女は三次元の現実世界には存在しないって誰かこいつに教えてやれよ。手遅れになるぞ）

（いや、だから彼は三次元の話をしてるんだと思うんだけど）

（とりあえず帰ろう。もうなんかほっといても大丈夫だと思うぞこいつ、自分の世界入ってるし）

（ああ、だめだめ。もっちーはまー君を怒らせたことないの？　正直、あとあと怖いよお）

（な……なんだよ、どうなるってんだ）

（一週間くらい顔を合わせるたびに口の中でもごもご文句らしきものを呟いたり、会ったときに目を逸らしたり、私物の位置を微妙にずらしてきたりするの）

（うわっ、めんどくせえ……）

「みつちゃんはこう言いました、『ホラーの世界って、文章で読んだり映画で見たりするより、実際に体験してみたいですよね』って。僕はすぐにピンとききました。そう、彼女は僕をお化け屋敷デートに誘っている！　彼女がこんなに積極的な女性だとは僕は気付かなかった。さっそく僕はその週末の遊園地のチケットを二枚手に入れ

ました」

ひそひそ話す僕たちに構わず話し続けるまー君。この自己陶醉っぷりもそうだが、話の内容がすでにホラーである。主にそのみっちゃんという女性にとって。

以下、なるべく臨場感が伝わるように、まー君の語り口でお送りする。臨場感が伝わりと何かいいことがあるかと聞かれると疑問符が残るのだが。彼の話を伝える上で、突っ込みを入れるのが面倒くさくなったということもある。いや、そもそもこの話を伝える必要もあるのか？

第1話 ゴーストタクシーにうってつけの夜 その3

「僕はみつちゃんに、『イエスタデイの話、OKだよ。トウモロの朝九時に、大学の門で待ってる』とメールしました。するとすぐに返事が来て、『何の話ですか』と……。僕はみつちゃんはなんてうぶで恥ずかしがりやな女性なのかと、感激する思いでした。これが本当の奥ゆかしさ、ナイーヴさなのか、と。

当日みつちゃんは来ませんでした。おそらくあまりにシャイな性格だったんでしょう、僕と顔を合わせるのも怖れるくらいなんです。僕はみつちゃんがますます気に入りました。そこで彼女の家を直接訪ね、『レッツ、お化け屋敷！』と掛け声をかけ、彼女を自慢の愛車に乗せました（本当は親の車だったのですが、格好をつけたかったので彼女にそのことは黙っていました）。みつちゃんはじめきよとした顔をしていましたが、すぐにアイスブレイク、打ち解けて、僕とホラー映画や小説の話をはじめました。いいものです、女の子と話をすること。彼女はスプラッタ映画が大好きで、特に内臓や血肉が飛び散るベリーハードな作品を見るとたまらなくすかっとすると言っていました。正直僕よりアブノーマルな趣味です！ ワアオ！

そして僕と彼女は、遊園地を楽しみました。とはいってもお化け屋敷に十回入っただけで、他のアトラクションは見ませんでした。ど。ベリー最高でしたね、あそこのお化け屋敷は。トロツコ式だったんですが、出てくるお化けたちの容姿のグロテスクなこと！ すっかり彼女はお化けたちの虜です。僕はヘッドバンギングをしながらはしゃぐ喜ぶ彼女の姿を見て、ああ、連れてきて良かったなあ、と心から思ったものです。

しかし、その帰り道のことです。彼女は僕の運転する車のサイドシートで、ぼそりとうつぶさに呟きました。『普段からあんな風な車に乗ればなあ』と。

それからは、僕にとってはインベント、工夫に工夫を重ねる、いわば戦いの日々でした。どうすれば彼女を満足させられるか。どんなグロテスクな幽霊を用意すれば、彼女を喜ばすことができるか。それだけを考えながら、僕は（親の）車の改造を続けました。あの日、彼女が車のサイドシートに置いたまま忘れていった、遊園地で買ったゾンビのストラップ……、それを見るたびに、僕は彼女の笑顔を思い出し、自分を奮い立たせることができました。

そしてそれから一年の月日が経ちました。僕はついに、走行しているだけでお化け屋敷のようなスリルが味わえる、『スリラーカー』を開発することに成功。親は『そんな車もついらん』と快く僕に譲ってくれたので、晴れて僕は思いのままにデザインした自分の車を手に入れた、というわけです。ちなみに、車体に描かれている悪魔の女の子は、当然みっちゃんをモデルにしてイラストレーターさんに描いてもらったものです。

さて、こうして僕は満を持して彼女を迎えに行きました。そのときの僕の心境は、さながらペガサス、白馬に乗ってプリンセスを迎えに行く、一国のプリンスとでも申しましょうか。僕は問題なくシステム通りに現れるお化けたちを見て満足しながら、ゆっくりと彼女の家に向かいました。楽しみはなるべく焦らした方が大きくなるというのが僕の美学でして、その日も僕はあえて遠回りをして彼女の家に向かったんです。

しかし僕の車は、運悪く途中でコップに見とがめられ、それどころか僕は職務質問までされました。さすが東京のコップは違う、ロボコップばりの働きぶりだと感心したものです。僕はそこで『友人の車だ』という嘘をつき通し、なんとかお目こぼしをいただきました。東京のコップにも優しいところはありました。

で、ほうほうのていで彼女の家の前まで着いたとき、偶然にも彼女、お出かけから帰ってくる途中で、道の向こう側にいたわけです。僕の車をひと目見たらすっかり目を輝かせてしまって。今思うと不用心な話ですが、興奮していたのでしょう。右も左も見ずに、

僕の車に向かつて突っ込んできたんです。僕は思わず『デンジヤラス、スタップ!』と叫んだのですが、そこに運悪くトラックが……。

僕は彼女の体が吹っ飛ぶところを見てしまいました。人間の体ってこんなに軽くて小さいんだって、頭のどこかではそんな場違いな事を考えていました。だけど、僕にはどうすることもできなかった。僕はすぐに彼女に駆け寄りましたが……、そのときには、もう……。

僕は悔やみました。もっと早く僕が彼女の家に着いていたら、あのときコップにつかまりさえしなければ、いや、そもそもあんな遠回りなんてしていなければ、あのタイミングで彼女と会うことはなかったというのに……。

それ以来、僕は彼女に見せたくて造ったこの車で夜の街を走り続けました。また彼女が出てきてくれるように、『まあなんてステキでクレイジーな車、ぜひ私を乗せて』って言って、サイドシートに滑り込んできてくれるように……。彼女を隣に乗せてドライブするその日を、ただひたすら夢見ながら走りました。

そんなある日、ついに彼女は出ました。僕がたまたま彼女の家の近くを走っていたとき、青白い影が見えたので、何ごと? と思つて近づいてみたら……、それは紛れもなく、あの日と同じ輝いた目をした、彼女でした。

僕は夢見ごこちで彼女をサイドシートに乗せました。『ステキな車ですね』。彼女は第一声にそう言ってくれました。それは僕がドリームの中で何度も聞いたセリフで、思わずその幸せさに頭がクラクラしたのを覚えています。僕は早速車を発信させ、アトラクションを彼女に見せてあげました。もちろん、彼女はきやあきやあ言つて喜んでくれました。

それ以来彼女は、夜な夜な僕のドライブコースに現れては、青白い顔でそつと手を挙げて、車に乗りこんでくるようになりました。その頃から、僕はこの車を運転する、ということを一生の仕事にしようと考えていました。もっともつとステキなアトラクションを作り、もっともつとステキなドライブビングテクニクを見せて、彼女

を楽しませようと。

実はこの車をタクシーにしようと言いだしたのも彼女です。タクシーの乗客にはさまざまな人種があり、当然さまざまなバックグラウンド、さまざまな人生のシーンがありますからねえ。彼女は僕の口から語られる、そんな人々のストーリーを聞くのを楽しみにしていました。何しろ彼女は、生きているほとんどの人間と直接話すことができないんですから。そんなわけでこの車は、昼は普通のタクシー、夜は彼女専用のリムジンと化したわけです。そして僕は、言わば彼女専属のドライバーです。

僕と彼女は、幽霊たちの飛び交う車内で、色々な話をしました。彼女がホラー小説を書くのが好きだったことは先ほどお話ししたとおりですが、彼女は僕にも『ホラー小説を書いてみてほしい』と持ちかけたわけです。そんなわけで、今でも僕は彼女にアイデアをもらいながらホラー小説を書いている、というわけです。この車内で、毎夜毎夜、彼女は僕に、自分の書きたかった小説のネタを提供するというわけです。彼女がこの世から消え去る時は、そのネタが全て尽きたときだ、って言ってました。

これで僕の話は終わりです。ベリーロングな時間付き合わせてしまって、申し訳ありません。この話をしたのはお二人が初めてですよ。聞いてもらえてハッピーでした、ありがとうございます」

(……おい、どうすんだこの空気。ちゃんと最後まで聞けって言っただのはのんちゃんだろ、責任取れよ)

(そんなこと言っても、こんなに重い話だとは思わなかったのよ……。ていうか、死んだ彼女と毎晩会つてるとか予想以上にまー君ってヤバい人だったね。これは、明らかに逃げるタイミングを逃したとしか。どうする?)

(まあちよつと変なモンが見えるくらいなら無害だから、今まで通り普通に付き合えばいいと思うんだけど……。話の出だしからして勘違いっぷりがやばいからな、彼女の死に関しても言っていること

が真実かどうかからん。万が一ということもある。とりあえず、その辺で降ろしてもらって、その後は全力で逃げよう」

（うん、それがいいね。さわらぬ神にはたたりナッシング）

（だから変な英語移ってるぞ……）

「うん？ どうしました？」

（ななななんでもっ！）

突然呼ばれて、思い切り不自然な反応を返してしまった。まずい、疑われると思いつつ、ふたたび額を寄せ合う僕たち。いやほんと、どうすればいいの。

「あつ！ そんなところにいたの、みつちゃん！」

「ひいっ！？」

まー君が僕の座っている助手席の足下を見てそんなことを叫ぶものだから、僕は思わずその場から勢いよく立ち上がって頭を天井にしたたか打ちつけた。足下にはもちろん誰もいないし、何もない（備品のドクロ型ダストボックスは置いてあるけど）。彼は「ははは、冗談ですよ」と笑ったが、目が笑っていない気がする。僕は居心地が悪くなり、一刻も早く車から降りたい気分だった。おいおい、なんだよこの状況。なんだかんだでまー君自身が一番ホラーだったってオチかい。

「ま、まー君？ 僕たち、そ、そろそろ……」

「おっと、そろそろ時間だ」

まー君は僕に最後まで言わず、ぐんつと勢いよくアクセルを踏み込んだ。止まっていた車が急発進する。「ひよええっ！？」後部座席でのんちゃんが激しくバウンドした。さながらバランスボールである。

「まー君！ どこに行くつもりだ？ そろそろ降ろしてほしいんだけど」

「あー、もうちょっとだけ付き合ってくださいよー。もうすぐ夜の十一時でしょう、そろそろみっちゃんが出てくる頃なんです。お二人にも紹介しますよ、綺麗な子なんですよー」

「ひえええつ、棒読みが怖い!!」

まー君はどんどん車のスピードを上げた。僕はまー君の顔を見るやばい、目がイツちゃってるぞう。どうする、どうする……。

「みっちゃん発想力は凄いですよ。きつとお二人もワナビとして気に入ると思います。なにしろ、すつごくエグいこと、次から次に思いつきますからねえ、ふふふ。そうだ、きつと彼女もお二人を見て何か凄いことを思いつくかも。これは面白いことになりそうだなあ……」

「ぎゃーっ! やめてえ、怖いいいい! 出してええええ!!」
「ぐおおおお」

のんちゃん、顔面を崩壊させてのマジ泣きである。正直僕も途中でまで怖がっていたが、彼女の泣き声を聞くと正直ドン引きの気持ちの方が勝ってしまった。「おおおおおお」などと鶏の首でも絞めたような声を出されると、むしろまー君よりのんちゃんの方が怖くなってくるぞ。少なくともこの車内に出てくるお化けの中ではダントツの一位だ。

いやはや、僕が漫画家じゃなくて本当に良かった。漫画でこの状況を再現するならば、ならばのんちゃんの壮絶な表情を仔細に描かねばならないんだからな、きつと苦労するだろう。いや、あるいはここでほぼ確実に笑いを取れるからむしろお得なんだろうか?

まあ、そんな彼女の表情である。年頃の女の子に向かってひどい言いぐさではあるが、まあここがたぶんこの話の中で一番面白い部分だからあえて詳細に描写させていたのだ。え、ここが一番面白いとか本気が、って? 申し訳ないが本気である。そもそも僕はのんちゃんが世界で一番可愛くて面白いと思ってるから、その比較精度のほどは定かなものではないが。まったく、本当にひどい言いぐさである(棒読み)。

「もうすぐですよ。その角を曲がれば、そこはすぐ彼女の家です。今日も僕のことを待っていてくれるかなあ、みっちゃん」

「やめてえええ、うおおおお」

カーブを曲がる際、巨大なお化けの映像が迫ってきたが、今はC Gのお化けより現実に現れる幽霊の方が恐ろしい（のんちゃんもつと恐ろしい）。僕は深夜の薄暗い住宅街、その歩道に本当に誰かがいるのか、じつと窓の外を注視した。

そしてはつと息を飲む。そこには――、たしかに青白い顔をした若くて美しい女性が立っていたのである。

「マジかよ……」

「ひ、ひいいい……」

ドタリ。後部座席ののんちゃんが泡を吹いて倒れ込んだ音である。静かになって良かった。僕は暗闇の中に立ち尽くす女性をじつと睨み続ける。ここで目を逸らしたら、魂とかなんとか、よくわからないけど大事なものを抜き取られてしまいそうな気がした。

「く、来るなら来おい……」

僕はわなわなと震えていたと思う。まー君の車は女性の隣にちよつど駐車した。彼女の細くてしなやかな、白い腕がドアにかかる。僕はゴクリと唾を飲み下した。

しかし、ドアが開くよりサイドウィンドウの方が先に開いた。まー君が開けたのだ。そして、女性は僕の顔を覗き込んで、一言、こう告げたのである。

「ごめんなさい、そこは私の指定席なんです。幽霊は、自分の居場所にとだわるんですよ」

第1話 ゴーストタクシーにうってつけの夜 その4

「そもそも僕は一言も彼女が死んだなんて言っていないせんが？」

ぬけぬけと抜かしながら運転するまー君であつた。く、悔しい……。僕は真つ赤になつた顔を俯いて必死に隠しながら、拳をプルプルと震わせていた。

「じゃ、じゃあ、さっきの話はウソ……？ ひどいなあ。純真な私たちを騙すだなんて」

怒り心頭なのんちゃんである。まー君はいつになくここにこと眩しい笑顔。その笑顔の半分くらいは僕たちに、もう半分くらいは助手席のみっちゃん、みちるさんへと向けられていた。

「いいえ、一切ウソは混ぜていません。僕がさっき言ったことも、今お二人が見ている光景も、どちらも紛うことなき真実です。ただ、少しだけ言い方に变化があるだけです。これがホントの叙述トリック、アツと驚く真相つてやつですよ」

「ええ、でも彼女はトラックに轢かれたつて……」

「『運悪くトラックが……、そして彼女の体が吹っ飛んだ』っていう部分ですね。あれ、実は『運悪くトラックが停まっていた』の略だったんですよ。彼女は僕の車に夢中で気付かなかったんです。で、自分でトラックの車体に思い切りタックルしていった、と。僕が駆け寄つたときには、もう、手の骨にヒビの入るほどの怪我をしてしまつていて、なんと三日間の入院。しばらく『病院から』出ることができなかったわけですよ」

「アホだな……」

「アホですね……」

思わず言つてしまった。みちるさんの顔が見る見る赤く染まつていくのに気付いて、僕は慌てて話題を次に移した。

「『彼女が生きた人間と会話できない』って言つてたのは？」

「『殆ど』がついていましたよね。要はそれくらいシャイだつてい

う意味です」

「さすがにオーバーですよ、それは。私だって知らない人と話すことくらいできます。人見知り、頑張って克服したんだから」

ぷくーっと膨れるみちるさんである。おお、なんというか、可愛い女性だ。こうして見ると、とても一度幽霊と間違えた相手とは思えない。

「『この世から消え去るのはネタが出なくなったときだ』とか言っていましたけど、あれも」

「そのくらい、次から次にアイデアが出てくるっていう意味ですよ。私、あのトラックにぶつかった日から、頭のうちどころが悪かった、もとい良かったのでしょう、なんだか空から降ってくる、あるいは水が沸いてくるかのように、アイデアを絶えず思いつくようになったんです。いわゆる怪我の巧妙、というやつですかね」

「なるほどね。でも、それじゃあ自分で書かれればいいのでは？」

僕は質問する。するとみちるさんは、右の掌に、とても愛おしいものを見るようなまなざしを向けた。

「残念ながら、こんこんと湧きだすアイデアの対価として、私は書く能力を失いました。短時間なら良いのですが、長時間ペンを持ちたりキーボードを打ち続けると、痛みが走るようになってしまったんです。そこで、私たちは、二人で一人の作家になることに決めました」

「それが『道塚魔太郎』というわけか……。『道塚』って、ひよつとしてみちるさんの『道』なのかな。それじゃあ、みっちゃんって結局仮名じゃなかったんだね」

「私が毎夜、このタクシーの中で、彼の用意してくれた幽霊たちを眺めながら、彼にアイデアをつぶさに話す。彼も彼で、お昼に乘せたお客さんのエピソードを私に聞かせてくれる。こんなタクシーですから、乗ってくるお客さんはおかしな人ばかりでしょう。だからこそ、私はそうした、一風変わった人たちの話を聞きたかったんです。そして、私は彼から聞いた人々のエピソードから、新しい物語

のアイデアを練り上げ、次の夜同じようにここで彼に話す……。もうずっとそんなことを続けてきました」

「帰ってから出勤時間までずっと執筆してるから、殆ど寝る時間が取れなくて……。けっこう苦労しましたよ。ただ、それでも彼女の役に立てることはとてもハッピー、嬉しかった」

「それはやつぱり、みちるさんに怪我をさせてしまったという罪悪感から……。なんでしょうか」

のんちゃんが尋ねる。もう彼女は怒ってはいない。相変わらず幽霊があちこちから立ちのぼっているクセに、車内にはどこか温かい雰囲気が漂っていた。

「それもちろんありました。なんだかんだで、みっちゃんが怪我をしてしまったのは僕の責任だから……。ずいぶんとその事で思い悩みもしましたよ。なので、この執筆したり、エピソードを蒐集したりという行為は僕にとつて贖罪でもあります。ただ、……。その、それ以上に、僕が彼女にいかれちまってたつていうのもあります」

「まったく、リア充爆発しろっ！」

照れて顔を赤くして笑うまー君。ここまで、かなりぶっちゃけた内容の話をしているのに、二人がまったく動じる様子が無いということは、もう二人の間ではたっぷり話し合いが行われ、すっかりお互いわかり合っているということなのだろう。そして、すでにお互いがお互いを許し合っている。

まったく本当に、リア充爆発しろ、だ。

まあ、確かに。

自分のためだけに、これだけとんでもない装置を搭載した車なんて造られたら、さすがに惚れないわけにはいかないかもしれないな。僕は目の前を飛び交うお化けたちを眺めながらそう思った。

「このドライブはいつまで続けるんだ？ みちるさんがこの車を気に入ってるのはわかるけどさ、さすがにこの先ずっと、というわけにもいくまい。それに、彼女から直接アイデアを聞きながら書いた方が効率がいいだろう。いつかはそういう方式に切り替えないと」

「そうですね。もちろん、それはわかっています。これ以上彼に負担をかけることは、私としても本意ではありません」

「そこで提案なんですけど、実は」

「あ、そろそろワナビ荘が見えてきました」

微妙に空気の読めないのんちゃんが指を差す。一晩のドライブを終え、朝日が差し込む逆光の中、ワナビ荘はいつもよりも眩しく照り映えていた。

「DJが心配してるかもしれないね。急いでご飯を作る支度をしないと」

「ああ、今日はまー君が朝食当番か。結局昨日は寝てないけど、大丈夫？」

「大丈夫、慣れてますから。皆さんこそ大丈夫ですか？今日はホリデイです、ゆっくりお休みになってください」

「ふああ、確かに一晩寝なかったからクタクタだぜ……。よし、のんちゃん、今日はぐすぐずと昼まで寝るとするか」

「ええつ、私ともっちーが昼までぐちよぐちよと同衾！？そ、そんなあ、アツアツなお二人を見てもっちーも燃え上がっちゃったの？ 恥ずかしい……。私、まだ心の準備がぁ……。」

「そう言いながら早速シャツのボタンを外すな、これこそ軽くホラーだぞ。お前はさっさともう一人の朝食当番であるリョーコを起こして来い」

「リョーコさんならこの時間はまだ爆睡してるはずですよ。よし、必殺百合百合拳法であられもない姿のリョーコさんを襲って来ますっ！」

「嫌な起こし方だな……」

車から下りてすっかり日ののぼった眩しい空を見上げる。お化けには都合の悪い時間だ、『ゴーストタクシー』もさっさとアトラクション機能を切った方がいいだろう。朝日の中の幽霊だなんて、なんだか興ざめで、滑稽である。

ふと気になり、僕は車の中を覗いてみた。助手席には目玉の飛び

出したゾンビのストラップが落ちており、それ以外は空っぽだった。人が降りたような形跡もない。まー君は、とつくに車外に降りて、青空を眺めながら一人でタバコを吸っている。

「……一夜の夢、か」

僕は呟くと、昨日の分までゆっくり休むべく、ひとり一階の自室に踏み入った。上階からはどんな起こし方をしたのやら、のんちゃんとりょーコがドタバタと喧騒を繰り広げている。りょーコは恐ろしく寝起きが悪いから気をつけて欲しいのだが、のんちゃんはわかってやっているだけに性質が悪い。

まあ、いい。とるものもとりのあえず、僕はワンルームの片隅に寄せてある簡易ベッドに倒れ込んだのち、もそりと声を出した。

「ただいま」

気付くとすでに薄暗くなっており、時計を確認するとなんと午後六時。「やばいつ、寝過ぎた！」僕ははっと飛び起きて、大慌てで台所へ向かう。ワナビ荘では昼は各自自由にとってくる決まりになっているが、夜はきちんと担当が決まっており、今日はそれが僕だったのだ。加えて、朝はすぐに眠り込んでしまったので、朝食も抜かしてしまった。大失態である。これではDJにもみんなにも合わす顔が無い……。僕の額から嫌な汗が吹き出した。

「遅れてすみません！　すぐに手伝います！」

食卓の扉を開いた僕は、次の瞬間には呆気にとられてぽかんと口を開くことになる。目の前には、すでに完成した美味そうな料理が出来上がっていたのだ。

「DJ、これはどういう……」

「あら、もっちゃん、良く寝ていましたね。お早うございます、もとい、お遅うございます、かしら」

そう言いながらお盆を持って食卓に入ってきたのは、白くて細い手足の、昨夜の女性――、みちるさんであった。鳩が豆鉄砲を食らった顔というのは、その時の僕の顔のために先人が残してくれた言

葉であろう。

「なんだ、あのときのまー君の提案っていうのは、そういうことか。ああらみっちゃん、もうお味噌汁持って行ってくれたの、助かるわー。働き者ねえ、うちのもっちゃーなんかとは大違い。いっそもっちゃー追い出してあんたがここに住む？ ううん、もっちゃーなんて可愛く呼んでやる必要ないわ、モチ男で十分よ。それがあいつの本名なんだから」

「モチ男さん……ですか。変わってるけど、なんだか素敵なお名前ですね」

「信じるな信じるな。その男の言うことは九割方嘘だから」

「とは言え、DJに迷惑をかけてしまったことには変わりが無い。

僕は素直にDJに頭を下げる。

「すみません、DJ。イゴキヲツケマス」

「ガツデム！ 遅刻魔のお前に食わすメシなんかねえよ！ このワナビ荘を出ていくかあたしにケツを突き出すか、どっちかにしな！」
DJがドスの利いた声で凄む。少しだけ本気で怖いから困る。

結局、DJの存在が一番のホラーでした、というオチ。

「おつ、すごいご馳走ですね。DJレシピとみっちゃんの家庭料理、夢のコラボレートですか」

「おほつ、豪華な料理！ おいしそーだわー。リア充を見せつけられてメシマズでありながら、メシがいつもよりうまいとはこれいかに。なんちゃって」

リョーコも新しい女性が入ってきて嬉しそうだ。

「ところでもっちゃー、あんた爆睡してて今朝のあたしのご飯食べなかったけど、アレどーゆーこと？ ちゃんと説明してほしいんですけど」

続々と住人が集まってくる。食卓の人口密度が一気に上がった。DJによる叱責がその後うやむやになってしまったのはありがたかったが、リョーコによるさらに厳しい追求には正直参った。当然僕は姦しい女性たちと遅しい（言葉遣いだけ）女性らしい連中に追い

やられ、一番端っこの席で縮こまりながら料理をつつくはめに。つくづく食べものの恨みというものは恐ろしい。

ともあれ。

賑やかなワナビ荘が、またいつそう賑やかに、騒がしくなったことは間違いなさそうだった。

第2話 腐女子よ、マリーゴールドを抱け その1

「腐女子って生き物はね。最強なのよ」

りん、と風鈴が鳴る。

暑い暑い、夏のある日曜日の午後である。

リョーコは、筋金入りの腐女子である。

おまけにブラコンでもある。

弟大好き娘なのである。

「ユウジはねえ。あたしがいないとなーんもできないの。だから、あたしがなんでもやってあげてるの。そう、それこそ日常の世話から一人じやどーしようもないことまで、なーんでも、ね」

リョーコの弟、ユウジ君は重い病気で、ワナビ荘から徒歩で十分ほどの病院に、ずっと入院を繰り返している。将来的にも、元気に一人で歩き回れるまでに治癒するかは怪しい、と医者から言われている。今も病院に短期入院中だ。

だからリョーコは、一日のうちけっこうな時間を病院で過ごす。どんなに短い時間だろうと、毎日必ず弟の顔を見に行っているようだ。ワナビ荘に帰ってくることなく、本当に夜までユウジ君のお見舞いに行っている日もあるくらいだ。

「どーしようもないことまでって……というかりョーコ。お前、弟をそーゆー目で見てないだろうな」

「そーゆー目って、どーゆー目？」

「腐女子的目線だよ。他の入院患者と脳内で絡ませるとか、そういうことはしてないだろうな」

「あー、ダメダメ。全然そういう対象じゃないわ」

掌をひらひらと振って否定するリョーコ。よかった、さすがにそこまで腐ってはいないか……。

「入院患者はオッサンばかりだからねー、あたしオッサンは対象外なの。でも聞いて、あのねえ、ユウジには三日に一回は必ずお見舞いに来てくれる男友だちがいるのよ」

「ぐつちよぐちよじゃん！ うわあ、すっげえ嬉しそう！ やめて！ その幸せそうなとろんとした目をやめて！」

「一緒に庭先でキャッチボールとかしてくれてるわー。二人仲良くタマを扱い、サオを振る！ もうその響きだけでお腹いっぱいじゃわー！ ふん！ ふん！」

「もうただの痴女だこのひと！」

「でもねえ、最近ユウジったら、学校で仲よしの女ができたつばいのよ！ 異性の恋人なんてアブノーマルな趣味はこのあたしが許せねー。矯正してやる！」

「世界を自分中心に回してるタイプだこのひと！」

「あら、ずいぶん賑やかそうですね。何の話をしてるんですか」

食卓でくつろいでいた僕たちに声をかけたのは、キッチンから出てきたみちるさんであった。彼女は先日的一件より、まー君と共同執筆を行うためにこのワナビ荘に頻繁に出入りするようになった。

だが、さすがに泊まっていくような、それこそ『不純異性交友』と間違われそうな行為は謹んで、夜はちゃんと帰る。その辺の貞操観念はしっかりしている女性である。

誰かさんとは大違いだ。

「猥談です。具体的にはもっちーが買った今月の新作AVの批評会を行っております」

「いつ僕がそんな話をした……」

「制服もの一本とOLもの一本かー。もっちーは高校時代に恋愛できなかつたことによる未練と社会人のおねーさんへの憧れが性欲に結びついていると結論付けられます。やーらしー」

「結論づけられますじゃねえ！ 制服とスーツ姿のお姉さんは全世代共通の男のロマンなんだよ！ あと何で僕の購買履歴知ってるの！？」

「あ、それはそうとねもっちー、あたしは彼氏募集中で処女なんだよ」

「ここで突然の激白！？ ちょっと嬉しいけど！　せめてもうちょっと恥じらいながら言って！」

みちるさんはすっかり困った感じの苦笑いで立ち止まったままである。

りん、と風鈴が鳴る。

僕は食卓で城島ダイヤの新刊小説を読んでいた。氏の作品は相変わらずものすごく面白いので、食い入るように活字を追っていたのだが、姦しいリョーコが向かい側に座ってしまっただけはその集中力も続くはずがなかった。

近日、どうしても出たい同人イベントがあるとかで、リョーコはテーブルの上で新刊の準備を行っていた。具体的には『青春バット』という野球漫画のオンラインイベントであり、今は同人誌のネームを切っているところだった。今期流行したアニメの鉄板カップリングのクラミ本がメインらしい。リョーコ、絵は素晴らしく上手くて色っぽいのだが、残念ながらBL関係に僕の触手は動かないのだった。ちなみにリョーコのサークル、その界限では相当な人気を誇る壁サークルらしい（壁サークルとは、壁を背にした大きめのブースを宛がってもらえる、規模の大きなサークルのことである）、と聞いたことがある。

ちなみにワナビの中にこうした同人活動を行っている人は多い。同人から商業に移った作家も多く、各種イベントはプロにとってもアマにとっても格好の発表の場となっている。正直、僕はコミックマーケット以外はよくわからないんだけど。

「ふー、暑い暑い。今日は暑くてうんざりするわあ。このTシャツの下は何も着てないんだけど、思い切って脱いじゃいたいくらいだねー」

「だねーじゃねえよ、シャツの胸元を引っぱってちらっちらっところち目配せをするな！　おっぱいを見せるな、男の弱点を突くな

っ！」

「あ、それはそうと私は男の人におっぱいを触られたことはありません」

「だからもうちょっと恥じらいながら言って！」

カフカは湿気に弱いらしく、リビングのソファの上で舌を出しながら、だらしなく寝そべっていた。

暑い暑い、真夏の午後のことである。

「ほんじゃーあたしはユウジのところ行ってくるからー」

「おー、気をつけてなー」

「気をつける暇もないくらい近いわよー、病院」

ひらひらと手を振って立ち去るリョーコ。夏の陽炎がゆらゆらと地面から立ちのぼり、あっという間に小さくなる彼女の姿をかき消した。

さて、と。僕も夜まで執筆でもするか、とワナビ荘へ戻ろうとしたとき、

「ちよっとお伺いしたいんですけどー！」

元気の良い声が僕を呼び止めた。

振り返ると、そこには背の小さくて髪の高い、セーラー服を着た女の子、つまるところ、女子高生が立っていた。

「D」さんの経営してるワナビ荘っていうアパートはどこですか！」

「ワナビ荘？ それならここだけど」

「ひょええ！ これが噂のワナビ荘！ 想像していた以上にボロくて小さいんですね！」

「そりゃ悪かったな……」

自分の住み家をボロ呼ばわりされて喜ぶ人はいないだろう。そんなわけで僕はちよっただけむっとして、女の子を無視して部屋に戻ろうとした。

「あ、すみませんすみません！ ひょっとしてお兄さんワナビ荘の

住人さんでしたか、大変失礼しました！ いやー、よく見ると素敵な建物ですね。錆びた柱とかヒビの入った壁に独特の味があります」「無理してフォローしなくていい……というか誰、あんた」

「これはこれは申し遅れました、不肖わたくし、名前を薬師寺ハルと言います！ ワナビになるのが夢です。DJさんにはいつもお世話になっています」

「ワナビになるのが夢って……別にそんなの今この瞬間にでもなれるんじゃない……」

「あらあ、ハルちゃんじゃないの！ よく来たわねー、いらっしやーい！」

「DJ！ やつと会えましたー！」

玄関先で騒いでいた僕たちに気付いたのであろう、顔を出したDJにハルが助走をつけて跳びついた。ボキツと音がして「ぐおおっ」とDJがわりと本気で苦しそうな表情をしたため、少しだけ心配になったが、すぐに「いいコねえ」と笑って頭を撫で始めたので僕もほっと胸を撫でおろした。眉がひくひくしてた気もするけど。

「このコには一度おいでって誘ってたのよ、アタシのアパートへね。可愛いでしょー、うちのクラブにたまにお友達と遊びに来るのよ。ユウジくんを連れてきたこともあったわね」

「ユウジくん？」

なんかやたら身近で聞く名前だけど。

「ついさっきもユウジさんのお見舞いに行ってきたところです。ここにユウジさんのお姉さんが住んでらっしゃると聞きました。リョーコさんという方なんです」

「ああ……」

だとすると、この子がリョーコの言ってた「弟と仲良くしてる許すまじき女の子」なのかなあ……。

顔合わせなくて良かった……。絶妙なタイミング。できるならこのまま一生会わないでいてほしいものだなあ。

「私もワナビになってみたいんです。ぜひここに住ませて下さい！」

「ああん!？」

思ったそばからとんでもない問題発言を耳にして、勢いよくハルを二度見する僕。

「あらー、嬉しいこと言ってくれるじゃないのー。でもねえ、今のワナビ荘はいいじゃないのよ、残念ながら。ここじゃなくてもワナビはやれるから、自分のおうちで頑張rinaさい」

というか普通そうだと思うが。

しかし、ハルは何を思ったか僕の方をじっと見上げてきた。な、なんだよ。やる気か。僕は思わず頭二つ低いハル相手にファイティングポーズである。

ハルはDJに向き直ると、にかつと笑って悪びれることなくこう言った。

「それじゃあ、このお兄さんと同じ部屋に住みます!」

第2話 腐女子よ、マリーゴールドを抱け その2

「……っか、お前、あれなの。ユウジ君とは恋人とかそういう感じなの。それだったらうちのリョーコに殺されると思うんだけど」
「恋人とかそーゆーのはないです。ただのオタ友というやつです。たまたま好きな漫画が一緒でして、病弱なユウジさんのためにグッズとかを代わりに買いに行つてあげてるんです」

あっけらかんと言うハルの雰囲気からは恋愛感情は読み取れない。本当にそういう対象ではないのだろう。

僕はふたたびワナビ荘のダイニングに戻り、今度はDJと共にハルと対面していた。みっちゃんが麦茶を運んでくると「ありがとうございます」とぺこんと頭を下げるハル。一応の礼節は弁えているみたいだ。

リョーコが帰ってきたらなんて言うか、非常にハラハラするけど。
「なんでお前なの？ 男友だちに頼んでもいいんじゃない。あるいはリョーコとか」

「うちのクラス、非オタクが多いんです。メイトとかゲマズにうつに一般人を行かせられませんから。お姉さんは自分をそっち方向に染めようとしてくるので極力オタ話は振らないようにしてるとか」

「ああ、納得……」

「おつ、ユウジさんの写真。ダイニングにまで飾ってあるなんて、本当にお姉さんに愛されてるんですねー」

ハルは共用テレビの上に置かれた写真立てに手を伸ばす。そこには病院のベンチに座り、両手でVサインを作ったユウジ君と、その肩に手を乗せているリョーコが写っていた。ユウジ君の膝には、古びたグローブが乗せられている。

「ユウジさん、野球が大好きだって言っていました。小学生のころは少年団に入っていて、それなりに活躍できたのに、どんどん体調が悪くなって、今ではキャッチボールもままならないって残念がつて

ます」

「ああ、それは聞いたことがあるな。このダブルVサインは試合に勝ったときに友だちと必ずやった『勝利の儀式』だとか。ってことは、今でも一緒にキャッチボールをしていている友だちはその頃のチームメイトか。切ないな」

「ただ、お姉さんがその様子を涎を垂らしながら毎回見に来るのが気になるって言っていました」

「嫌な姉だ……」

「私たちが好きな漫画っていうのも、実は『青春バット』っていう名前の野球ものなんですよね。主人公が病弱な少年だけど甲子園を目指すっていう内容で、ユウジさんと重なるところがあります」

「あ、さつきリョーコちゃんが描いてたどぎついBL同人誌もその漫画だったみたいよ」

「そっぴやそうだったな……」

せつかくのいい話をいちいちぶち壊す姉である。

「うーん、うちに住みたいって言ってくれるのは嬉しいし、もっちーに遠慮することなく部屋を使ってくれてもアタシとしては全然構わないんだけど」

「いや、少しは構ってくれよ……」

「問題は、リョーコちゃんがいって言うかどうか……。ほら、あのコ度を越したブラコンじゃない。たとえ恋人じゃない、ただの友達だって知っても、あなたがここに居つくことにいい顔をしないと思うのよね。そんな居心地の悪い環境で過ごすことは、お互いのためによくないと思うの」

DJは諭すように言う。こういうあたりは年の功というか、なかなかに説得力のある口ぶりだった。確かに、僕も修羅場を見たくはないな。

かたや弟、かたやオタ友。恋人でも何でもない男を取りあう女たち。

それはそれで漫画みたいで萌えるけど。うん。

「うーん、わかりました。それじゃあもっちーさんの部屋にずっと隠れて過ごします」

「いやだから僕の人権は……」

「ひよつとして、何か家に帰りたくない理由でもあるの？」

「えっ……」

DJの思わぬ切込みに、思わず黙り込んでしまうハル。どうやら図星だったようだ。年頃の娘の家出先に、たまたま仲のいいDJのアパートを選んだというところか。

「そ、その……そんなんじゃないくて、私は……」

そのまま声が小さくなり、俯いたまま言葉を紡げなくなったハル。「ま、いいわ。しばらくここにいていいわよ。ただし夜には帰ること、いいわね？」そう言つてDJは奥へ引つ込んだ。ハルは僕と二人きりになってもまだ俯き続けている。「なあ、もう顔上げろよ。」

これ以上突っ込んで聞くことはしないからさ、なあ？」僕が声をかけると、ハルはようやくぼそりと呟いた。

「……なんです」

「は？」

「私のお母さんが、『青春バット』の邪道カップリング好きなんです！ 私はキャッチャーの主人公×ピッチャーの親友が好きなのに、お母さんはレフトのキャラと組ませるんです！ だから、だから私、それで大ゲンカして、家を飛び出しちゃったんです！」

「お前も腐女子だったんかいっ！」

満を持しての僕の突っ込みは、はるか三件隣の家屋にまで響き渡ったという。

真夏の日曜日、午後のことである。

第2話 腐女子よ、マリーゴールドを抱け その3

「それでー、そのときユウジが言うのよー。姉さんが作ってくれたものならなんでも美味しいよ、って。そんなあー、お世辞を言える歳になったのねー、なんて思いながらも、本当にとっても美味しそうに食べてくれるからついついあたしも嬉しくなっちゃってえー」

その夜。病院から帰ってきたリョーコはダイニングにて食事中、弟ののろけ話を延々一時間は続けていた。おかげで夕飯のシチュウがすっかり冷めてしまっているが気付いてすらいらないようだ。

「でもお、あたしの前にお見舞いに来た子がいたらしくて、お花が置いてあったのよ。男の友だちかな？　って思ったら、ハルっていう例のユウジと最近仲いいっていう女らしくてさあ」

手に持っていたリングをぎゅっと握り潰すリョーコ。「へ、へえー」と返事をしながらも僕は背中に嫌な汗を一リットルくらい流していた。

「ま、ユウジも年頃なんだから同年代のコに興味持つのはわかるんだけど、理屈では割り切れないっていうか……もっと同性に目を向けるべきっていうか……ん」

そこでリョーコは何か気付いたようにハッと目を見開き、鼻をすんすんさせ始めた。

「……女の匂いがする」

僕とDはぎくりと背筋を強張らせた。「あ、そろそろ洗い物終わらせなくちゃ」とそそくさと出ていくD。おい、ずるいぞオッサン。

「あ、わかりますか？　実は私、新しい香水を試してみるところなんです。『学園セブン』のヒサヤくんの香りっていうのが出たばかりで……」

「あんたじゃない」

一言のもとに切り捨てられて落ち込むのんちゃんである。元気出

せ、僕はお前の味方だ。

「もつところ、馴染みのない女の気配がするっていうか……嗅いだことない人間の匂いっていうか……」

「あ、それって私かもしれません。ほら、最近来たばかりですから。ちよつと香りの強いシャンプー使ってますし」

みつちゃん、ナイスフローである。

「ふうん……」

そう言いながらも依然疑わしそうにダイニングを見回すリョーコ。その目が、はたとテレビの上の写真立てを見たところで止まる。まさか。

「ユウジの写真、動いてる。斜め三十度くらい、私が出る前より傾いてる」

知るかそんなん！

「ほ、ほら、そういえば昼に地震あったし！　ちよつとだけそれで動いちゃったんじゃないかな！　ね、DJ！」

「そ、そうね！　けつこう大きい地震だったわね！　ブホホホホ！」

大声でごまかした後、アタシに振るな！　と中指を突き立てるDJ。不動明王のような形相である。

「地震なんてなかったと思うけど……」

「そ、そうだリョーコ、僕ちよつと絵の描き方教えてほしいんだけど！　最近ちよつとBLに興味持ってて、男と男のクラミってやつをぜひ！」

「ええつ本当！？」

ここでリョーコの目の色が思いつき変わった。しまった！　地雷を踏んだ！

「そっかー、もっちーもついに目覚めたかー。いやーあたしはずっともっちーには素質あるって思ってたんだよねー。よくぞ言った、偉いぞもっちー！　ようし、それじゃあ今からあたしの部屋で徹夜の猛特訓だ！」

「ひ、ひいいいっ！？　目が燃えてる！　この人怖いいいいい！」

両手を合わせて御愁傷さま、と呟く他の面々である。ああ、僕の貴い犠牲をどうか忘れないで……。襟を引きずられてリョーコの部屋に連行される僕の悲鳴は、はるか三件隣の家屋にまで響き渡ったという。

というか近隣の皆さま、ごめんなさい。ワナビ荘は今日もにぎやかです。

さて、そんなこんなで夜。

ようやくリョーコから解放されて、ほうほうのていで自室まで逃げ帰ってきた僕は、勢いよくベッドに倒れ込もうとして、そこにいた何者かが、

「わ　　っ!？」

と驚愕の叫びを上げるまでその存在に気付かず、結果的にその何者かの上に思いきり覆い被さる形になってしまった。

「な　な　な　にするんですか　も　っ　ちー　さん！　手ごめですか!？　帯をくるくるして良いではないか　良いではないかってやるんですか!？」

「お前こそ僕の部屋でなにやってるんだよ！　帰ったんじゃないかったのか!？　　というか　叫び声を上げるな、他の奴らにバレる!」

「おっと、失礼しました。実はさっき一回帰ってお母さんと和解したのですが、別の作品のカップリングでまたしても揉めてしまいまして、今度は修復不可能なほどの決裂を」

「う　っ　……　なんか　もう　頭痛が」

ある意味、ワナビ荘にふさわしそうな奴である。

「それでも　も　っ　ちー　さんがこの部屋に帰ってくるまで待っていたのですが、どうやらこんな時間までリョーコさんの部屋でいちゃこらしていたようです。おかげでお腹がぺこぺこです」

「紛らわしい言い方するなよ、何もやましいことはないぞ……。と言うか、ちゃんとご飯食べてこなかったのか?　DJのご飯も人数分しか作らなかつたと思うけど」

「うゝゝ、お腹減りました。何か食べないとおっぱいと背中がくっついてしまいます」

「仕方ないな。僕の部屋には何もないけど……、確かキッチンにいろいろお菓子があつたはずだ。取ってきてやるよ」

「あつ私も行きます。自分で選びたいですし」

「お前自分の立場わかつてるのか!? 誰かに見つかったら困るのは僕なんだぞ」

「それじゃ夜中まで待ちましょう」

そんなわけで僕たちは夜中になり、みんなが寝静まるまで待った。その間、僕は意外な事実を知らされた。ハルが、リョーコの漫画の大ファンだというのである。

「へえ、そうだったのか。あいつの同人誌、そんなに有名なんだ」

「有名なんてもんじゃないですよ。行列ができます。ファンの間で奪い合いが起きて運営委員の指導が入ったなんて伝説もあります」

「ふーん……。ファンと作家、なんというかこう、うまくわかりあえないもんかねえ」

「私も、リョーコさんと仲良くなれば、と考えてはいたのですが……」

そんな話をしているうちにとつぷり夜は更けて午前二時、いよいよ僕たちは『食べものを求めてキッチンを漁れ作戦』を決行した。というか付き合い良過ぎだろ、僕。

「そろそろ頃合いですねー」

「いいか、絶対に物音立てるなよ。僕が先頭に立って行くから後ろからついて来い。できれば誰も起こさずに穏便に済ませたい」

「がつてん承知!」

僕たちは電気をつけず、足音を殺しながら階段を下りてダイニングを通過し、キッチンへ移動する。幸い、誰も気付かないようだ。お菓子の入っている棚を漁り、一通りのお菓子をゲット、そろそろ部屋に帰ろうか。というそのとき、がちやりと音がして二階の扉が開いた。リョーコの部屋だ。

（くそっ、何て間の悪い……！　ここで僕が見つかったらまたＢＬ談義で長時間捕まるかもしれん。隠れよう）

（えっ、隠れるってどこに）

（ここしかない！）

僕はハルの手を引き、キッチンの扉の裏のすき間に二人で身を隠した。

（うおっ、近い！　なんだこのギャルゲーみたいな展開！）

（ギャルゲーじゃなくてＢＬ同人誌と言ってください！）

（どっちでもいいだろが！）

電気もつけないまま、のそのそと真つ暗なキッチンの中を歩き回るリョーコの気配を感じる。リョーコはシンクへ行つて水道水をコップに注ぎ、ぐびぐびと飲んだ。そしてその後、さっさと部屋に帰ってくれるかと思いきや、どっかりとダイニングの椅子に座り、なにやらぼーっとしている。ダイニングを通らないと部屋へは戻れない。キッチンには他に出口はなく、大家であるＤＪの部屋へつながる扉があるばかりだ。僕はハラハラしながら彼女の様子を見守った。暗闇の中、二三分もそうしていただろうか、リョーコががばりと身を起こし、鼻をすんすんさせ始めた。やばい、これは。

「……女の匂いがする」

これはまずい。このままだとさすがにバレる。僕は扉の後ろからそおつと抜け出そうとする。一か八か自分が盾になってハルを隠し、外に逃がそうか。いや、どんなに頑張っても確実に背後に人がいたら見えるよな。どうすれば、どうすれば……。

そのとき、パチリとキッチンの明かりがついた。

「あら、もっちーじゃないの。アナタこんなところでなにやってるの？　それもこんな時間に」

キッチンの奥からＤＪ登場である。なんてこった、こんな時に……！　僕は「いやあ、小腹が空いちゃって、あはは」などと言いつつ、ししながら、後ろ手に必死に指示を出した。逃げろ、逃げろ！

その意味を解したのか、ハルが背を屈めて素早くキッチンを出て

いったのが目の端で見た。よし、あとはダイニングを抜ければ…

…！

「あらあら、ごめんなさいねえ、お夕食足りなかった？ 今度からもつと作った方がいいかしらね。量も愛情も二倍増し！」

「いやあ、DJの愛情はもう足りてますよ。むしろこれ以上濃くしないで」

「いゃん、お上手ねえ。そんなもつちーにはドロツと愛情三倍増し！」

その時、隣の暗いダイニングから、

「きや　　っ！」

「ぎや　　っ！？」

……悲鳴が響いた。

「あ、あら！？ なになに、なんなの！？」

結局見つかりやがって……、それも最悪の相手に。僕は頭を抱えて溜め息をついた。

第2話 腐女子よ、マリーゴールドを抱け その4

で。

結局ハルは自宅に電話させられて泣く泣く帰宅、夜までハルを部屋に入れていた僕はDJにたつぷりと絞られ、一時は本気で強制退去させられそうになった。

「若い娘っ子をこんな時間まで置いとくなんてなに考えてんだゴラア！ おのれがなんかやらかす前に東京湾に沈めたるか、ああん！？」

「す、すすすみません……」

正座をさせられた僕は半泣きになってDJに朝まで怒られ続けた。いや、本当に怖い、この人。さすが若い頃チームを仕切っていたと自称するだけはある（新情報）。

しかし……、DJも恐いが、ハルの正体を知ったときのリョーコの姿にも、怖ろしいものがあつた。

（この子がハル！？　なんでここにいるの！　それもこんな時間に！）

（出てって……、出てってよ！　顔も見たくないっ！）

そこまで言わなくてもいいのに……と仲裁に入ろうとしたが、結局責任が一番重い僕は、DJにじろりと睨まれて黙るしかなかった。一方的に怒鳴られながら、俯いてプルプルと肩を震わせていたハルの姿が忘れられない。

あれから三日間、せっかく昨日は熱心に漫画の書き方を教えてくれたリョーコは、もはや僕に口も聞いてくれない。まあ、昨日のあれも演技だったとバレたわけだし、当然と言えば当然か。彼女の純粹な乙女心を踏みにじったわけだしなあ（とプレイボーイっぽく言ってみる）。

カリカリカリカリ。リョーコは今夜もダイニングでコピー本の準備である。僕の顔も見たくないなら部屋に帰って描けばよさそうな

ものののだが、残念ながら彼女の部屋はいわゆる汚部屋の類で、原稿を広げられるスペースが無いのであった。

「あ、あのさあ、リョーコ」と僕がおずおずと話しかけても、「ああん？」と言わんばかりの強烈な視線を返してくるのです。ごすこと引き返すしかない。弱い。弱いぞ僕。どこまでも情けない男である。

同じようにリビングで、二人で創作活動を行っていたまー君が、ちよいと手招きして、「リョーコさんと何かあったんですか？」と尋ねてきた。「ちよつとな……怒らせちゃったんだよ」と適当に話を合わす。あの夜あったことについてはDJとリョーコ以外は知らないし、DJはあれ以来は普通に接してくれているが、リョーコの態度だけはいつまでも軟化しないのだ。

あれじゃありョーコがいる限りハルはワナビ荘に出入りできる日は来ないな……。僕は少し残念に思う。なんとかリョーコとハルにはわかり合ってほしい、というか、もうちよつとハルの人格を知ってもらって、一方的に恨むのをやめてもらわないと……。なんだかハルにもユウジ君にも気の毒だし、この先いろんなことが問題になると思うのだ。

「なるほど。察するに、また弟さん絡みですね」

「そうなんだよ。仲直りのきっかけも見つからないし、このままじやいつになったら口を聞いてもらえるのやら……」

そのとき、携帯の着信音（アニメの主題歌だった）が鳴り響いた。リョーコがポケットから携帯を取り出し、耳に当てる。そしてものすごい猫なで声で「ユウジ、待ってたよぉ」とデレデレボイスを垂れ流し始めた。

（あの変わり身には毎度感心するな……）

うん、へえ、そう、などと相槌を打つリョーコ。なにやら大事な話が行われているようだ。そして、唐突に受話器から耳を話すと、おもむろに、

「あのさー、今度の日曜日一緒に『青春バット』のイベントに来ら

れる人いない？ ユウジが来たがつてるんだけど、じゃんけん会とかあいさつ回りとか、席を外さないといけないことがあつて。手伝ってほしいんだけど」

そんなことを言った。幸いその場にワナビ荘の全員がいたのだからなぜか全員が示し合わせたようににやつと笑うと首を横に振った。

「あら残念、その日はうちのクラブでイベントがあるのよお」

「私も声優学校の練習が忙しくて……。本当にごめんなさい」

「みつちゃん、僕たちも」

「え、ええ、そうね、ちよつと都合が悪いわ」

最後の二人はなんかいかにも嘘っぽい。だが、こうなると仕方がない。要は、僕に行けてことだ。

「あー、僕なら……。運悪くその日はなーんにもないんだ。なんなら一日中付き合つてやってもいい」

「ちっ」

「あからさまに舌打ちされた！？」

だが、これが仲直りする最後のチャンスかもしれない。僕は腹をくくることにした。それに、『青春バット』のイベントならば、おそらく……。

そんなこんなで、僕はリョーコの便利屋をやることになった。まあ、たった一日のお手伝いであの日の恨みが解消されるなら、安いもんだ。

「いくらなんでもこれはきき使い過ぎだろおっ！」

そして当日。僕は朝からひいひい言っていた。

約四十キロする段ボールを丸三個、その搬入の全てを任されており、それだけでも充分にこき使われているのだが、実はこの前段階でも僕は漫画の手伝いやら編集作業やらでここの一週間ほどともに寝る間も与えられなかったのだ。

「あーら、この間はBL漫画が描きたくて仕方がないっていったでしょ？」

そんな脅し文句でリョーコは僕のケツを引っぱたきつつベタを塗らせ、トーンを貼らせ、印刷会社に連絡を取らせた。おかげですっかり漫画の技術がアップしたような気分になってしまふ今日この頃である。

「まだまだ。今日はじゃんけんでユウジが欲しがってる限定賞品が当たるイベントと、BL作家の直筆サイン色紙がもらえるイベントが重なってるんだからね、そのときはかりはあんたの力を借りるわじゃんけんに勝てば主人公の使ってるミットがもらえるってんで、ユウジの奴張り切っちゃっててねえ。はーあ、体がいくつあっても足りないわあ、同人作家はつらいわよ」

溜め息について肩をとんと叩きながらも、どこか楽しそうなリョーコである。僕は荷物に押しつぶされそうになりながらも、よかった、なんとかリョーコに、少なくとも気持ちの面では許してもらえたかな、と安堵していた。

しかし、自分のブースに到着したとき、リョーコは驚愕に顔を強張らせ、目を見開いた。そして呟く。

「なによ、これ……」

くるりと振り向き、つかつかと僕に歩み寄る。そしてリョーコは、バシン、と僕の頬に平手を打った。ざわざわしていた会場が一瞬静かになる。周囲が僕たちに注目している。

「なんで……、なんであの子連れてきたのよ。誰も頼んでないんだけど」

ブースには、僕が誘ったハルが、申し訳なさそうに座っていた。

「あいつも『青春バット』のファンなんだよ。お前の同人誌も好きなんだってさ。あと、人数が足りなかったからってのもある。お前が弟と一緒にじゃんけんに行って、もう一つのじゃんけんは僕が行ったら、誰が店番をするんだ？ こう見えても、気を利かせたつもりなんだけどな」

「……余計な事すんな！」

リョーコはハルの襟首を掴んで無理やり立たせる。「おいっ！」

僕はリョーコの腕を握って静止しようとしたが、乱暴に振りほどかれて、尻もちをついてしまった。

「……来てくれてありがとう。あたしの同人誌好きっていうのにも、一応お礼を言っておくわ。だけど、ごめんね、あたしの作品に関わってもらうわけにはいかない。あたし、そこまで人間できてないの。ブースからは、出てもらえるかしら」

「えっ、で、でも……」

「出てもらえるかしら」

静かに、しかしきっぱりと言うリョーコに、逆らうことはできないと判断したのであろう、ハルは「はい……」と消え入るように返事をして、そのまますくごと背中を向けて姿を消してしまった。

「おい、リョーコ、今のはいくらなんでも」

「……あのさ、もっちー。あたしつてさ、ガキだと思う？」

「……いや……」

僕はそれ以上何も言えなかった。またしてもしばらく気まずい時が続のくかと思ったが、いざイベントが始まるとそんなことは言っていられなくなった。さっそくりョーコのブース前には行列ができ、僕とリョーコは掛け声を掛け合いながら必死に同人誌を陳列しては売り続けた。

そんなこんなであつという間に午前が終わり、お昼過ぎ。リョーコが一時的にブースを抜け、ユウジ君を連れてきた。ユウジ君は車いすに乗っていた。少し調子が悪そうだったが、会場のあちこちで行われているゲームやさまざまな種類の同人誌、そして何より姉のサークルの人気の凄まじさに目を丸くし、言葉を失っていた。「すごい、すごい」という言葉を繰り返し発する彼を見て、楽しんでもらえたようだ、と僕もなんとなく嬉しくなってしまった。

そしてお待ちかねのじゃんけんイベントの時間がやってきた。幸い、もう一つの方は時間が重ならないようにずらしたのか、まだ行われていないようだ。二人の姉弟は喜び勇んでじゃんけんに参加した。車椅子に手をかけながらじゃんけんするリョーコの後姿がブー

スからもよく見えた。

「よく来てくれたぜ、青春高校の生徒のみんな！ 今日हतつぷり商品を持ちかえつてくれようっ！ よっしゃ、さっそく始めようぜ、じゃーんけーん！」

登場キヤラクターの真似なのか、スタッフがやたらと演技がかった声でMCをしている。ひよつとしたらアニメ版の声優なのかもしれない。彼が『じゃんけんぽん』で手を出し、観客も全員手を出す。彼に勝った者は立ったまま残り、負ければその場にしゃがむ、というシンプルなゲームだ。僕はほうけたようにその様子を見ていた。いやはや、集まっている女性陣のはしゃぎようつたら、尋常ではないのだ。これが腐女子パワーというやつか。僕は感嘆の溜め息を漏らした。ホント、スゴイ。

しかし、やがて僕はリョーコがじゃんけんに夢中になっているその手元で、ユウジ君がなんだか苦しそうに身を屈めていることに気付く。震えてもいるようだ。そして、そのことにリョーコは気付いていない。そうわかつた僕は、思わずブースを飛び出し、イベントステージのところまで走り寄つた。

「おい、リョーコ。何やつてんだ、ユウジ君が苦しんでるぞ。大丈夫なのか」

「は？ あっ、あんた、なんで勝手にブースを出てきてるの！」

「それどころじゃないだろ！ ユウジ君の様子を見る」

「えっ……」

ユウジ君は胸を押さえて、苦しそうに咳をしている。顔色が真っ青だ。「ユウジっ……」彼の様子を見て、リョーコも顔が青くなつた。

「さあーガンガン行くぞおー！ じゃーんけーん！」

そうしている間にも、じゃんけんイベントは容赦なく進行している。リョーコは一瞬言葉もなく、困つた顔で、ユウジ君の顔と司会者の顔を見比べた。

……迷つた。

そう思った瞬間、僕はまったく反射的に、

「馬鹿野郎っ！」

彼女の頬に平手を打っていた。パンツ、という乾いた音は周囲の熱狂にかき消された。髪の毛が横を向いたリョーコの額と頬に貼りついて、彼女の表情を隠していた。

「……じゃんけんなんかやってる場合か。病院だ。さっさと行け。ここは、僕が引き受ける」

周囲の人々はじゃんけんに夢中で僕たちの様子に気付かない。リョーコは目に涙を溜めて、「……これで、お相子だね」と言い残し、うなだれながら、それでも急ぎ足で、ユウジ君の車いすを押しながら会場を後にした。

僕はすぐに携帯電話を取り出し、手早く最初からセットしてあった番号にかける。コールは二回ですぐにつながった。

そのとき、すぐ近くの別のイベントステージからもわっと歓声が上がった。あちらもどうやら始まったようだ。

「待たせたな。ようやく出番だぞ、ハル」

第2話 腐女子よ、マリーゴールドを抱け その5

ハルは意外にもすぐそばにいた。というか、じゃんけんイベントに参加していた。

「あれえ！？ 出ていけって言われたから落ち込んで出ていったかと思ってたのに……、ちゃっかり楽しんでは。意外と図太いな、お前」

「それはそれ、これはこれです。落ち込むのは後でもできますから後回しとして、とりあえず今やることを力いっぱいやることの方が多いです」

「んで、その結果何に落ち込むべきだったかすら忘れてしまっ、と」
「まあ、そんなところですね」

「けろりと言い放つハル。うーん、こいつは僕が思っていた以上に大物かもしれない。」

「まあいいや、それじゃお前は向こうのイベントに行ってBL作家のサイン色紙をゲットしてくれ。リョーコが欲しがってたものなんだ。僕はユウジ君が欲しがってるっていうミットを手に入れる」

「あー、でもそのサイン色紙実は私も欲しいんですよー」

「そこであえて私利私欲を取るか！」

「じょーだんですよ、私は同人誌は好きですがサインにはあまり興味が無いです。しかし、じゃんけんですから結局運の勝負ですよ。出たところで勝算はあるんですか？」

「正直、無い。けどあいつにあそこまで啖呵を切っちゃったんだ、それなりに健闘しない限り顔向けできないだろ」

「別にそうでもないと思いますが……。まあいいや、それじゃ私は向こうへ行ってきます」

飄々とした様子でじゃんけんイベントに参加するハルの背中を見送りながら、うーん、女ってわからん、と首を捻る僕であった。で、そのじゃんけん大会。

念願の、ミットが賞品のターン。

向こう側のゲームでは、作家のサインが賞品のターン。

なんと、僕もハルも、けっこういいところまで勝ち残っていた。

こっちは残り十人、向こうは残り十五人、といったところか。

負けた参加者は悔しそうにしながら次々としゃがんでゆく。僕は、自分がまだ立っていることが信じられないような気もちだった。普段は、じゃんけんで連勝した記憶なんて殆どなかったし。

しかしその緊迫したゲームの最中、携帯に電話がかかってきた。

リョーコからだ。他の人物からなら無視したかもしれないが、こればかりは取らないわけにはいかない。僕は片手を高く上げながらもう一方の手で通話ボタンを押した。

「もしもし、リョーコか？ どうした」

「も、もっちー……。ユウジが、ユウジが、大変なのぉ」

なんと、リョーコが泣いている。鼻をぐずぐず言わせ、息も絶え絶えに、かすれた声で僕に助けを求めている。そのあまりに意外な彼女の様子に、僕は思わずパーを出した。

「おおっとぉ！ ここで五名に絞られました！」

知らないうちに僕はベスト5に絞られていたが、今はリョーコの話を確認する方が先決だった。「どうした？ 何があった！」僕が尋ねると、リョーコはしゃくりあげながら、

「ユウジの容体が急変して、いま、緊急治療してるけど、い、息がちゃんとできてないって、急に人が多い所に行って、緊張したんだろって。あ、あたし、ユウジが苦しんだのに、気付いてあげられなくて、じゃんけんなんか、夢中になって。イベントなんて連れていかなければ、よかったぁ。あ、あたし、あたし、姉失格だよぉ……」

そしてわっと大きな泣き声を上げた。参った、彼がそんな状況になっていたとは……。僕は心からの無念さを表現してグーを出した。「おおっ、ここでラスト二名だ！ まさかの一騎打ちです、果たしてどっちが勝つのかー！」

「馬鹿野郎、お前がすっかりしなくてどうすんだ！」

僕は受話器に向かって怒鳴った。これにはさすがに周りの参加者もしんとなり、となりのイベントでいつの間にかちゃっかりベスト3に残っていたハルも振り向いた。

「楽しそうだったじゃねえか、ユウジ君。あんなに笑顔で喜んでたじゃねえか！ 連れて来なければ良かったなんて言うんじゃないよ！ それに、お前は姉失格なんかじゃない」

しゃがんでいる参加者は皆、じゃんけんしながら通話する僕をポカンと見上げている。僕は彼らの視線も気にせずに続ける。

「ちよつと失敗はしたかもしれないけど、毎日ユウジ君のお見舞いに行つて、ユウジ君のためにミットをゲットしようとしてあげて……、これが姉じゃなくて何が姉だつてんだ。じゃんけんなんかだあ？ そのじゃんけんをユウジ君は楽しみにしてたんだろ、じゃあいいじゃねえか。今から最後の勝負だ。さあ、何を出す。ユウジ君に聞いてみる」

「……うん。ごめん、そうだね」

いつの間にかリョーコは泣きやんで、僕にはつきりとした声で返事ができるようになっていた。僕はにやつと笑う。「あ、あのう。勝負、始めてもOKですか？」司会者がおずおずと尋ねる。僕は力強く頷いてやった。

隣の会場では、ハルが僕と同じように一騎撃ちになっている。彼女も僕を見ていたので、同じように頷いてやる。するとハルも不敵な笑顔で頷き返してきた。もとい、腐的な、と言った方がいいか。

「ユウジに聞くまでもないよ。あの子なら絶対にあの手を出す。今までもずっとそうだったもん。……野球の試合で勝ったら必ずやってた、勝利の、」

「それでは覚悟はいいですか！ じゃんけんけん！」
司会の声が重なる。僕は思い切り右手を振り挙げて、その手を出した。

もちろん、ハルも、同じ手。

相子はなかった。それで、二人の勝負は決まった。

拍手が起こった。ぱちぱちぱち。何に対しての拍手なのかわからないけど、おそらくみんな、そこで「何か」が起きたことだけは察しているようだった。

僕は、いつの間にか自分が息切れしていたことに気付いた。どうやら相当集中していたらしい。そこで僕は唐突に気付く、「はっ、そういえばサークルのブース……」しまった！僕はすっかり放置してしまっていたブースの方を振り向いた。

しかしそこには、思わぬ人物　まー君とみちるさんとのんちゃんと、それと　なんとDJまでもが揃って、僕たちに拍手を送ってくれていた。みんな、結局来てくれていたのだ。

「よかった……」

僕は全身の力が抜けて、その場にへたり込んでしまった。

第2話 腐女子よ、マリーゴールドを抱け その6

「……もっちー！ それに、みんな……」

イベントが終わり、僕たちが病院に駆けつけると、病院廊下の椅子でうなだれていたリョーコが立ち上がった。その顔は気疲れのせいかすっかり青ざめていた。

「ユウジ君は？」

「うん、もう大丈夫。今は薬で寝てる……。さっきは取り乱してごめんね、もっちー」

なんだか急にしおらしくなっちゃったりリョーコを前に、なんだか物足りない気もする僕である。「あ、ああ」と曖昧に返事をしておく。

「それにしても、ユウジがあんなになるまで気付かないなんて、やつぱりあたしはダメな姉だよ。あれだけ普段から好きだのなんなの言っておきながら、イベントになるとほったらかしだもん。きつと天罰だったんだよ、あたしに対する」

「そうでもねえぜ、ほらよ」

僕はカバンの中から今日の戦利品を差し出した。それは、真新しい、赤い色をしたキャッチャーミットだった。

「これ、実はハルが手に入れてくれたんだ。じゃんけんで勝ち残ってたな。最後はもちろん参加者全員の前で勝利のダブルVサインさ。

……なんか言うことがあるんじゃないのか、リョーコ」

「……うん」

ぽん、とミットを受け取り、リョーコはハルに「ごめん」と頭を下げた。「そ、そんな、頭を上げて下さい。私もいろいろと悪かったです」と慌てるハル。どうやらこれで一段落のようだ。その場にほっとしたような、和やかな空気が流れた。

「……あ」

ミットをじっと見つめていたリョーコがハッと顔を上げ、思い出

したように言う。

「そういえば、作家さんのサイン……」

「あー、あれなー。僕がそっちのじゃんけんやってたんだけど、最後の最後で負けちゃった」

「……もっちー」

リョーコの顔は冷静だが、頭に思いつき（怒）マークが浮かぶのを誰もが見た。あーあ、いつものリョーコに戻って嬉しいやら悲しいやら。

「あとであたしの部屋に来なさい。今日のお礼に、朝までみつちりしごいてやるから」

「ひ、ひいいい！？ い、いくらなんでももう体ボロボロです！ それだけは許してっ！」

「ダメ、許さん！ このチャンスを逃したら向こう一年は手に入らないレア物なんだぞおお！」

早速がやがやと暴れて「病院では騒がないでください！」と看護師さんにたしなめられる僕たちであった。そんな中、まー君はにぎやかな輪から離れて、一人ぼそつと呟く。

「自分の手柄をさらっと人に譲って、どっち女の子の高感度も上げるとか……、もっちーさん、マジでイケメンです」

その三日後。

僕はふたたび病院を訪れた。ユウジ君がすでに元気になっているとかで、様子を見るに、である。一応プレゼントの渡し主として、ユウジ君の喜ぶ顔を見ておきたかったし。

昼間の病院内は入院患者や見舞客でごった返していた。受付で部屋番号を尋ね、僕はユウジ君の病室へ向かった。が、残念ながらそこに彼の姿はなかった。

病室には、「ユウジへ」とリョーコ独特の丸文字で書かれたカードの挿してある、籠入りの花束が置かれていた。お見舞いだろつか。僕は籠を持ち上げて匂いをかいでみた。

この花は何といったか、鮮やかなレモン色の、小ぶりの花弁を眺めながら僕は思い出す。そう、確か、「マリーゴールド」と言っただけ。

なぜこんな花を？

そもそもリョーコは大して花好きではなかった気もするが……。なんとなくそのあたり、引っかかりつつも、僕は籠をその場に置いた。とりあえず、あいつらを見つけないと。

仕方なく僕は軽く彼の姿を搜索することにした。心当たりはトイレか、あるいは中庭。僕は三階の廊下から日の差す中庭を見下ろし、そこで意外な光景を目の当たりにする。

中庭では三人の若者がキャッチボールをしていた。一人は車椅子に乗って赤いキャッチャーミットをつけたユウジ君、一人はリョーコ、そしてもう一人はハルであった。

リョーコはハルに屈託のない笑顔を向け、ハルはリョーコに同じように笑顔を向け、そこには完全に互いを許し合った二人の姿があった。僕はこれ以上自分のすることはないな、と感じ、そのままた何も言わず病院を後にした。

その夜、リョーコはハルと一緒に帰ってきた。DJも、もちろん僕たちも彼女を歓迎した。リョーコと一緒に食事を楽しむハル、テレビを見るハル、くだらない話で笑い合うハル。そうした光景を見ているだけで胸がすくような思いだった。

リョーコとおっぱいを触り合うハル、リョーコとポッキーゲームをするハル、リョーコと一緒に風呂に入るハル……。

……ん？

「おいおい、ちょっと仲良すぎじゃあ……」

「あ、もっちょー！ 聞いて聞いて」

ハルにパジャマを着せて自分の部屋に連れ込もうとしていたリョーコががっとな手をつ握った。っていうかあんなら、同じベッドで寝るつもりじゃないだろうな。

「あたし、今まで自分の視野が狭かったことに気付いたの……。ハ

ルに出会ってようやく気付いたわ。あたし一人じゃ知ることのできなかった世界。とても素晴らしい世界がこの世にはあったのよ」

「そ、それってまさか……」

「そう、百合の世界！ BLもいいけど、これからの時代、ガールズ・ラブよ！ 早速次回のイベントに参加するわっ！」

「や、やっぱり……」

こんな感じのわかりやすいオチも、なかなか乙でいいものだ。

あれ以来結局ほとんど落ち込む暇もなく、リョーコは執筆に没頭しているし。

ハルもリョーコに教えられて、見よう見真似の漫画製作などを始めた模様。休日なんかはワナビ荘のダイニングは姦しき女の仕事場と化すようになった。

まさしく、「何に落ち込むべきだったのか忘れてしまった状態」なのだろう。まったくたいしたものである。

僕がそれを言うと、彼女たちは決まってこう返すのだ。

「腐女子って生き物はね。最強なのよ」

僕も見習うべきかね。

追伸。

後で調べてみたところ、リョーコがユウジ君に送った花、「マリーゴールド」の花言葉は、「嫉妬」「可憐な愛情」そして「健康」だったそう。

果たして、彼女がどういうつもりで、どの花言葉を意識してこの花を彼に送ったかは、永遠の謎である。

案外、全部かもね。

やっぱり、女って、怖い。

かもしれない（ちゃんちゃん）。

第3話 我が名はシメキリ・クイーン その1

この辺で少し、僕の書いている小説についても触れた方がいいだろうと思う。

前述したように、僕は「城島ダイヤ」という名前の作家に憧れて小説を書き始めた。

ダイヤ氏は各ジャンルにおいて、いずれも素晴らしい作品を残しているが、特に氏の作品の中でも強烈に指示を集めているのが、「ライトミステリ」であった。

ダイヤ氏の描くトリック、ストーリー、そして人間ドラマは読む者を夢中にさせずにはおかない。氏の作品に影響されて、創作を始めたという人も多いことだろう。

そして僕もそんな中の一人。現在書いているのはそのライトミステリというジャンルである。正直言うと僕にはそれほどミステリの素養がないのだが、だからといってミステリを書いてはいけない、ということにはならない。というわけで、なんとか「それっぽく」書こうと努力をしている。実現可能そうなトリックと派手な展開が売りである。

僕は、実のところ、かなりの遅筆だ。何カ月も前から書いているはずなのに、なかなか規定枚数に達することができない。というか、一日に何時間もパソコンの前に座っていられない。集中力が根本的に足りていないのである。

「もっちは、頭はいいんだけど、落ち着きがないのよねえ」

小学生の息子を見る母親のように、DJは僕のことをそう評して溜め息をついてくれるのだが、できないものはできないのだから仕方がない。アイデアはそれなりにあるし書いている時は楽しいのだが、一度詰まると一週間くらい執筆を中断するときもある。

「なーにもっちは、またスランプ？」

リョーコはそんな僕の様子を見てけらけらと笑う。けっ、笑いた

ければ笑うがいい。スランプなんかじゃない、頭の中で文章を組み立てて推敲しているところなんだ。全ての行程が終われば、あとはその出来上がった文章を原稿という名の白いキャンバスに描き出すだけさ。

「何をえぐり出すんですか？」

「うわあっ！ ハル、いたのか！？」

ワナビ荘の中をちょこまかと動き周り、僕の行く手に突然現れては驚かしてくる薬師寺ハルである。どうやら、僕は知らないうちに自分の心の中の声を口に出していたらしい。

「ちょうどリョーコさんに漫画のコマ割のコツを教えてもらっていたところです。漫画って奥が深いですねー、私、ワナビになって本当に良かったです！」

「あ、そ……」

「あれ？ どうしました？ ご機嫌が悪そうですねえ。ひよつとして冷蔵庫に入っていたプリンを手元に食べられたりしたんですか？」
「なんだそのベタな展開は……。ひよつとしてそれもリョーコの影響か」

「ええ。プリンを食べてしまい喧嘩になった男同士が、仕方なく残った一つのプリンを口移しで食べさせあうという物語です」

「なんでそうなるんだよ！ 食べちゃった奴が普通にプリンをあげればいいだけの話だろ！」

「まったく、野暮な事言いなさんな兄さん。そこに愛があれば過程なんて関係ねえんだイ」

「変なしゃべり方まで教えやがって、あいつは完全に悪影響だな……。あーどけどけ、僕は今作品のことで悩んでいるのだ。お子様と遊んでいる暇はない」

「作品のこと、ですか」

「そ。僕が今書いているのはライトミステリなだけだね、トリックがどうしても。まったく、読者はいいよなー、何も考えずに読んであとからこのトリックはいまいちだの実行不可能だのと難癖つけられ

ばいいんだからさ。作り手の苦労を少しは慮れっつーの」

「もっちゃんさん。私はそれは違うと思います」

「ん？ 何が？」

僕は気のない返事を返したが、意外に真剣なハルのまなざしに気付き、内心ちよつとだけ動揺した。

「筆者が読者に、創作の苦労をわかってほしいなんて言うべきではないと思います。読者の方は、何も考えずに楽しんでくれればそれでいいのです」

「な、何だよ急に……」

「少なくとも私はそうです」

ハルは自分の手をじつと見た。その手にはここ数日でついた漫画用インクやトーンカスの他に、ペンだこ、トーンの切り貼りのときにでもできたであろう切り傷がいくつもできていた。どれだけ仲良くしていようと、漫画にかけてのリョーコのしごきは半端なものではない。それは僕がよく知っていた。

「私、ここへきてまだまだ日が浅いですけど、漫画だってリョーコさんに教えてもらって、描き始めたのはホントにいいこないですけど……。だけど、思っています。ココのトーンは大変だっただろうとか、線の引き方が上手いとか下手とか、そういうことを思われたくないな、って。そうじゃなくて、このキャラはこんな気持ちなんだろうな、とか、うわっこれからどうなるんだろうとか、もって作品の世界に入ってほしいって言うか……。夢とか、楽しみとか、そういうものを見せる仕事じゃないですか。作家って」

「あ、ああ……」

いつになく必死なまなざしで語るハル。言葉は拙いが、言いたいことははっきりと伝わってくる。

「そこに、作者の苦労だとか、辛さだとか、そういうものを入り込ませようとすると、なんだか凄く興冷めな気がするんです。確かに苦労はしてると思うんですけど、それを感じさせない、というか、そついうことに頭を回す隙も与えないような、とっても素敵な世界

を描いて、読者を魅了してあげるのが作家の仕事なんじゃないか……って、そう思うんです」

「なるほど。ワンダフルです、ハルさん」

パチパチパチ、と拍手をしながら、芝居がかった動作で階段をゆつくりと降りてくるまー君。実にキザなしぐさである。足をひっかけてやりたい。

「そうですね、作家は夢を与える仕事。そこに苦労だの辛さだの、たとえばほんのかけらだとしても、見せてはいけないのかもしれない」

「だからってなあ、お前……」

「ホラー小説だって、『書いている途中に勝手にお茶碗が割れました』とかなら怖いエピソードになってハクがきますけど、『書いている途中ぎっくり腰になりました』だと台無しです。一気にギャグ小説になってしまいます」

「まあ言うてることはわかるけどな……」

全国のぎっくり腰に悩む方々にとっては笑いごとではあるまい。

「エンターテイナーは底を見せてはいけません。いつでも余裕で笑ってないと。こっちの苦労も理解してほしいなんて言っているのは、よちよち歩きの子どもだけなのです」

「なるほどねえ、厳しいお言葉だなあ」

僕は少しだけ自分が恥ずかしくなる。こんなに若くて何も考えてなさそうに見えるハルでも、きちんとした作家としての気構えがある。多いに見習うべき部分はあるということか。

そこまで言うとは、ハルはぺろりと舌を出して頭を下げた。

「すいません、これ実は全部母の受け売りなんです。母は出版社で漫画の編集者をやっております」

「母？　ってあの、例の腐女子の」

「はい、そうです。母は趣味嗜好に関してはかなりフリーダムな人ですが、仕事に関してはとてもシビアです。そんな母が口ぐせのように言っているんです。最近は、特に若い人に軟弱な作家が多いと」

「ははあ、そういう……」

ハルはもととは言えば、母親とケンカをし、衝動的に家出をしたことが原因でここに居ついている。今でも遅くなるまであまり家に帰りたがらない。

「……昔から漫画が好きで、編集者である母によく見せていました。母は忙しい人で、なかなか家にはいてくれなくて、そのせいで学校の友達みたいに母の手料理が食べられなかったり、一緒に旅行に行けなかったり、寂しいって思うことも多くて……でも、私が描いた漫画はいつだってちゃんと見てくれました。私が小さい頃は、どんなに下手くそでも褒めてくれていたんです。だけど成長するにつれ、アドバイスらしきものをしてくれるようになりました。それは良かったんですが、どんどん指摘が厳しくなっていき、最近は『あなたにはプロになるだけの才能はない』とはっきり言うようになりました」

ハルはぐつと握りこぶしを作る。

「……だから、私は、漫画で母を見返してやりたいんです。ここワナビ荘で、皆さんと一緒に腕を磨いて。母に、ぎゃふんと言わせるような漫画を描いてみたいんです」

「そっか。本気でプロになりたいの、あんた」

突然、新しい声が割り込んできた。振り返ると、すぐそこにリョーコが歩み寄ってきていた。今までの話もちやっかり聞いていたらしい。

「あんたのお母さんの指摘、間違ってはいないよ。あんたは確かにあの日以来、あたしの教えた通りにしっかり努力したし、それだけ手にマメも切り傷も作った」

言われてハルは自分の手をじつと見る。すっかり汚れた、漫画描きの手だ。

「……だけどね、残念ながらあんたに絵の才能はない。あたしが保証してあげる。その上達速度では、プロとしては通用しない」

はつきり言われて、目に見えて落ち込むハル。ずうーんと雁首を

地面に着きそうなほど垂れる。セミプロと言っているほどの腕を持つリョーコに言われたのだから、余計に堪えたのだろう。

「ただ、その一方で、あたし、気付いたの」

リョーコはにっこり笑って付け加える。

「あんた、原作の才能はすごくある。お話し作り、とつてもうまいもん。展開のアップダウンとか、間の取り方とか、基本がよくできてる。今まで何冊ぐらい漫画を読んできた？」

「え、……っと、母の仕事の関係で家には少女漫画が千冊近くありましたから……。それと、自分でも描くようになってからは他のジャンルのものも色々……」

それだつ、とリョーコはぱちんと指を鳴らした。

「それだけの漫画読書量があれば綺麗なネームを切らせていたのね。いーわ、それじゃハル、あんたあたしと組みなさい！」

「えっ……」

ハルは絶句していた。突然のユニットへのお誘いに呆然としている様子である。しかし、リョーコは構わず高らかに宣言する。

「ここに奇跡の作家カップル、『ハル リョーコ』誕生よ！ はっはっは！」

まー君はそんなリョーコを呆れて見ている。ハルも言葉が出ない様子だったが、やがてすつくと立ち上がり、がっしとばかりにリョーコの手を掴み、意外なほどのハイテンションでまくしたてた。

「や、やります！ 私、リョーコさんと、『ハル リョーコ』やらせていただきます！ とつてもステキです、そのアイデア！ きつと、名前に負けないとつてもステキな作品を仕上げて見せます！」

「お、おいおい……」

すっかり舞い上がってしまった二人であった。

かくして、百合百合腐女子漫画家ユニットの（なんつつ響きだ）、『ハル リョーコ』は結成された。そしてその日から、彼女たちは猛烈な創作活動に没頭することになる。

夜中までいやんだのうふんだの実に楽しそうな声が二人の部屋か

ら聞こえてくる。まったく、一体何をやってるんだか。

ともかく、最初はあれだけ険悪だった二人が手を取り合って創作だなんて、嬉しいやら呆れるやらで、何とも複雑な心境である。

やはり腐女子同士は通じ合うものがあるのかもしれない。

第3話 我が名はシメキリ・クイーン その2

「なるほど。で、そのお母さんっていうのはどんな人なの？」

「光玄社の薬師寺トモエさんって人らしいよ。社内でも有名なカリスマ編集者、別名『赤鬼』。どんな新人の原稿にも容赦なく赤を入れまくることで怖れられているんだってさ」

僕はのんちゃんの通う声優の専門学校に来ていた。今は休憩時間で、廊下でジュースを飲みながら話合っている途中である。

ちなみに僕はのんちゃんの学校へはよく来るし、ときにはお昼と一緒に食べる。彼女は気真面目で頑張り屋なので、時間を延長して練習していることが多い。そうした場面をよく目にする。

のんちゃんは、僕が見ている間だけでも、かなり上達したと思う。もつとも、僕が彼女を気に入り過ぎているため、ひいき目もあるのかもしれないけど。

がらりと目の前の扉が開き、別のクラスの生徒たちがぞろぞろと出てきた。みんな上下のジャージ姿で、びっしりと汗をかいている。声のトレーニングでは肺活を鍛えるとかで運動をするとは聞いていたが、想像以上にきつそうだ。

「あー、その人なら今ちようどこの学校に来てるよ。っていうか、わりとちよくちよく来てる」

「え、マジ？ この声優学校に……？ どういうつながりがあるの？」

「光玄社さんはアニメ化とかドラマCDとかいろいろ企画をやっているから、そのスカウトにね……。ちようど高校野球の練習場にグラサンをかけたスカウトマンがやってくるかのように」

「なるほど。それじゃのんちゃんアピールするチャンスじゃん」

「も、もちろん精一杯やつてるよ！ だけど、まだ……」

しゅんとするのんちゃん。声をかけてもらうには至っていない、というところか。

「大丈夫だよ、これからだよのんちゃんは。きっと芽が出るって」

「ほ、ホントかな……？」

「僕はお世辞は言えない」

そのとき、ちょうど先ほどの部屋から誰かが出てくるのが見えたのんちゃんハッとした表情になり、慌てて耳打ちしてくる。

「あ、あの人が噂の薬師寺トモエさんだよ！　ちょうど今日も来てたんだ、凄い偶然！」

「あの人が……」

コツリ、コツリと靴音を立てながら近づいてくる、中年ながらもきりりと背筋の通った女性。三十代くらいに見える。のんちゃんの言うとおり、スカウトマンらしくサングラスをかけていたため目は見えない。が、口元がどこかハルに似ているような気もする。

彼女はまっすぐ僕に近づいてきた。僕はゴクリと唾を呑みこむ。

「あなたたち、ハルの出入りしている『ワナビ荘』の人よね」

「は、はい。その通りです」

先方は、僕たちの顔を知っているらしい。ハルが教えたのか、どこから聞きつけたのか……。いずれにせよ、ひどく緊張させられた瞬間であった。

「うちのハルがお世話になってるわ。あの子、ご迷惑をおかけしていないかしら」

「い、いえいえ、迷惑なんてそんな！　こっちこそ、大したおもてなしもできずに」

「もてなしなんてしなくて結構よ。あの子、本当に自分勝手なんだから、自分ひとりの力じゃ何にもできないクセに……。勝手に家を飛び出して、勝手にあなたがたのところ居ついちゃって。まだまだ自分が子どもだってことが自覚できてないのね」

トモエさんは不愉快そうに言う。僕は彼女の言葉に少しだけむっとして、

「お言葉ですが、ハルさんはもう子どもではないと思います。今だって、必死に努力して漫画を描いていますし」

「努力ならサルだってできます。世の中、結果を出さないと意味が

ない。結果が出ない限り、私はあの子を認めることはできませんし、またそうすべきではないと思っています」

「と、いうことは、逆に言えば結果を出せば認めるということですか」

「それはもちろん」

はつきりとトモエさんは頷いた。

「私は別にあの子を認めたくないわけじゃありませんので」

「それじゃ、見ててあげて下さい。あいつを」

僕は言う。こちらを見据えてくるトモエさんの目を、しっかりと見据え返しながら。

「ハルはいずれきつと結果を出します。その時、しっかり褒めてあげて下さい、認めてあげて下さい。僕からのお願いです」

「言われるまでもありません。……今後もしも迷惑をおかけするかもしれないませんが、どうかご容赦ください。何かありましたらすぐにご連絡を。無理にでも連れ帰りますので」

そう言う僕に名刺を手渡すと、相変わらず服の中に正規でも入っているのではないかというくらいシャキッと伸びた背筋のまま、スタスタと廊下を後にするトモエさんである。

「なんというか、凄い人だね……。ハルちゃんからは想像できないくらい厳しそうな人……」

「だからこそ、反りが合わないってことなんだろうな」

僕は呟いた。帰ったらハルにこのことを話してやるべきか、話さないべきか……。少し考えた末、やめることにした。これはあくまで親子の問題、僕が口を出すべきではないだろう。放っておいて、勝手に彼女たちに解決させればいい問題だろう。僕はそう結論付けた。

しかし、意外な事に当事者自身はそうは思っていなかったのである。

「も、もっちゃん先輩、一緒にお母さんのところに来てくれませんか

っ!？」

僕がトモエさんに会った一週間後のことである。ハルが鬼気迫った表情で僕にお願いしてきたのである。

「お母さんのところ？　なに、僕と結婚したいの？　悪いけど僕にはのんちゃんがいるんだけど」

「さらつとすごいと言いますね」

まあどうせ本人は聞いてないしな。

「実は、リョーコさんとの合作漫画が完成したのでお母さんのところに持って行こうと思ってるんです。編集者としてのお母さんに、見てほしくて。だけど、その、一人じゃ怖くて、腰が引けちゃって……」

「もう完成したの？　はやっ!」

まあ、リョーコのペンの速さは今に始まったことではないが……。ハルも初心者だといのに、相当な速さでネームを上げたということになる。僕は少なからず焦りを感じた。顔には出さなかったけれど。

「それならリョーコにお願いすりゃいいじゃん。あいつあちこちの編集者と顔見知りだし、そういう場にも慣れてるんじゃないの」

「そ、それはそうなんですけど……」

「……ああ」

そついうことか。確かに圧倒的に実力も経験もあるリョーコが一緒だと、母親と一対一で向き合うことにはならないかもしれないな。たとえ黙っていてもらっても、どこかでリョーコに甘える気持ちが出てきてしまう。あくまで、自分の力で母親と決着をつけたい、ということなのだろう。

「もっちー先輩なら私が困っても助けくれなさそうだし、お母さんに簡単に黙らせられそうなので私一人の力でお母さんに立ち向かうには最適だと思います」

「お前もさらつと失礼な事を言うな」

まあ親子のギスギスした所を見せつけられるなんて、正直迷惑な

話ではあったが、お願いされたら断れないもっちゃんである。それに、ここで僕が行かないとそこでどんな会話が交わされたのか皆さんにお伝えすることができない（誰に言っているのかはわからない）。

そんなわけでハルのかように失礼なお願いにも、僕は二つ返事で承諾した。

第3話 我が名はシメキリ・クイーン その3

さて、翌日。

光玄社を訪れた僕たちは面談スペースに通され、お茶などご馳走になつていた。窓の無い小綺麗な部屋で、壁は絵もポスターもかかつておらず、一面の白。その眩しさが嫌が応にも僕を緊張させた。「お待たせしました」

十分ほど待たされたのち、部屋にトモエさんが現れた。相変わらず背筋が恐ろしく綺麗に伸びて、凛々しいばかりの表情である。

「お、お母さん」

待ちかねたように身を乗り出して呼びかけるハルを、トモエさんはじろりと睨みつける。

「ここではその呼び方はやめてください。あくまで私たちは、担当編集者と作家という関係です」

ぴしゃりと言い切る。トモエさんは公私をきっちり分けるタイプの人のようだ。ハルは出鼻をくじかれたように、ぐっと次の言葉を呑みこんで、視線を下に向けてしまった。「と、……トモエさん」そう苦しげに呼びながら、がさがさとカバンから原稿を取り出す。「あなたは『ワナビ荘』の望月さんでしたね。わざわざご苦労様です」

「い、いえ」

トモエさんは一応僕にも労いの言葉をかけてくれたが、もうその頃の僕はがちに緊張していたのでろくな返事もできなかった。実に情けない。結局ハルの読みは間違っていなかったことになる。

「こ、これ、私と江ノ島リョーコさんで描いた漫画です。見て下さい！」

ハルはトモエさんに向かって勢いよく原稿を差し出す。ざっと見て四十枚はある。いや、あの短い期間で本当によく描いたものだ。僕は心の中であらためてリョーコに賞賛を送った。

「拝見します」

そう言つてトモエさんは原稿を受け取ると、さくさくと読み進め始めた。よく「編集者は原稿を読むのが早い」というが、実際にトモエさんはかなりのスピードでページをめくった。目が実に真剣である。思わずこつちが申し訳なくなるくらいに（何に對してかはわからない。僕は何しに來たのだろう）。

トモエさんが一通り読み終わるまでに五分とかからなかっただろう。とん、とんと原稿をまとめ、トモエさんはふうつと一つ溜め息をついた。

僕たちはさながら裁判長の判決を待つ被告人の心境だった（と、ハルの気持ちも代弁してみた）。もっとも、僕の作品ではないので別に何を言われたところで僕が気にする必要はないわけで、そう考えると今この瞬間も僕はどんな顔をしているべきなのかさっぱりわからなくなり、眉をひそめているようなゆったりとした笑みを浮かべているような、それでいて頬のピクピク引きつっているという何とも間の抜けた表情をしていたことだろうと思う。本当に僕は何しに來たのだろう。死にたくなってきた。

「絵は、大変綺麗ですね」

開口一番。ハルはうつ、と声にならないうめき声を出す。「絵は」。当然、絵を描いたのはリョーコであり、ハルがメインで担当した部分ではない。

「さて、ストーリー、コマ割り、セリフ等に関してですが、もう少し漫画について勉強してから描かれた方がいいのではないかと思います」

「は、はい」

淡々と告げるトモエさんと、かちかちになってひたすらに頷くハル。とても親の子の会話とは思えなかった。

「まずページ目から説明セリフが多すぎますね。これでは読者はいきなりこの作品を飛ばしてしまいます。序盤にはもう少しインパクトのある画を。それと、短編にしてはキャラクターが多すぎます」

誰が重要キャラで誰がそうでないか見分けがつかない。それなりに重要なキャラの名前が十ページを超えてから明かされるのも不親切な設計です」

「す、すみません」

「謝る必要はありません。あと、構成ももう少し練る必要があります。そもそも存在意義自体に疑問を感じるシーンがいくつか。恋愛ものなら、たとえばこの料理のシーン、ここを削って心理描写にもう少しページを割くべきでは？ 結末も意外性がほとんどないため、この物語が何を伝えたかったのか、テーマがぼやけてしまっています。ただのそれっぽい『物語』では、読者はついて来ません」

「は、はい。すみません」

「謝らなくていいと言っています」

その後も厳しい批評が続いた。部分的に褒めてくれることもあったが、ほんの申し訳程度であり、総合して見ると「まだまだ全然ダメ」と言われていることは僕でもはっきり理解できた。

「以上です。今回の原稿は一応弊社の漫画賞へ応募することは可能ですが、私個人としてはお薦めしません。いかがいたしますか？」

「い、いい、です……」

面会が終わる頃にはハルは涙目になっていた。まあ、こういう言い方をされるとさすがに「出します」とは言えないだろう。それにしても、少しばかり言い方がきつすぎる気もした。

「それでは、次回の作品に期待しております。原稿が上がりましたら、ぜひ弊社まで。光玄社漫画大賞の応募締め切りは今月末日までとなっていますので、よろしければ併せてお考えください」

「あ、ありがとうございます」

かなりへこんでいるであろうに、殊勝にもぺこりと頭を下げるハル。僕も合わせて頭を下げた。目の前のトモエさんが、初めて会ったときより一周りくらいは背が高く見えた。

「トモエさん」

僕は部屋を出たところで、彼女を背後からそっと呼び止めた。ハ

ルが聞いていないことを確認しながら、小さな声で尋ねてみる。

「不躰な質問で申し訳ないんですが……、先ほどの対応、あれは自分の娘だからこそのものですか、それとも作家さんにはみんなあんなんでしょうか。少しばかり言い方がきつすぎた気も……」

「あのくらいできついと感じるならば、あの子もあなたも作家には向いていないでしょうね」

トモエさんはバツサリと切り捨てる。やはりこの人は、手強い。

僕は思わずたじろいでしまう。

「……しかし、私も人間です。完全に私情を排す、ということは実質不可能なことは申し上げなくてもご理解いただけるかと思います。もちろん、できるだけそう努めてはいるつもりですが」

そこで、トモエさんはようやく笑顔を見せた。

「次はあなたの作品も読んでみたいです。完成したらぜひ弊社にお寄せ下さい。若い方々の挑戦を、私たちはいつでも受け付けていますよ」

「いやあ、はは、お恥ずかしい……」

もし持ち込むにしても、できればこの人以外が担当ならいいなあ、と思う僕であった。

第3話 我が名はシメキリ・クイーン その4

「ああ、それならわかってたよ」

その夜、ワナビ荘に戻ったハルは（僕の）部屋にこもってしまい、鍵をかけて入れてくれなくなった。仕方なく僕はリビングでジュースを飲みながらリョーコと今日のことについて話をしていた、その時のこと。リョーコは事もなげに、僕が思わず目を向くようなセリフを吐いたのである。

「あたしはあの子の思うままにネームを切らせた。結果できたのは、勢いはあるけど、まだまだ未熟な作品とも呼べない作品。ハルのお母さんの指摘は鋭くて、さすがプロだと思うけど、でもその半分くらいならあたしがネームを見た段階でも言えたこと」

「……そうなのか？」

僕は驚いてソファから立ち上がった。カフカは驚いてキッチンの方へと逃げていく（「カフカ？ ちょっとあっち行ってなさい、今お料理作ってるんだから……、あっち行けっつってんだろがぁ！」とDJが切れる声がきこえた）。

「そーね、あたしも伊達に漫画描きやってないからねー。多少は見る目を養ってきたつもりよ」

「それなら……、それなら、どうしてちゃんとそれを教えてやらなかったんだ？ お前が手を加えるだけでも、今よりもっといい作品になっただろうに。コマ割とか、セリフの言い回しとか……」

「あのねえ」

リョーコは読んでいたBL小説をパタンと閉じた。

「あたしはあくまで絵を描くだけ。話を考えるのはあの子の仕事なの。だいたい、そんなことしたら八割方あたしの作品になっちゃうじゃない」

「うーん、そりゃあ、まあ……」

「アドバイスを与えるのは編集の、もっと言えばあの子のお母さん

の仕事。大体、あの子は自分の力でお母さんに挑みたかったんでしょ？ あたしはそれに手を貸すだけの存在よ」

ということは、ある意味で作品の出来を度外視して、ハルの戦いに協力してくれたということか。あれだけの原稿を描いてまでハルを作家として育てるために、あえて不完全なままトモエさんにぶつけさせた。

「優しいんだな、リョーコは」

「べ、別にあの子の事を思ってたんじゃないんだからねー。勘違いしないでよねー」

なぜやりなツンデレである。

しかし、その結果ずいぶんとへこまされたハルが今後どうなっていくかは気になるところである。今も（僕の）部屋にこもったままだし……。もしこのまま再起することなく、落ち込んで今後作品が描けなくなれば、せつかくのリョーコの気遣いも無駄に終わるというものだ。

「それならハルがそれまでの子だったってことねー。これしきで作品を作れなくなるようなら、ワナビ失格、ってところ。あたしもいい絵の練習になった、くらいに思ってた諦めるよ」

私、ワナビになりたいんです、か。アイワナビーワナビー。

このワナビ荘に初めてやってきた日にハルが言っていたセリフである。確かに、「ワナビになる」ということ自体が実はそれなりに大変なようだ。何しろ、何があるうと書き続け、あるいは描き続けなといけない。どれだけへこもると、どれだけ辛かろうと、どれだけ没にされようと、だ。

それから数日が経過すると、ハルはさすがに表面上は元気を取り戻し、以前のように僕やのんちゃんとはしゃぐようになっていた。が、あまりペンを執っている場面は見かけなくなった。リョーコもあえて何も言わないようだった。そんな風に、なんとなくあの日のことはうやむやになり、没になった原稿も、触れていいのか悪いのかよくわからない位置に、まるで賞味期限切れのお菓子のようにぼ

つねんと置かれたまま、いくつか平和な月日が過ぎていった。

そしてそんな折、八月も最後の週に差し掛かったころのことである。思わぬニュースがワナビ荘を席巻した。

第3話 我が名はシメキリ・クイーン その5

まー君とみちるさん。

が、ホラー小説賞をとった。

「うそおおおおおおおおおつ!?!」

住人たちの絶叫がワナビ荘にこだまする。

「マジマジ、もう発表になってたの!?! やったじゃん!」

「発表はまだです。ついさっき編集社から電話があつて。佳作ですが、賞金十万円と、公式に出版、つて……」

「や、やったね、まー君……」

まー君の手はぶるぶると震えており、みちるさんはぼろぼろと涙を流していた。僕は頭の中がかあつと熱くなるような、いつものダイニングの景色がぐにやぐにやと揺れるような、そんな錯覚を覚えていた。

「あらー、凄じじゃない、やったわね! おめでとう、あなたたち! 今夜は祝杯ね!」

「お二人とも、尊敬しちゃいます! こんなに有名な賞で佳作をもらえるなんて。本当におめでとうございます!」

「うーん、嫉妬で今夜はメシマズ! でも本当に二人とも凄いわー」

「本当に凄いです。おめでとうございます、まー君、みちるさん」

「よかったあ、よかったあ……」

みちるさんは、よほど嬉しかったのだろう、床に蹲ったままずっと嗚咽を漏らしていた。すごいすごい、おめでとうとハル、DJ、リョーコ、のんちゃんの四人は二人をはやし立てた。みんなが笑顔で、心から二人を祝福していた。

僕だけが、何も言えずにその光景をただぼんやりと見ていた。何か言おうと思つても、言葉が出て来なかった。

……僕は、みちるさんとまー君が寝る間も惜しんで作品を書いている間、書いている書いているとは言いながら、本当にちよびつ

とずつしか作品を書き進めていなかった。今日は気が進まないとか、調子が悪いとか、忙しいとか、自分にいろいろと言いついて、まともに自分の作品と向き合う時間をとってこなかった。

リョーコやハルの頑張りも、リアルタイムで見ていたはずなのに、どこかで僕はそれらを、見てみないふりをしていた。

その結果、これだけの差がついてしまった。その現実を突如、目の前に突きつけられたのだ。

ショックだった。

見えないところで（実際はけっこう見えてたけど）必死に努力を重ねていた二人が。何も見えていなかった自分が。そして今、こうして受賞した二人を、素直に祝福してあげることのできない自分が。そう、僕は、ひよっとしたら、いや　おそらく、彼らが落選することを心のどこかで願っていた。

いつまでも自分と同じレベルにいてくれることを、ひそかに願っていた。

そんな僕だったから、とてもじゃないけど心から「おめでとう」なんて言うことはできない。僕はよろよろと震える足でまー君に近づき、一言「よかったね、お疲れさま」と声をかけ、「ちよつとトイレに行ってくるよ」と何でもない風を装ってこつそりと外へ出た。綺麗な月が出ていた。僕は、住宅街の中伸びる道を、あてもなく歩き出した。最初はゆっくりと、徐々に早足に。車の通る広めの道路へ辿り着く頃には、僕はすでに殆ど駆け足になっていた。

ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう……。

何に対して悪態をついているのかもわからずに、そうぶつぶつと繰り返しながら、僕はやがて全速力で走り出す。国道を逸れ、月の照らす堤防へ達したとき、僕は誰を憚ることなく大粒の涙を流した。「う……、う、うああああっ」

僕は草の上にボタンと倒れ込み、上着の袖で涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔をぬぐった。草と涙の混じった、しょっぱくて、どこか懐かしい味とにおいが鼻の奥から伝わってきた。

「あああああつ！」

僕は大声をあげた。それは都会の夜空をほんの一瞬震わせたように思えたが、すぐに行き交う車の音と川の流れる音にかき消されてしまった。

……思い切り泣くと、気持ちが良いんだな。

そんな当たり前のことを今さら我が身をもって実感する。しばらく僕はそのままの姿勢で夜空を見上げていた。ぽっかりと、丸い月が浮かんでいた。草の香りと、どこからともなく漂ってくる何か焦げたようなにおい、川と車の音、生ぬるい風、軽い疲労感……。そんな何気ないあれやこれやに包まれて、しばらくぼーっとしていた。

「……何してるんです？」

そのまま三十分も過ぎたころだろうか、遠慮がちに僕に話しかけてくる人影があった。ハルだった。

「お前こそ、なにやってんの、こんなところで」

「……別に、です」

ハルは堤防をそろそろと降りてきて、僕の横で腰をおろした。残暑のぬるい空気の中、芝生は微かに湿っており、座ると生地がぐっしり濡れちまうぞ、と注意しようかと思ったが、ハルはそんなこと一向に構わない様子だった。

「あーあ、もう」

ハルは空を見上げて溜め息をつきながら、けだるそうな声を上げた。都会の空にはなかなか星は見えない。一番星も流れ星も、人間からその身を隠しているから、願い事をどこに向かってかけたらいいかわからない。それが東京の空だ。

「逃げてきちゃいました。なんだか涙が出そうになって、慌ててそれを隠そうとして……、大急ぎでみんなの輪を離れました。結局とつても目立つちゃいましたね。こういうときにうまくごまかせないのが私です」

「涙……」

「ダメですねえ。私、悔しい。あの二人が、うらめしいです」

「……………」

僕は少なからずその言葉には驚いた。あれだけ喜んでいたように見えたハルが、そんな風に感じていたとは。

「物心ついたときから漫画家になってやるんだー、って意気込みながら、彼らみたいになんかとした結果も出せずここまで来ちゃって……。そんな自分が、悔しい。嫉妬してる自分が、なんだかイヤです。私、素直にあの二人の受賞を祝ってあげられなくて……。本当にイヤな奴です……………」

膝を丸めて顔を隠すハル。彼女の心情吐露はまともがなく、思いついたことをそのまま口に出している感じだったが、それゆえよく彼女が胸に抱いているもやもやが理解できた。なぜならそれは、僕も今この瞬間に、彼女と同時に抱えているものだったからだ。

僕は自分と同じものを抱えているハルに、どう声をかけていいかわからず、……。気付くと口をついて出るに任せていた。それは僕自身も思ってもみないセリフであった。

「……………いいじゃん、嫉妬しても」

「え？」

「受賞者に嫉妬、けっこうじゃねえか。羨ましいっていう想いはそのままモチベーションにつながるもんだろ。大いに嫉妬しろよ。それに……。お前には協力者がいるじゃねえか。ハル リョーコはどうなったんだ？」

「あ……………」

思い出したようにハルは顔を赤くした。そう、彼女は作家としてリョーコと組むと約束したのだ。もはやハルの作品は、ハル一人のものではないはずだ。そのことを今まですっかり忘れていたことを恥じるように、ハルはぐつと顔を上げた。

「八月の漫画賞！」

「は？」

僕は一瞬なんのことかわからなかった。

漫画賞……。ああ、そういえば。僕は光玄社での記憶を手繰る。

トモエさんが言っていた、八月締め切りの漫画賞……。ちなみに今は八月下旬。締め切りまで一週間もない。

「応募します！」

「……え？」

「今から描いて、応募します！」

「おいおい、ちょっと待て、そりゃあいくらなんでも」

「よっしゃ！」

背後から元気のいい声が響いた。僕たちは同時に振り向く。そこには、腕組みをして仁王立ちになり僕たちを見下ろすリョーコの姿があった。チエシヤ猫のごとく満面の笑みを浮かべている。

「よーやくやる気になったね、ハル。その言葉を待ってたよ。あなたの方はスタンバイOKだよ、いつでもどんと来い！ 残り約一週間、本気のあたしたちを見せてやろうぜ！」

「は、はい！ よろしく願います！」

リョーコに向かって深々とお辞儀をするハル。その目にはもう迷いはないように思われた。ハルはその場でもむろに携帯電話を取り出すと、短縮ダイヤルで誰かにかけた。川から少し強い風が吹き、ハルとリョーコの髪を揺らした。

「わ、私、薬師寺ハルです。光玄社の薬師寺トモエさんでしょうか。あ、あの、わ、私……」

ほんの少しだけ言いよんだのち、ハルは吹っ切れたように、
「私、八月の漫画賞に応募します！ これまでにトモエさんが見たこともない傑作を引っさげて行くから、今から首を洗って待ってろッ！」

僕とリョーコは思わず目を丸くした。受話器の向こうからは沈黙が流れてくる。ざざつ、と一陣の風が通り過ぎると、遠く車の行き交う音以外は沈黙が夜の堤防を支配した。ごくろ、とハルが唾を呑む音が聞こえた気がした。

「あっはっはっはっはっは！」

沈黙を破ったのは、受話器の向こうのトモエさんだった。普段の

様子からは想像もできないような明るい笑い声が、少し距離を置いた僕たちにも聞こえた。僕は思わずリョーコと顔を見合わせる。

「いいね、そういうのを待ってた！ こないだのあんたはちよつと元気がなさすぎて張り合いがなかったところなんだ。いいよ、遠慮なくどんと来い！ 来るものは拒まず、去るものは追わず。あんたの力作、期待してるよ」

それはすでに親子の会話だった。ああ、と僕は思った。ようやくこの薬師寺親子の本当の姿を見た気がした。二人は作家と編集者でもあり、同じ趣味を持つ友人同士でもあり、また時にはいがみ合い、時には寄り添い合う、どこにでもいる、普通の親子だったのだ。

「それじゃあね。今から早速原稿やらないといけないから、電話なんかしてる暇ないんだ。光玄社で会いましょう！」

「ああ、待ってるわ。しつかりやりなさい。そうそう、当然ながら締め切りは厳守ね。三十一日の夜十二時までに届かなかったらアウトだから。それじゃ、あたしも仕事忙しいの。長電話なんかしてる暇ないのよ。またね」

そんな風にして電話は切れた。僕とリョーコは呆気にとられてハルを見つめていたが、僕らの戸惑いなどお構いなしに、ハルはくりと振り返るといきなり僕の手を取ってこう言うのだった。

「もっちー先輩、もう一回手伝ってください！ 一週間で完成させるにはアシスタントが必要です！ 一緒に頑張りましょう！」

「やっぱり僕も巻き込むんかい！」

僕の絶叫を最後に、ようやくその夜の堤防に静寂は戻ったという。その日から早速、僕たちにとって本当に熱い「夏」が始まったことは言うまでもない。

せっかく湧きあがってきた僕のやる気がほぼ全てハルの漫画の製作に費やされたことも言うまでもなかった。

第3話 我が名はシメキリ・クイーン その6

腐女子だっていいじゃない！

B L好きでもいいじゃない！

おかげで青春取り逃がし 恋愛も知らず黙々ペンを動かす
イエイエーイ！ 腐女子バンザイ！

ワナビだっていいじゃない！

叩かれたっていいじゃない！

だって今私輝いてるし インクとトーンにまみれても

好きな事を全力でやるってステキ！

イエイエーイ！ ワナビバンザイ！

「あんたたち、何時までやととるつもりじゃクラア！ ご近所迷惑だから大声で歌うんじゃないやねえつつてんだろが！ おん出すぞ腐れワナビども！」

D Jが鬼の形相で入ってくるまで気付かずに大声で歌いながら作業をしていた僕、リョーコ、ハルの三人である。もちろん作業場は僕の部屋。おそろしいほどの急ピッチでの原稿だったので、全員ありえないテンションになっていたのだ。

インクが僕にこぼれたりペン先が僕に突き刺さったり、むしろくしゃした二人が僕をとりあえず引っぱたいたりと（これはさすがに理不尽だと思った）ハプニングも続出、部屋には一生かかっても抜けないくらいにインクの匂いが染み付いてしまった。

さらに、前回とは打って変わってリョーコのハルに対する態度が厳しくなった。

「こんな演出で読者がびっくりすると思ってんのあんたは！ 読者なめんな！ 十年古いのよあんたの頭の中は！」

「短編でキャラを崩壊させない！ キャラ崩壊は長編でファンがつ

いてこそおいしい企画であって、読みきりでやられても読者がとまどうだけ！ もっと読み手を意識しな！」

「構図が単純すぎて四コマ漫画みたいになってる！ いいえ、今日び四コマでももっと挑戦的な構図を使ってくるわ、新人が安定目指してどうするの！ 攻めよ、攻めあるのみ！ どああーっ！」

途中からよくわからない精神論になっていたが、僕は女性二人が怖ろしい勢いで上げてくる原稿にベタを塗ったりトーンを貼るだけで精一杯だった。漫画を描くというのはおそろしく精神が削られる作業であつた。漫画家はみんなこんなことを毎日やっているのか、と思うと気が遠くなりそうだった。僕なら絶対途中で死んでるぞ。

そうして僕らが命を削って原稿を上げている間にも、日は昇り、沈み、昇り、沈み……、アレから何日が経過したかよくわからない。もはや時間の感覚も日にちの感覚も、腹がいつぱいなのか減っているのか、眠いのか眠くないのかもよくわからない（こうして文字にすると非常にやばいことがわかる）状態に僕はなっていた。はっ、と僕が気付いたのは何日目かの夜のことで、気を失う前は確か窓から光が差していたから、どれくらい寝たのか、朦朧とした頭で僕が携帯電話の日時表示を見たとき、思わず声にならない悲鳴をあげてしまった。

「ひよえええーっ！ も、もう八月三十日の午後八時であります隊長！ 明日には原稿を提出しないとけません！ しかしまだ十枚くらい原稿が上がってきてませんよ！ ほら、ハル隊員も白目向いて泡吹いてるし！ こんなのもじゃないけど間に合いかねます、お先に離脱しますどうかご無事で」

「慌てるな望月隊員！ 状況は切迫してはいるが、絶望ではない！ 途中で舟を降りることは許さぬぞ！」

そのときの僕たちはワナビ号に乗船した宇宙警備隊という設定だったので（つまりそういうテンションだったのである）このような口調だが、実際締め切り前日に白紙の原稿があるという状況がどのくらいまずいのかは、原稿やった人ならわかっていただけたと思う。

つまり、そのくらいヤバいのだ！

「嫌だ嫌だ死にたくない！ もうこんな生活やめてやるー故郷に帰ります！ 真夏の夜に腐女子二人と狭い部屋の中で汗を流したのも今は良き思い出、あんなやんちゃしてたころもあったなあって会社帰りにしみじみと思い出すそんな普通の生活に帰ってやるんだい！

さらばっ隊長あなたのことは忘れません！」

「ふざけるな、途中下車は許されないとやっておろうが！ 待てっ、おいこら窓から逃げようとするな、ココは二階だ！」

「構いません！ こんな生活が続くんなら死んだ方がマシだアッ。

うわああん、死ぬ前に女の子のおっぱい触ってみたかったよオ」

「ええい、かくなる上は死なばもろともだアッ、一緒に飛び降りるぞ望月隊員！ 私だつて死にたくなる時はあるんだ、うわあああん、死ぬ前にイケメンの彼氏とイチヤイチャしてみたかったよお！ ふえええゝゝん」

「うわああゝゝゝん！」

感極まって大の大人二人が月に向かって絶叫、号泣の図である。

つまりこのくらいヤバいのだ！

「わ、私だつて死ぬ前にお母さんに一泡吹かせてみたかったんですう！ うわあーん、締め切りなんて死ねばいいのに！ 締め切りなんて死ねばいいのに！ ひiiiiiiiiいん」

いつの間にか気絶していたはずのハルも参加していた。こうなるともう手をつけられない、三人揃って夜の住宅街に向かって大合唱である。

「てめえら何度言ったらわかるんじゃボケエ！ 二度とお天道様見れないところにぶち込むぞ若造共！」

DJが部屋に乱入してさらにうるさくなる。明日からご近所さまには顔向けできないかもしれない。

と……、そこで僕はようやく気付いた。部屋の中にはDJだけでなく、のんちゃん、まー君、みちるさんまでもが来ていた。全員、ペンやカッター、トーンなど思い思いの画材を手に持っている。

「あたしが手伝ってやるからもう騒ぐんじゃない！ ほら、どこやればいいの！？ さっさと原稿出さないハルちゃん」

「僕たちも拙い腕だけどアシストさせていただきますよ、ハルさん。あなたの戦い、最後まで見守らせていただきます」

「まったく、仲間なのに水臭いです！ みんなで最初からやってればもっと早く終わったかもしれないのに。もおう」

「み、みなさん……」

疲労がピークに達していたせいもあるだろう、ハルは感極まってボロボロと泣き出してしまった。しかし、そこにすかさずリョーコが、

「かあつ！」

気合を入れながらバシン、とハルの背中を叩く。おえっ、とハルがえづいた。ゴホゴホと咳をする。鼻水と涙で顔はぐしゃぐしゃだ。「泣いてる場合じゃないでしょー。いい？ ワナビの泣つてもんは、原稿が完成してお母さんの元へ届けて、さらにそれが認められて賞を受賞して連載が決定して、そのくらいまでとっておきなさい！ 今は一刻も泣いてる暇なんてないの。前進あるのみ！ さあ、みんなが手伝ってくれるんだからその分早くペン入れを終わらせないと！ ここから完成までノンストップだよ！」

かくして、リビングで全員が黙々と原稿に向かうこととあいなつて、ワナビ荘の眠らない夜は更けてゆくのである。その日のワナビ荘は爆発的なやかましさの後、今度は気持ち悪いほど静かになり、ただひたすら複数のカリカリというペン入れの音だけが夜の道に響き渡っていたという。のちのちまで語られるワナビ荘近辺の伝説である。外まで響くペンの音なんて、信じていただけるだろうか。

「妖怪Gペン女」なんてのもいていいかもしれない。「一枚、二枚……原稿が足りないあい」と言つて締め切りが過ぎたとも知らずに原稿を描き続ける妖怪である。近所を通る人がいたらアシスタントとして引きずり込み、ベタ塗りの永久地獄へといざなうことである。あなたも、カリカリ、カリカリというペンの音が誰もいない夜

道に響き渡っていたら、用心である。

第3話 我が名はシメキリ・クイーン その7

で。

直前の段落で描写したと全く同じ光景が僕の目の前に広がっているわけだが。

全員がワナビ荘のリビングで、黙々と、一言もしゃべらずに原稿に向かって作業をしている。トーンを貼っている者もいればベタを塗っている者もいる。全員、席の移動すらしていない。トイレと水分補給のときに少しだけ席を外す程度で、あとはひたすら作業に没頭している。外は暗く、どれくらい時間が経過したのか傍目にはよくわからないであろう。（変わらないのはソファで寝そべっているカフカくらいである。お前も手伝え。）

だが！

実は、本当のことを言うと、実際のところ、なんと、あれから一度日が昇り、沈んだのである！

信じられるだろうか！

つまり今は八月三十一日の夜であり 締め切りの夜なのである。もう郵便局も閉まっている。本当にこれ、間に合うの？ とみんなが心の中では思いつつも、口に出せず、作業を行っているというのが実のところであった。

どうなるんだ？

タイムアップになったら、結局ハルは「間に合いませんでした」で済ませられるのか？

そんな言葉が、あれほどの啖呵を切ったハルに言えるだろうか。

それで本当に乗り越えられるのか？ あの、トモエさんを。

否。

「終わったあああああ！」

リョーコの叫びである。ついに全てのページのペン入れ、および

ベタ塗りが終了したのだ。

「DJ、そっちはどう!？」

「あと数分でトーン終了よ。のんちゃんは？」

「ばつちりだお！ 背景完璧！ ただ細かい修正に三十分は欲しいトコロ」

「ありがとう。まー君は車出す準備しといて」

「ラジャーです！」

「お、おいおい。車って、まさか……」

「そのまさかよ。光玄社まで直接乗り込む！ ハル、最後の一枚はあんたが仕上げなさい。お母さんに見せて恥ずかしくない出来にね！ 一番大切なシーンなんだから！」

「もちろんです！ 任せて下さい！」

さながら統率の取れた軍隊のように当意即妙な受け答えであつた。間違ひなく、ワナビ荘の全員の心が一つになっていた瞬間だと言えるだろう。僕は手を動かしながらも、よくわからない感動に包まれていた。

そして、予定よりも大幅に遅れて、八月三十一日、午後十一時。

ようやくその瞬間は訪れる。

「でえーきたああー！！」

ハルが高々と原稿をかざす。パチパチパチ、とまばらな拍手。のんちゃんとみちるさんはすでにぐったりしていた。

「よし、乗りこめ！」

ハルはできたばかりの原稿を胸に抱えると、まー君のゴーストタクシーの助手席に乗った。運転席ではすでにまー君が発進準備体勢である。

「よっしゃ、行って来なさい！ リョーコ、もっちー、まー君、そしてハル。無事を祈ってるわ！」

DJが僕のお尻を引っぱたく。くそう、後で見てるよ。僕はDJをぎろりと一睨みすると、リョーコと共にゴーストタクシーに乗りこむ。その瞬間にまー君は急発進。夜の街を、ひときわ目立つゴー

ストックシーが疾走する。

「スピード出し過ぎて捕まんないでよお、まー君」

「気をつけますが保証はできません。それよりしっかりつかまっていてください！」

ギョオオオ、と普段は耳にしないような怖ろしい音を上げてカーブを切るゴーストタクシー。首都高へと入り、ネオン煌めく繁華街、そして青白いオフィス街へと進んでゆく。ワナビ荘から光玄社までは、普通車で移動しても、一時間で到着するかどうかは怪しい距離であった。

「……ああつ、アレ見て、もっちー！」

リョーコが何かに気付いてフロントガラスの向こうへと指をさす。なんとということだ！ 僕は首都高の曲がった先の道、目の前に広がる光景に思わず頭を抱えた。渋滞である。それも、かなり大規模な。

「まずい、これじゃあ間に合わない……」

あつという間に渋滞に巻き込まれ、数メートルも動けなくなるゴーストタクシー。締め切りの夜十二時まで、すでに三十分を切っていた。

「……もっちーさん」

顔面蒼白、と言ってもいいほど青白い顔をしたハルがこちらを振り向いた。ガタガタと震えている。ここまで、……ここまで来て、もう間に合わないという現実を目の前に突きつけられたのだ。震えましょう。

どうするか。事情を話せば、トモエさんもわかってくれるか。この時間まで精一杯頑張ったんだと。誠意をもって謝れば、ほんの少し遅れても許してくれるんじゃないか。僕たちはここまでよくやった、努力だけでも認めてもらえば、それでいいじゃないか。……そんな考えが僕の頭をよぎった。

だが、しかし、僕は。

「……諦めんのはまだ早い！」

バターン！

僕はゴーストタクシーの扉を開く。渋滞の高速道路のと真ん中である。途端に、周りの車両から抗議のクラクションが一斉に鳴らされるが、もはや気にしている暇も惜しい。僕はハルの座る助手席の扉を開き、手を伸ばす。

「ハル、降りろ！ 走るぞ！」

「は……、はい！」

一瞬躊躇したものの、心を決めて僕の手を掴んだ。じんわりと汗をかいていた。僕はその手を離すまいと懸命に握りしめながら、車体の間をぬって走り始めた。

「ち、ちよつと君たち！ なにやってんの！ 危ない、止まりなさい！」

背後から静止の声がかかるが、僕たちは止まらない。締め切りは絶対だ。

これは、漫画の締め切りであると同時に、ハルとトモエさんの戦いの締め切り、なのだ。時間内に届けてはじめて、ハルはトモエさんと戦う資格を得ることができるのだ。ここで間に合わなければ、ハルは負けだ。誰がなんと言おうと負けなのだ。

「負けさせない……、負けにはしないぞ、ハル！」

そして、僕たちは走った。

夜の街を。光玄社のある方向へ向かって、一目散に。何度も呼び止められたが、振り返らなかった。僕たちは、疲れた体で、もう何日も寝不足のふらふらの頭で、無我夢中で、締め切りへ向かって、走った、走った、走った。

そして、もうすっかり息をするのも忘れたころ、僕たちは辿り着いた。

光玄社のオフィスビル。まだ半分くらいのフロアからは煌々と明かりが漏れ出ていた。エントランスにもちらほらと人影が見える。

そして、一人で玄関前に立って外を眺めているスーツ姿の一人の女性がいた。しきりに腕時計を気にしていた。僕は彼女の姿を認め

るなり、最後の力を振り絞ってハルをぐいつと引っぱり、彼女の前にどんと押し出した。完全に息が切れて伸びていたハルは、それでも落とさずに必死に持ち運んでいた原稿を両手で彼女に差し出すと、「じゃ、じゃまあみやがれ……」と言い残してその場にボタンと倒れた。

……渡った。

彼女の手には、原稿が。

ついに、渡ったのだ。

僕は思い出したように腕時計を見る。長い針はちょうど数字のゼロを指した状態だった。僕たちは間に合ったのか、それとも……。
「お疲れ様、ハル リョーコさん。光玄社漫画賞の応募原稿、確かに受け取りました。応募作品につきましては、弊社にて厳正なる審査を行わせていただきます」

彼女のはつきりと通る声。その言葉を聞いて、ようやく僕も足の力が抜けた。よろよろとその場にくずおれる。よかった、間に合ったんだ……。

そう思った途端、怒涛のように眠気と疲れと体の痛みが押し寄せ、僕は泡を吹いて気を失ったのであった。

「よくやったね、ハル。見直したよ」

そんな声が聞こえた気がしたのは、夢だったのか、はたまた現実か。

今となつては確かめるすべはない。

第3話 我が名はシメキリ・クイーン その8

その後のことを少しだけ書いておこうと思う。

僕はとりあえずよく寝た。ハルもよく寝た。

あの後、実に迷惑な事にエントランスで眠りこけてしまった僕たちを、後から追いついたまー君とリョーコが引き取ってくれた(らしい)。そして僕たちはワナビ荘で丸一日眠りこけた。全員が全員疲れていたから、起こしてくれるものは誰もいなかった。その一日、珍しくワナビ荘はずっと静かだったことになる。とるものもとりあえず、僕たちはリビングで、自室で、ソファの上で、思い思いの場所でつかの間の休息をとった。

そして僕が目を覚ましたとき、すでに世界は一変していた。というわけもなく、またいつも通りの日常が帰ってきた。大学へ行き、夜は当番がご飯を作り、みんなでワイワイ食べて、夜は眠りにつく。皆、各々自分の作品を描いたり書いたりしながら、それぞれの夢を追いかける。そんないつものワナビ荘が、帰ってきたのだ。

ハルはというと、あの後一度だけ光玄社へ行った。今度は一人で。おそらくトモエさんと、作品について、今度こそ一対一の決戦をしに行ったのだろう。もっとも、その内容に関してはいちいち書き記すのも無粋だし、そもそも僕は行っていないのだから彼女たちが一体どんな言葉を交わしたのかも知らない。ただ、その日光玄社から帰ってきたハルは、とてもすっきりした、いい顔をしていたことは確かだ。

「母親ってさー、特に恨みとか憎しみの原因があるわけじゃないんだけど、ケリをつけるっていうかー、しっかりどこかで勝負しないといけないときってあるよね」

ある日のこと、いつかのようにリビングで二人でくつろいでいるときに、リョーコがぼそりと言った。

「そっいうもん？ エディプスコンプレックスか何かに近いんじゃない

ないのかな。まあ、僕も親に意味もなく反抗したこと一度や二度はあるけど……。リョーコにも親との確執とかあんのかな」

「あたしも『漫画家になる』って言ったときはねー、親に大反対されたもんよ。まあ、気持ちはわかるっつーか、あたしが親でも不安だけどね。子どもがそう言い出したら。ま、見返すチャンスを与えられてるだけありがたいって言えるけどね」

テレビはさつきからずっと、日曜の夕方に定番のアニメを流している。ずっと変わらず、多くの人々に愛され、親から子へと受け継がれてゆく漫画。時代の流行に流されず、自分のスタイルを確立した作品。

「なんて言われたか気にならないの？ あの世界。ハルとリョーコの合作なわけだから、リョーコの漫画家生命にも関わってくるんじゃない」

「ん……。そりゃあ、まあ」

リョーコはコーヒーをゴクリと飲み干し、ほうつと溜め息をつく
と、……。パンツ！ と机を勢いよく叩いた。

「気にならないわけじゃないでしょおお！ 今までさんざん応募してきた、大量に没を食らったあたしだよ！ 特に今回の作品にかけた情熱はすごいの！ もー、気になって気になって夜も眠れないッ！」

「な、なら一緒にリョーコもトモエさんのところへ行けばよかったんじゃない……」

「それはできないっ！ そこはハルのために譲らないといけないー線！ なにとぞカンニンっ！」

顔を隠して悶えるリョーコである。……。まったく、大したセンスイがいたものである。だが、まあ、彼女のハルに対する優しさには頭が下がる思いである。二人のためにも、今回の作品が、いい結果になればいいと思った。

不思議な感覚であった。まー君たちが受賞したときはあれほど嫉妬し、身を焦がすような悔しさに包まれたというのに、今はまー君たちの受賞も素直に祝福できるし、ハルとリョーコにも結果を残し

てほしいと心から思っている。これが、本当に頑張った者の心境なのか、と僕は一人ごちたりした。

「リョーコさん、もっちー先輩！　アイス買ってきました。一緒に食べましょー」

窓からひよいと顔を出したのは相変わらず元気なハルである。両手にガリガリ君を携えていた。外ではそろそろ盛りを終える蝉が、有終の美と言わんばかりに力いっぱい鳴いている。もう夏が終わる、と僕は感じた。

部屋にひよこつと入ってくるハル。彼女は今でもリョーコと仲良く漫画を描いている。さすがにあの夜のような悪夢が繰り返されることはあれ以来ないが、今回の原稿がダメだった時に備え、早くも次の作品の製作に取り掛かっているようだ。まったく、つくづく大したものである。いや、ワナビは普通こうあるべきなのか。

やっぱり、ワナビってのは大変な生き物である。僕も見習わねばならない。アイスをガリガリかじりつつ、リョーコとハルがアイスを使ってポツキーゲームのようなことをしているのを横目で見ながら僕は思った。

二人の作品が光玄社漫画賞の特別賞を受賞したという知らせを聞くのは、それから二カ月後のことになる。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に吠える その1

のんちゃんという人物について紹介しよう。

本名、北原乃梨恵。十八歳。四月二十五日生まれ。血液型A型。

声優志望。声優専門学校に在籍二年目。出演歴なし。

住所・都内某所、ワナビ荘201号室。

アルバイト、コンビニ店員。時給八五〇円。転職を考え中。

特徴、アニメ声、おかっぱ頭、メガネ。

好きなもの、アニメ、ハリウッド映画、ゲーム（特にファンタジーRPG）、落語、音楽鑑賞。

苦手なもの、いじめ、集団行動、噂話、その他自分を不安にするものすべて。

自分を脅かす存在、すべて。

さて、今回の話についてはあえてのんちゃんの視点を交えて描かせてもらうとしよう。実際に物語の観測者はこれまで通り「僕」と望月であるし、そうである以上彼女の心情については想像や後から聞いて辻褄を合わせた部分が多々あるため、完全に正確とは言えない。だが、今回に限っては完全に彼女が主役であるし、彼女の視点で語ることではしか出ない臨場感というものもあるう。そうした理由から、僕は強いてこの物語の一登場人物としての立ち位置を守りつつ、進行を勤めさせていただこうと思う。

そろそろ読者諸兄も僕一人の語り口に飽きてしまわないかと心配であった頃合いであるし、そういった意味でもちょうど良いタイミングである。

案山子、と書いて何と読むかご存じだろうか。

そう、「かかし」である。

そもそもかかしという言葉は「嗅がし」から来ているのだという。

その昔、作物を狙う鳥や獣を追い払うために、髪の毛や魚を焦がして串に刺して畑に立て、その悪臭を利用したのだという。

私は、この案山子に似ている、と自負している。

もちろん、私から悪臭がするというわけではない（と思う）。お風呂には毎日欠かさず入るし、人と会う前にはエチケツトスプレーは欠かさない。そういったところには気を使う北原乃梨恵である。

そうではなくて、人を寄せつけない、追い払ってしまう、そうしたところに私と案山子の共通点がある。

言うなれば、存在自体が悪臭、なのである。

加えて、人形のようなもの、という点も一致している。どうも私は人形程度にしか認識されていない、一個人として見られていない、そう気付いたのは中学校に入学して間もない頃だった。

表立っていじめられたわけではない。たとえば校舎の裏に呼び出されて殴る蹴るの暴行を受けたとか、昼休みごとにパシリをさせられたとか、そういう目に見える何かをされたという事実はない。

ただ。

なんとなくみんなから無視されて、なんとなく周りに人を寄せつけず、なんとなく孤立したままの人生を過ごす。それが私だった。

小学生くらいの頃は友だちもいたのだが、中学、高校と、自分も周りも精神年齢がそれなりに上がってくるにつれ、私がそういうタイプの、言うなれば一人になりやすい人間であるということとはよりはっきりとわかってきた。そこでそうした自分のあり方に不満を抱き、努力して友だちを作るようならばまだ良かったというものだが、残念ながら私にはその気力もモチベーションもなかった。

苦手意識を克服し、身を削る努力をしてまで友だちを作ることに、魅力を見出せなかったのである。

そしてそうした状態は、私が専門学校にいる今も全く変わらない。学内には顔見知りはあるものの数いるし、会話をしたり、一緒に訓

練をしているときなどに特別な扱いを受けているわけではない。ただ、彼らと友達と呼べる距離にいるかという、否定せざるを得ないのである。

そんな風にして私は一年を過ごした。それで別段困ることもなかったし、気にすることもなかった。こんな風にして、誰とも深くかわらずに、自分は一生過ごしてゆくんだろ。心のどこかでそう思っていた。

では、どうして私は声優になろうと思ったのか、これは、笑われてしまうかもしれないが、かなり単純な理由である。

「アイルビーバック」と最後に言う、あの映画、あの映画の主人公に、……特にその声に、恋をしてしまったからである。

幼い日の私は、もう、あの格好いいオジサマに夢中になり、自分だけの夢の世界の中で、何度も彼と冒険をする少年になりきっていたっけ……。もうあれは、本当に、恋と言っていい感情だったと思う。そんなこんなで、私の将来の夢は、いつの間にか「声優」となっていた。もう、なれるなれないの問題ではない、なる、と決めていたのだ。あの「アイルビーバック」の超人気声優様と共演したいとか、さすがにそこまでは思っていないけれど。

さて、私は年度の変わり目に引越しをした。それまでは実家暮らしだったのだが、それまでずっと一人暮らしを試みてみたかったのと、ちょうど安く入居できる物件を見つけたことがきっかけだ。もちろんそれまで通りの実家暮らしで特に問題があったわけではないし、両親との仲も悪いわけではないのだが、要はタイミングである。世の中には、不思議な縁というものがある。そんな風に、ある意味気まぐれで入った先のアパートが、ちょっと特別な集団生活の場で、そこではこれまでの人生ではとても測れないような、まったく思わぬ出会いが待っていたのだから。

春から私が入居したアパートの名は、「ワナビ荘」。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に吠える その2

「のんちゃん、見て見て！ あなたに朗報があるのよ、これを見てごらんなさい。ほら、あなたにぴったりじゃないかしら」

「うわっ、D」がテンション高い。こういうときはろくなことがないのよねえ」

「なーに行ってるの、のんちゃんがメジャーデビューするチャンスなのよ、そりゃあハイテンションにもなるわよ。うふふふ」

「な、なんです……？」

D」が手に持っていたのは、「声優の卵集まれ！ プロのスカウトもやってくる 新スターマル秘オーディション」という企画のチラシであった。

「今度そのイベント会場でやるそうよ。ここで優勝すれば、来年放映のアニメの主演が約束されるって話よ！ ねえ、ぜひのんちゃんに見せてみるべきじゃない？」

「ああ……、その話は専門学校の方で出回ってるから、もう知ってました。あまり私には関係ない話だと思っていますけど」

「あらら」

「えーっ、千載一遇のチャンスなのに、もったいないわよ！ ぜひ出るべきよ、いえ、出ないとダメよ！ 自分の可能性を試すためにっ！」

「D」の方がのんちゃん本人より熱くなってますねえ……」

目を丸くしているハルさんである。

ちなみに漫画家ユニット「ハル リョーコ」は先日之光玄社での受賞以降、雑誌の増刊号に読み切り作品が掲載されることになり、現在原稿の描き直しに大忙しなのである。まー君とみちるさんの方も出版に向けて打ち合わせ中だ。二組の作家がいよいよメジャーデビューということで、このところD」はやたらと張り切っているのである。「この調子で、ウチの子全員を業界入りさせるわよ！」と

啖呵を切った。いや、その前に自分の作品を書いた方がいいと思うのだけど……。

「うーん、でも私、コンテストみたいに大勢の前で話すの苦手です……。その、まだうまくやれる自信が無いっていうか……」

「こやつはなぜ声優になろうと思ったのか、理解に苦しむ……」
頭を抱えているリョーコである。

「あーっ！ とか言ってる間にまたあたしのカステラ食べられてる！ 許すまじ、ハルちゃん。食べものの恨みは怖ろしいんですよ！」
「きゃーっ、私じゃないですもっちー先輩がいいって言ったんです！ 文句ならもっちー先輩に入ってくださいーい、それはそうとおいしかったです！ カステラ」

「あっちゃあ、あれってのんちゃんのだったのかー。てつきりDJのかと思ってみんなで食っちゃったよ。ごめんな」

「ちよつと待ちなさい、なんであたしのだったら平気でみんなで食べる流れなのよ？ 食いものの恨みの恐ろしさをその体にわからせてあげなきゃいけないかしら？」

「ひえーっ、DJが言うത്シャレにきこえないねえー。あっはっは」
リビングでお菓子を食べながら談笑する私、ハルさん、リョーコさん、もっちー、そしてDJである。

今でこそこんな風に、見事にやかましい（失礼）集団に溶け込んでいる私だけど、ちよつと前までは、私は談笑の輪に馴染むようなキャラではなかったのだ。私は、ワナビ荘に引っ越して間もないころのことを今でも思い出す。

私は、何かを言い出そうとして、すぐにどもるような人間だった。伏し目がちで、猫背。何をやらせても不器用で、よく食器を壊したり料理に失敗したりしてDJの手を焼かせた。何かをしてもらったときのお礼や謝罪の言葉すら出てこない。ずっと友だちとおしゃべりなんかしていない、それどころか友だちらしい友だちも作らずにここまでできてしまった、ともっちーやDJに告白したときも、ああ、

確かにそうなんだろうなあ、と簡単に納得されてしまったほどだ。

そんなことでよく声優なんか目指しているなあ、と思わず言われたとき、「想像の世界の中では私は流暢にしゃべれるんです。声優はどちらかと言えば『あちら側』の世界に声を吹き込む仕事ですから」と、わかるようなわからないような返答を返してしまったことを今でも覚えている。

でも、それを聞いたからといってもっちーやDJが、私の日常生活に支障がないように会話の訓練をしてくれたり、友達づくりに手を貸してくれたりしたかというところ、そんなことはなかった。たまに誤解されるのだが、DJという人は、自ら向上心を持って努力するような若者にとってはとても心強い頼れる味方だが、自分の可能性に見切りをつけ、独力で問題を解決したり、道を切り開こうとしなくなつた者には大変冷たいのである。そのため、変わることに消極的だつた頃の私にも、強いて何か手を貸そうとはしなかった。

「もちろん、頼まれれば何でもやるわよ。あなただつてワナビ荘の住人、あたしのかわいい妹分のひとりだものね。だけど、あたしは決して『おせっかい』ではないのよ」

……今まで私の周りにいた人々と比べれば、十分おせっかいで甘いDJだが、そういうところの線引きはきちんとしていた。一方のもっちーは、歳も近いせいもあって、私のことを妹か何かのようにかわいがってくれるようになった。しかしそこには「友だちになつてあげよう」だとか、「会話の相手になつてあげよう」などという（誤解を恐れずに言うなら）高慢な態度はなく、ただ、もっちーにとつても私が話しやすく、また気の合うタイプだったというだけのことだ。たぶん。

ある夜、私はもっちーに連れられてDJの経営するクラブを訪れた。

ディスクジョッキー

私がDJが本当にDJをやっているシーンを見たのは、この日が初めてであった。普段はただのヒゲのオジさんだが（失礼）、ステージ上で皿を回している時のDJはやたらカッコいい。名物の超早

ロムCは聞く者を痺れさせるし、たまに見せてくれるステージ上でのブレイクダンス、あれは絶品だ。若い女の子たちもキヤーキヤー言っている。今度のダンスはいつやるんですか、また見せて下さいなんて問い合わせがワナビ荘までかかってくるくらいだ。それくらい、クラブでのDJはアツい。

クラブの雰囲気には最初はとまどっていた私だったが、DJのパフォーマンスを見た途端に、自分でもびっくりするくらい、別人のようにはしゃぎ始めたのだ。あの日のことは今でも昨日のことに思い出せる。それまでは伏し目がちで腰も曲がっていた自分が、腕を振り挙げて、DJの名前を大声で呼んでリズムを取っている。もっちゃんも、ちょっと目を疑う光景だった、と言っていた。

「DJ！マジカッコいい、ステキー！こっち向いて！おおっ、ブレイクダンスもすっごい！いやっほーう！」

突然私が叫び出した異様なテンションに、……今思うともっちゃんはドン引きしてしまったことだろう。だが、それでもよかった。どうやら、自分は元気も好きなものもちゃんとある、普通の女の子らしいことが確認できたのだ。そう、それに。

「あれだけ絶叫して声が枯れないようなら、声優としての素質もあるようだしね……」

というのはもっちゃんの言である。きっかけというのは実にささいなものだ。その日から、私はワナビ荘内においては、自分を解放することができるようになったのである。

好きなアニメ、好きな漫画、好きな映画、好きな音楽……、私とワナビ荘のみんなとの話は尽きなかった。私は目をキラキラさせながら途切れなく趣味について語るみんなの姿に、特にもっちゃんの姿に、私は惹かれていった。ちょうどリョーコさんがワナビ荘に入ってきたのもそのころだった。

今でこそハルさんがいるが、当時のリョーコさんともっちゃんは本当にいいコンビだった。一緒に同人誌を作ったり、人気声優のことについて夜を徹して語り合ったり……。青春してるなあ、と見てい

て微笑ましかったものだ。……というのはちよっぴり嘘。本当は、それだけ仲の良い二人に、けっこう嫉妬したりしていたものだった。ずきずき。

まあ、そんなこんなで、それまでの自分とがらりと変わって楽しい生活を送れている私　の姿を目の当たりにしていたため、もっちは、「これからのんちゃんは今でも、つまり専門学校においてものんちゃんは変わっていくのだろう、もう友だちのいないひとりぼっちではない、普通の明るい生徒として、楽しくやっていくに違いない」、そう確信してくれるようになった。もう、これで自分たちの役割は終わりだ、と。

それまで私の保護者になってくれてたもっちゃんが私から離れてしまふことは、それは少し、ほんの少しだけ、寂しい気もするのだった。

だけど事実、私は専門学校でも少しずつ友だちができた。もっちゃんたち以外にも笑顔で話すことができるようになったし、人づきあいということも、できるようになっていった。そうやって笑顔が増えて演技にも熱が入ったためか、スカウトの方が目をつけてよく話しかけてくれるようになった。私の道は順風満帆に思えた。これから私はきっと声優になって成功をおさめ、だんだんと人気者になっていくこともできるかもしれない、と夢想したりもした。実におめでたいというか、ある意味夢見る小学生のような、思考停止状態であつたと今では思えるが……、それはある意味で、とても幸せな時間でもあつた。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に吠える その3

一通り騒いだのち、私はチラシをじつと見つめながら、ぐっと拳を固めて、こう言った。

「DJ、私、やっぱりやってみます。DJの言うとおり、自分の可能性を試さないとして、思い直しました。私、……私、本気で夢を叶えに行くつもりで、このコンクールに出てみます」

「あら、すごいじゃない！ よく言っただわのんちゃん、またひとつ大人の階段を昇ったわね！ やるからには応援するわ！」

「僕たちもちろん応援するぞ。頑張れよ、会場には見に行くぜ。本番でどもって恥かかないようにな」

「私も行きます！ のんちゃん先輩の晴れ姿、楽しみにしてますー！」

「僕も楽しみですね。のんちゃんは自分では気付かないようですがベリーキュートでチャーミングな女の子です。自分を解放すれば、その魅力が表に出てくるものですよ」

「み、みんな大げさだな、どうせ予選落ちだって、えへへ……」
そう言いながらもまんざらでもない気分の私であった。私が頑張ることで、これだけたくさん、大切な仲間たちが、心から応援してくれる。そのことが、こんなにも、嬉しい。ほんの一年前の私なら考えられないことだった。

自分が変わるかもしれない。こんなチャンス逃したくない。私の前には、光しか見えていなかった。自分を変えろという欲求は、これほどまでに人を突き動かすのか。それは、私自身にとっても、新鮮な感覚であった。

もっちーたちの期待に応えたい。その思いが、確実に、私を変えていったのだ。

私が声優学校での異変に気付いたのは、その日の昼休みが終わっ

て、午後のトレーニングに向かおうと、下駄箱を覗き込んだときだった。

声優の専門学校では、一般的に、発声練習などの他に走りこみや柔軟体操といったスポーツトレーニングがある。全身を使って演技をするという点では、役者も声優も変わりはない。はじめの頃は日ごろの運動不足が響き、長時間のトレーニングについていけない私だったが、最近はようやく体ができてきて、トレーニングを完遂してもバテないようになってきた。

その日も私は下駄箱を覗いてトレーニングシューズに履き代えようとしていた。だが、「ありや？」と私は気付く。自分のトレーニングシューズが、無いのである。

どこかに置いてきたか……、私は自分の記憶をたぐりよせて思い出そうとする。昨日のトレーニングのときにちゃんとここへ戻したか、いや……、ここに戻さないとしたらどこに置くというのだ。他の場所に移す必然性がない。しかし……、そこで、ふと思いついて玄關脇のゴミ箱に私は視線を移した。まさか。いや、本当にまさかとは思うが、一応、確認すべきことではある。この学校では依然も「そういう」事態が何度かあったと聞く。もちろん、この学校でなくとも、人間が集まる場所では、何かしらそれに類似した事態というのは起こるものだが……、しかし、私は冷静な思考とは裏腹に、自分の膝がガクガクと震え始めているのを感じていた。

かくして、そこに私のトレーニングシューズは捨てられていた。ご丁寧に、カッターで縦に横にといくつもの切り傷を作られて……。私ははっと口元を抑えた。ひゅうひゅう、と体の中を空気が巡っている音が聞こえる。額にじんわりと汗が吹き出してきた。

これほど、これほど明確に他人から悪意を向けられたのは、実は初めての経験であった。これまではクラスからなんとなく無視され、なんとなくつまはじきにされ、なんとなく一人ぼっちになり、

、そうして実につまらない学校生活を過ごしてきた私である。しかし、このようにはつきりと「いじめ」と呼ばれる行為を、言う

なれば積極的に受けたことは、生まれて初めてだったのである。

これが、人間の「悪意」。

子どもじみた、実にくだらない嫌がらせである。これをやった人間は精神年齢が著しく低い。スポーツシューズはもったいないが、今度からは常に持ち歩くようにすればいい、いちいちこんなくなくならないことをする人間を相手に、傷ついてなどやる必要はない、理屈ではそうわかっていても、私は胸の激しい動悸を抑えることができなかった。

心当たりならいくつかある、そしてこんなことをされる理由として思い当たることもいくつか、ある。もともとネクラだった自分が急に明るくなり、友達も何人かでき、さらにスカウトの方にもよく話しかけられるようになった。それもすべてワナビ荘のみんなのおかげ。最近はおうちもよく専門学校に彼女の様子を見に来てくれるようになった。ひよつとしたら、彼氏か何かと勘違いされるかもしれない、と淡い不安のような。同時に期待でもあるような妙な気持ちを抱きつつ、私は毎回おうちを出迎える。

でも、それだけで周りから見れば、「嫉妬」には十分すぎる理由になるではないか。あるいは「憎悪」。私自身、他人に対しかつて何度も抱いてきた感情である。

他人の目をきちんと意識して行動せず、「調子に乗った」、これは自分のミスだ。

私はがくと膝をついた。そうか、自分がしたのは悪いことだったのか、他人から見ると「むかつく」行為だったのか。私は妙なところで納得してしまった。そしてそれに今の今まで気付かなかった自分自身に腹が立った。

どうしよう。これではとてもトレーニングには出られない。こんなボロボロの靴を履いて行ったところで、ともにトレーニングに参加できるはずもないし、ここは小中学校ではないのだから、講師や事務員に被害を訴えたところで、ともに犯人探しや叱責を行ってくれるとは思えない。その日、私は結局何もできずに、早退

することにした。これまでは一度も休まず律儀に出席してきたトレーニングをサボって、である。

「あら、こんなに早い時間に帰ってきて、どうしたの。熱でもあるのかしら？」

「べ、べつにそういうわけではないです……」

心配して話しかけるDJにうまく答えられず、その日は部屋でぼんやりして過ごした。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に吠える その4

しかし、翌日から似たような状況は続いた。突然発声練習用のテキストがカバンから無くなったり、聞えよがしに自分の悪口をいう集団がいたり……。その過程から、だいたい誰が自分に対する嫌がらせを行っているか、大体は把握できた。リーダー格は、ずっとアイドル声優を目指してトレーニングを続けてきたが、新人に次々に抜かされ、未だに日の目を見ることができずにすでに二十三歳になっている、柳田さんという女性の先輩らしいこと。そしてその取り巻き二人がこれまでの嫌がらせの実行犯であろうこと。漫画やドラマの中だけかと思っていたのに、こんなことが現実にあるんだなあ、と新鮮な驚きを感じるとともに、なんだか気の滅入ってしまう私であった。

最近、のんちゃんの元気が無くなった、ということでもっちー、DJはもちろん、リョーコやまー君もしきりに私のことを心配してくれた。しかし、彼らを面倒に巻き込みたくなかった私は、絶対に事情を話そうとはしなかった。私を本当の家族のように可愛がってくれている彼らのことだ、もし本当のことを知れば、学校に武器を持って乗り込んでくるくらいのはしかねない。「最近、疲れがたまっちゃって……」と曖昧に笑い、重い頭を抱えながら眠りにつく。そんな日々が続いた。だから、本当に毎日まるで雪だるまのように疲れが溜まっていったし、それが声優としてのトレーニングに影響が出ないはずがなかった。

「ちよつと、何やってるの北原さん。全然腹から声が出てない！」
「あ、は、はい」

どこか上の空で演技をしていた私は講師に容赦なく叱られた。注意を受けたのちは、表面上は力を入れて熱演をして見せるのだが、声に魂が入っていないことは誰の耳にも明らかであった。

「あなたどうしちゃたの？ 恋の悩みでもできた？ 昼間っからば

んやりとしちゃって、意識が別のところに行ってたら演技なんてできっこないわよ。顔洗って出直して来なさい」

ぴしゃりと言われ、しゅんとしよげながら化粧室へ向かう私。そんな私をくすくすと嘲笑う声は、きつと嫌がらせをしてきた連中のものだ。私はもはや怒りも憎しみも抱くことができず、ただただ悲しくなつて背筋をぐにやりと曲げてしまった。猫背ののんちゃんの復活、である。

最近ハスカウトの人も、あまり積極的に話しかけてくれなくなつた。以前は「素質がある」「磨けば光る原石だ」と、彼女のことを褒めてくれた人なのだが……、素質があつても身を入れて演技しないと使いものにならないということか。私は鏡に映る青白くなつてしまつた自分の顔を見ながら、なんだか泣きたいような気持ちに襲われた。ああ、このまま死んじゃおうかな……。ぼんやりとそんなことを思つたとき、トイレのドアが開いて入ってきた人影があつた。「あんた、最近調子悪そうじゃん。ちよつと前までアゲアゲだったくせに。何かあつたの？ 声優オーディション、出るんじゃないか？ たの？」

けらけらと笑う派手な髪をした女性は、いじめの主犯と思われる柳田さんであつた。何という白々しさだろう。私は思わず顔を伏せてしまう。

「ちよつと、なんとか言つたらどうなのよ……。心配して声をかけてあげてんのに」

「え、えと……、その」

柳田さんはうまく言葉を紡げない私をどん、と強く押す。よろめいた私はその場に倒れてしまう。そんな弱っている私の髪の毛を柳田さんは掴みあげて、無理やり立たせようとした。

「いい、あんたが悪いのよ。ネクラでコミュ障の能なしのクセして、あんな風に調子に乗つたりするから……。あたしたちがあんたに身の程つてものを教えてあげてるの。だって、ああでもしなきゃ、あんたあの後いくらでも増長してたでしょう。そしたら、きつともっ

と酷いいじめをあたしたち以外から受けてたわよ。いい、この世界はね、出る杭は打たれるものの。覚えときな。あたしたちは、みんなの不満がどうしようもなくなる前にあんたを打っておいてあげたわけなんだから、むしろ感謝されるべき立場なのよ。ほら、礼を言いなさいよ、あんたに世の中の厳しさを教えてあげたあたしに……、何よ、その目は！」

いつしか柳田さんを強く睨みつけていた私は、直後、腹に強い衝撃を感じた。膝で蹴りを入れられたのである。私は息ができなくなり、咳をしながらその場にうずくまる。

「ふん、ブスのくせに、ニコニコ笑って媚びやがって……。いい、声優コンクールにも出るんじゃないよ、あんた。あんたみたいな下手くそが出たって、恥をかくだけなんだから、最初から出ない方が傷口は小さくて済むよ。警告してあげてんの、あたしは。ねえ、なんとか言ったらどう？　今ここで言いなさいよ、コンクールに出るのはやめる、って。ねえ、言いなさいよ、言いなさいよ！」

またしても腹を蹴られる。しかし私は痛みにも耐え、ひたすら耐え、何も言わずにただただ耐え。その後、柳田さんによる暴力は数十分続いた。それも、外からは見えないような部分ばかりを狙って。

……力の無い私は、反撃もできず、ただ柳田さんを強い視線で睨み返すことしかできなかった。

悪いことというのは重なるものだ。その夜、私がコンビニでアルバイトしていたときのこと、陳列する商品を運ぼうとしていた私は、昼に打たれた傷が痛んだせいで、棚に並べるべき商品を床にぶちまけてしまったのである。

「あーもう、何やってんだよ！　ぼんやりしてんじゃねえよ！」

「す、すみません……」

すぐに片付けようとする私だったが、傷の痛みが増してうまく立ち上がれない。それでも無理して立ちあがろうとした結果、もう一

度その場に転倒してしまい、実に間拔けなことに、床に散らばった商品の上にその体を預けてしまって、いくつもの商品をぺちやんこにしてしまったのである。

「お前、ふざけんなよ！ ドジとかじゃ済まされねえんだぞ、これじゃ売り物にならないじゃねか」

「す、すみません、べ、弁償します、今すぐに片付けますから、その……」

「あー、もういい。お前はもう帰れ」

「えっ……」

「明日から、もう来なくていいから」

もともとお世辞にも優秀とは言い難い仕事っぷりの私であったが、これが決定打となって、契約打ち切り決定であった。世にいうクビである。こう言われてしまったのは、私はもう、何も言えなくなってしまうた。それでも一応片づけだけはきちんと済ませてから帰ってきた私は、なんだかとても馬鹿正直というか、損ばかりしているよな、とても馬鹿馬鹿しい気持ちになってしまった。

ワナビ荘に帰ってきてから、私は何も言わずに部屋に引きこもったままだった。さすがに何かがあったと察したワナビ荘のみんなは、いろいろと想像して気を揉んでくれたが、のんちゃんとてもう大人自分から相談してくるまではそっとしておこうと　そっという結論に落ち着いた、ようだった。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に吠える その5

そして住人たちが寝静まった深夜二時ごろ、私はのっそりと部屋から起き出し、暗いリビングでテレビをつけてぼんやりとしていた。膝もとにカフカがするりと滑り込んできてワンと鳴く。私は、久々に自分以外の生き物の体温、温かさを感じられたような気がして、やっと少しだけ表情をほころばせた。ふかふかの頭を優しく撫でてやると、カフカは気持ちよさそうに目を細めた。

「ねえカフカ……、私、どうしてこんなことになっちゃったのかな」
私はカフカを撫で続けながら、小さな声で話しかける。

「ただ、普通の生活が、私にも友だちとか、仲間とか、そういうものが手に入ったと思ったのに。どうして、こんな風に、恨まれたり、憎まれたり、怒られたり、何もかもがうまくいかなかったっちゃったんだろ」

言いながら、じんわりと涙が浮かんでくるのを感じていた。誰も聞いていないと思うから、カフカしか相談できる相手がいないから、だからこんな風に正直に話せるんだろう、と私は思った。

「だけどきつと、全部私が悪いんだよね、不器用だったり、空気に読めてなかったり、バカだったり、周りに迷惑ばかりかけてる私が、だから、嫌われて当然なんだお。あーあ、いろいろとやっちゃったなあ。これじゃ、声優オーディションなんか出たらもつといじめられるだけだよ、もうチャレンジなんて、やめた方がいいよね。柳田さんの言うとおり……。どうせ叩かれるだけなら、……また前みたいに、大人しく一人で黙々とやってたころの私に戻れるかなあ」

言いながら、ぼろり、と一筋の涙が私の頬を伝った。熱い涙だった。

「だけど、戻りたくないなあ。もっちゃーたちと会う前の自分にはどうせなら、学校では嫌われてもいいから、ワナビ荘では、明るい

自分でいたい、みんなとワイワイやれる、元気のいい自分でいたい、
、そう思うよ。……あはは、だったら最初からそうすればよかったのにね、どうして学校でまで調子に乗っちゃったんだろ……。

バカだ、私……」

「そいつは違うな」

私ははつとした。今、カフカ以外の声がした、それもすぐ近くから。すっかり聞き慣れた、あの声が。……私はすぐに状況を理解し、思わず耳たぶがかーっと熱くなるのを感じながらも、ゆつくりと振り向いた。

果たしてそこには、Ｔシャツに短パン姿のもっちーが立っていた。乗れる調子があるなら、ぜひとも乗ってみるべきだ。そもそもの調子が出ない奴なんて世の中にはいっぱいいる。だから、もし今までにない流れができたならそこには乗るべきなんだ、のんちゃん。そこでたとえ失敗したとしても、その経験は決して無駄にはならない」

「も、もっちー……」

「……バイト、クビになったのか」

無言でこくりと頷く私。その目にはいっぱいに涙が溢れていた。きっと何か嫌な事があったのだろう、ともっちーは察してくれたようだった。

「なら、ちょっと僕から提案があるんだ。実は、のんちゃんにぴったりのアルバイトがある。ぜひやってみないか。きつとのんちゃんのためになると思うし」

「え……」

思わぬ言葉に呆然とする私。新しいバイト……。何だろう。話の流れから言って、またコンビニのような業種とは考えにくいけれど……。

「学校でも、何があったかは知らないけど……、その、僕はのんちゃんが悪くないと思う。今までちょっと人づきあいが少なかったから、経験不足から失敗しちゃっただけで……、そんなのは誰にでも

ある話だろう、って。むしろ、その程度の失敗を笑って許してやれない周りが悪い」

「そ、そうかな」

「そうだよ。人間の器が知れるってもんさ。あとは……、もしのんちゃんが助けを求めてくれるならば、僕が直接学校に乗り込んで解決してやる。何が何でも、だ。のんちゃんには僕たちがいるんだから。僕だけじゃなくて、DJも、まー君も、リョーコも。ハルも、みちるさんも、みーんなのんちゃんの味方なんだ。それを忘れないで」

「う、うん……」

「あとさ、……声優コンクールの出場、やめるなよ」

「え……」

「みんな、楽しみにしてるんだ。のんちゃんの晴れの舞台をな。もちろん、ワナビ荘のみんなのために出場しろとは言わないし、どうしても嫌なら無理にとは言わないけど……、本当は出たいんだろ。それなら、その気持ちを曲げるべきではない」

「……ん……」

私は頷いて目を閉じた。もっちーの言葉がしつかりと私の心に染み渡ったような気がして、じんわりと嬉しくなった。ずっと、と私は音を立てて鼻をすする。もっちーは「汚いぞ」と言っただけで、ユ箱を手渡してくれた。盛大に音を立てて鼻を嘔むの私。ああ、やつぱりこういう、格好つかないあたり、私は私なんだなあ、と妙なところで安心したりする。

「あ、あとのんちゃん」

「ん……なに」

「カフカが死にそう」

気付くと、私の腕の中でカフカが泡を吹いてびくびくしていた。どうやらいつの間にか強く抱きしめていたらしい。私は慌てて手を離す。その場に倒れてびくびくと震えているカフカ、うん、ちゃんと生きているようだ。ほっと安心して「ごめんね」とカフカに

謝った。

その温かい体温が体を離れると、少しだけ寂しい気もしたが、すぐにもつちーが隣に座ったので、その寂しい気持ちは長続きしなかった。何も言わず、そつともつちーによりかかる私。テレビは音も立てずに、退屈な風景の写真と天気予報を映している。私はそのまま、すっかり安心してしまい、すやすやと気持ちのよい寝息を立て始めた。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に吠える その6

さて、その次の日。

ここからの語り部はふたたび僕へと移る。

僕がのんちゃんを連れて行ったのは、ある学習塾であつた。

「じ、塾？」

明らかにたじろいでしまっているのんちゃんに僕は言う。

「ここは受験対策をバリバリやるっていうタイプの塾ではなくて、いわゆる補修塾だね。学校の授業についていけなくなつて、より簡単なところからやり直すっていうタイプの。集団授業だから、大勢の前でわかりやすく話をしないといけない」

「お、大勢の前でつて」

「のんちゃんには、ここで講師のアルバイトをしてもらう」

「えええっ！」

のんちゃんは目を丸くした。まったくもって信じられない、という顔である。

「僕の友達から頼まれたんだよ、ちょうど講師に欠員が出ちゃつたらしくて、誰かを紹介してくれないか、つてね。いいか、のんちゃんに足りないのは人前で堂々と話す度胸だ。いくら演技ばかりがうまくても、この先ののんちゃんが世の中を渡っていくためには能力として足りないんだ。具体的には、のんちゃんに必要なのは、話術だ」

「話術……」

「そう。のんちゃんは人にきちんと話をして、自分の考えをわかつてもらう、自分の想いを理解してもらうと、ことをできるようにならないといけない。凄く極端な言い方をすると、のんちゃんが自分の気持ちをきちんと言葉にできていれば、あんなにのんちゃんが思い悩むまでに事態が悪化しなかつたかもしれないし、バイトもクビにならなかつたかもしれない。それに、講師は声を使う仕事だ。」

アドリブ力も試される」

「そ、それはそうだけど……」

「そんじゃ、頑張って」

「頑張って……」

背中をどんと押されて、その場に残されるのんちゃん。そりやあ、次のバイト先を斡旋してくれたのは嬉しいんだけど、経験もないのにいきなりやらされても困るというか……、これでは、まるで押しつけられたような状態ではないか。

のんちゃんはあつ、と溜め息をついた。塾の校長先生が「一緒に頑張りましょうね」とニコニコしながら手を差し出してくる。年配の女の先生だ。「松野」というネームプレートを提げている。「よろしくお願いします……」のんちゃんもまた、しよぼくれた顔をしつつも手を差し出し、握手に応じた。

「よし、ちゃんと最初の挨拶はできたようだな」

「ねえねえ、なんであんな帰るふりしてあの子のちゃっかり様子見てんのよ。ちよつと過保護じゃない？」

「そういうリョーこそ」

「……」

おせっかいな二人である。

「しかし、けっこうな荒療治というか、強引なやり方するわねもつちーも。本当にこれでのんちゃんの悩みは解決すんの？ ただのいじめなんでしょ、あんたかDJあたりが乗り込んで犯人をぶっ飛ばせばそれでいい話じゃん」

「まあ、変わるきっかけってことさ。のんちゃんがいつまでもこのままでもいいと思えないし、あいつはああ見えてけっこう子ども好きだ。性に合うんじゃないかと思っただけ」

「本当におせっかいねー……」

ほどなくして、のんちゃんの模擬授業が始まった。

観客は校長先生、事務の女性二人、他に先生が一人。僕たちは教室の外からそつと見守っていた（ひよつとしたらとつくにばれてい

たかもしれない)。小学生の算数の授業だったのだが、これが見て
いられないほどにひどいものであった。

まず、足し算をするために黒板にリンゴやみかんの図を描くのだが、ものすごく下手である。リンゴもみかんも見分けがつかない上に、描く場所も滅茶苦茶。一生懸命足し引き算の概念を教えようとするのだが、図がわかりにくい上説明もしどろもどろなので、子どもはおろか大人にもきちんと意図が伝わるか危うい。

「こ、これはヒドイ……」

「あ、校長先生が頭を抱えてる」

「よくあれで声優になりたいなんて言えたものねー、それもすでに一年以上専門学校に通ってあれでしょ……?」

「まあ、基本的なスキルはあるから、慣れればすぐに上達するんじゃないかとは思っけど……」

そう願わないわけにはいかない。

のんちゃんの授業は翌週から始まった。学年は小学五年生、生徒は五人。どの子も、学校の授業についていけなくなったり、不登校になったため学校ですべき学習ができない子など、補修を必要とする生徒ばかりだった。

のんちゃん是不器用な絵や図で必死に算数を教えようとする。だが子どもたちは正直だ。彼女の授業がわかりづらければ聞かないし、図や字が下手くそならばノートもとらない。彼女がどれだけ頑張っても、いやむしろ無理に頑張れば頑張るほど、子どもたちはしらく、授業に対する興味を失っていく。

「ねえねえ、さすがにかわいそうじゃない? やっぱり向いてなかったんだよ、あの子には。ほら、完全に眠っちゃってる子までいるし……」

「確かにこの教室の状況はひどいな。だけど、これを何とかするのがのんちゃんの仕事だ。向いてる向いてないじゃ、ない」

「きびしー」

なんだかんだでまたのんちゃんの様子を見に来ている僕たちである。リョーコなどは原稿が押していて忙しいだろうに、さながら本当の姉であるかのような心配ぶりであった。

僕がもう一度教室を覗いたとき、ふっと、ある子どもの姿が目についた。髪の長い女の子である。彼女は特に面白くもなさそうな無表情のまま、じっと、のんちゃんのことを見つめていた。なんとなく光を感じない、暗い目だ。

「あの子、唯一のんちゃんの授業をちゃんと聞いてるね」

「だけど、手はろくに動いてないし、のんちゃんに当てられても無反応よ。本当に理解してんのかな？ 大人の前では『良い子』を演じちゃうタイプじゃないの？」

「彼女は、学校でいじめられて不登校になったリカちゃんという子です」

突然第三者の声がして、「ひいつ」と驚いて振り返る僕とリョーコ。そこには、塾の校長である松野さんが穏やかな表情で立っていた。

「学校ではいつもあんな風に、真面目にじっと先生の話を聞いていて、特に問題も無い、普通の子だったといえます。だけど、突然よく理由の分からないいじめの標的にされて。彼女は一度も親御さんや先生、あるいは自分をいじめるクラスメイトの前で泣いたり怒ったり、感情を見せることはしなかったそうです。腕にできた痣にお母さんが気付くまで、いじめの事実についても一言も相談していませんでした」

「そうなんですか……。それは、お母さんたちに心配をかけまいとして？」

「かもしれません。とにかく、お母さんに追及されて、彼女はいじめられている事実を白状しました。そしてその日から、もう学校へは行きたくない、またいじめられるから、と 不登校児になってしまったのです。今から四ヶ月前のことです」

「なるほど……」

僕は頷きながら、のんちゃんとり力ちゃんという生徒の境遇を重ね合わせていた。いじめられ、誰にも相談できずに一人で思い悩んで……。ひよっとしたらこの二人は似た者同士なのでは……。

そうこうしているうちに、授業終了の鐘がなる。キンコーンカーンコーン。のんちゃんは溜め息をつきながら、最後の挨拶をして授業を終えた。結局またうまくやれなかった、そんな疲労感が表情から見てとれた。

僕たちは慌てて物影に隠れる。といっても、すでにのんちゃんにはバレているだろうが。のんちゃんはがらりと扉を開けて教室から出てくると、また一つ大きなため息をついた。

その様子を見ていると、僕はなんだか彼女にとっても悪いことをしてしまったような気がした。ひよっとしたら、僕のしたことは間違っていたのだろうか？

「先生」

そのとき、とても小さな、か細い声で、そう呼ぶ声があった。のんちゃんをはじめ自分が呼ばれたと気付かない様子で、教室を去ろうとしたが、再び「先生」とやや強い声で呼び止められ、ようやく振り向いた。

そこには、さきほどじつとのんちゃんを見つめていた、り力ちゃんが立っていた。手には、ついさっきの授業で使ったテキストがしっかりと握られている。

「ど、どうしたの……？　な、何か……」

質問だろうか。だけど、子どもと一対一になって指導した経験はない。これが初めてになるのだろうか。ドキドキ……。のんちゃんは緊張した様子で、次の言葉を待った。

「先生は……、どうしてそんなに寂しそうなの？」

「えっ……」

一瞬何を言われたのかよくわからなかったようだ。寂しそう……？　不慣れでしどろもどろな授業の出来に文句を言われるのなら、無理もないと思うのだが……。寂しそうと思われる授業を、自分

はしただろうか？ のんちゃんは迷っているようだ。

「私と、同じような顔をしてる」

「……」

のんちゃんはリカちゃんが見つめあった。その目の中に、お互い、何かを探しているかのような時間が過ぎ去った。

「……生徒との対話が始まるわね。行きましょう」

「えっ？」

松野校長が小声で言った言葉の意味がわからず、僕は思わず聞き返した。

「生徒との信頼を築く方法は、個人的なコミュニケーションをとることよ。彼女はリカちゃんと、どこか似た目をしている。だから、今、心を許そうとしている。今までなかなか他の先生方に心を開こうとしなかった、あの子が。……これは、北原先生にとってもとても大切な経験になるはずよ。今は二人きりにしてあげましょう、彼女たちが何か、助けを求めてくるようならば、そのときに手を差し伸べればいい」

「……そうですね」

二人は早くも親密な空気を作り、何やら話し込んでいた。確かに、外野たる僕らがここにおいても無粋なだけだ。僕とリョーコは目を合わせてそつと頷き、学習塾を後にした。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に吠える その7

のんちゃんは学習塾でのアルバイトに少しずつ慣れてきて、僕は小説を少しずつ書き進めた結果ようやく終わりが見えてきて、ハルリョーコは漫画の掲載がとうとう一週間後に迫り、DJは相変わらず日がなスピリチュアルなものと会話しつつ夜はクラブでブイブイ言わせており、そんな日常が流れてゆく中のある日のこと、僕たちは突然、思いもよらぬ報告を受けた。

まー君とみちるさんが、ワナビ荘を出て行くというのである。

「ありやー、作家になる夢が叶ったからって、もうワナビ荘とはさよならってわけ？ くーっ、薄情者だねえ！ リア充爆発しろっ！」

「そうじゃありませんよ、僕たち、本格的に付き合うつていうか、同棲することにしたんです。で、そうなるところではもう住めないから……」

「なんてこった！ リア充すぎて目眩がするぜ……」

その場にぶっ倒れるリョーコ。つくづく面白い反応をする奴だ。

「しかしまた、ずいぶんと急なのね。お別れ会くらい盛大に開きたかったけど」

「まあ、そう遠くへいくわけじゃありませんし。これからは駆けだし作家として、毎日二人で切磋琢磨です。なつてからが厳しいといわれるこの業界ですから、死ぬ気で頑張りますよ」

みちるさんが眩しい笑顔でDJに応じる。

「あ、でもそれじゃあタクシードライバーの仕事は」

僕が尋ねると、

「もちろん、続けますよ。彼女のために作ったゴーストタクシーですからね。彼女専門の運転士を、これから何十年でも続けて行くつもりです」

「かっくいー！」

そんな会話をしている中、のんちゃんだけが黙っている。「どう

したんです？」とまー君が話しかけると、のんちゃんはふるふると肩を震わせはじめ、そしてわつとばかりに泣きだしてしまった。

「ま、まー君、みちるさん……。ぜ、絶対また遊びに来てくださいね、い、いつでも、楽しみにしてますから……。わ、私たちのこと、忘れないでくださいね」

「のんちゃん……」

みちるさんは泣きじゃくるのんちゃんをギュツと抱きしめた。思えば、のんちゃんはこのワナビ荘に来てからようやく友だちらしい友だちができたわけで、そういう意味ではまー君やみちるさんとの別れは、友だちとの別れのほとんど初体験になるわけか。そういえばまー君ともいろいろあったなあ……。と、ついガラにもなくじーんと来てしまう僕なのであった。

「いつか、また晴れの舞台で会いましょう。私たちはホラー作家、のんちゃんは人気声優、ハル リョーコさんは人気漫画家、DJともっちーさんは人気小説家になって……。みんなで記者会見で顔を合わせたり。ふふ、そのときが本当に楽しみです」

「み、みちるさあ……」

こんな感じで涙、涙のお別れを経て、ワナビ荘を去っていったまー君とみちるさんだが、この一週間後の週末には普通にワナビ荘に遊びに来て夕食をごちそうになって、あまつさえ勝手に泊まっていた。まったく、のんちゃんの感涙はいたづらになりにつけり、である。

しかし、これを契機にワナビ荘の環境自体が少しずつ変わりつつあることも事実のようだった。まー君の入っていた部屋は入居者の募集広告が出され、料理や掃除、その他のアパート内での当番もがらりと変わった。一人の人間がいなくなるというのは、そういうことなのだ。

「あたしたちも、そのうちここを出てくことになるのかなー……。ふうつと、タバコの煙を吐き出しながら、遠い目をして呟くりョーコ。今のはなんとなく、のんちゃんには聞かせたくないセリフだ

な、と僕は思った。

のんちゃんは、昼は声優学校で訓練、夜は学習塾で講師をする二重生活をそれからしばらく続けていた。声優学校では相変わらず嫌がらせを受けているらしいが、のんちゃんはそれらを全て無視するようにしたし、回避できるものは徹底して回避した。荷物はすべて常に自分で持ち歩くようにしたし、トイレや校舎裏など一人になることが無いよう気を配った。聞えよがしな悪口などもイヤフオンをして発音の練習をすることでシャットダウン。ただただ、自分を高めることだけに専念した。

柳田たちとしては、その様子が余計に面白くなかったらしく、執拗にあの手この手でのんちゃんを攻めようとした。一度、多くの人がある場所で、のんちゃんの手を引っぱって人気のないところへ連れて行くこうとする、という暴挙に出たそうだが、講師が見とがめたため失敗に終わったという。柳田たちも、かなり鬱憤が溜まっていたということか。僕はこの件がどうしても不安だったが、のんちゃんは「まだ大丈夫、まだやれる」と意外に強気であった。

塾の方では、のんちゃんはあまり飲みこみのよくない子たちを相手に熱心に勉強を教え続けた。特にリカちゃんに対してはいろいろ親身になり、まるで我が子のように可愛がりながら勉強を教えているらしい。このアルバイトを始めてからというものの、のんちゃんは前にも増して楽しそうに、生き生きとしてきたように見えたので、僕としてもやはり紹介して良かったと溜飲を下げていたのだが、一回だけ、のんちゃんが顔を真っ赤にして涙をいっぱいに溜めながらバイトから帰ってきたことがあった。

「ど、どうしたののんちゃん？ 何かあった？」

「……私、もう、塾の先生やめる！」

そう言い出したときにはさすがに僕も慌てた。彼女も少々ヒステリックになっていたようで、よく落ちつかせてから詳しい事情を聞くと、リカちゃんと大ゲンカになったのだそうである。

「私が何を言っても答えてくれなくなつて……。私と目を合わせようとしないし、ずっと不機嫌そうな顔してるし。で、ちゃんとこつちを見なさいって怒つたら、ものすごく不満そうな顔をしてきたから。それで、それで」

「あ……。反抗されたわけか」

「もうどうしていいかわからない……。子どもって何考えてるかわからない。やめたい……」

頭を抱えてうずくまるのんちゃん。僕はその様子が不思議に思えて、思わず尋ねてみる。

「何考えてるかわからない？ それホント？」

「……えっ」

「だって、リカちゃんは学校でいじめられたり、不登校になったりしてるんですよ。そして、先生に不機嫌な顔を見せたり、反抗したりしている。そういう子の気持ちって、のんちゃんにわからないとは思えないんだけど」

「……」

のんちゃんはしばし考える。いじめられっ子、いろんな人から無視されて、意地を張るようになって……。確かに自分とよく似ている、と思う。だったら、時々そうやって他人に嫌な面を見せてしまふ子どもの気持ちも、確かに……。

「というか、のんちゃんが理解してあげないとダメだよ、その子の気持ち。ある意味でリカちゃんのはのんちゃんに甘えてるんだよ。厳しく接することも大切だけど、でも、反抗されたからって見離しちゃダメ。リカちゃんにはのんちゃんしかいないんだから」

「私しか、いない……」

「そう、のんちゃんしか」

のんちゃんはそれきり黙ってしまった。だけど、僕の言いたいことはしっかり伝わったと思う。その翌日も、のんちゃんはいつも通り、泣き言なんて一つも言わずに、あるバイトに出かけて行ったからだ。

のんちゃんを見守る僕の脇に、DJのデカイ図体が並ぶ。にこにこ何やら嬉しそうだ。

「あの子、成長したわよねー……」

「ああ、大人になった」

「あんたもいい仕事したわね。あの子が変われたの、あんたのおかげって部分も大きいわよ」

「いやあ、全くもってその通り。もっと褒めろ」

「肝心のあんたはイマイチ成長してないみたいだね。あんた今アルバイトしてたっけ。今月の家賃、まだ受け取ってない気がするんだけど」

「う……」

さすがDJ、突っ込みは容赦ない。

「そ、それより、のんちゃんの声優コンクールもうすぐじゃないかな、みんなで応援しに行く準備しようぜ。なんならのんちゃんガンバレって横断幕でも作って、親衛隊っぽい格好をしていけば、すでにファンがついてるーってなって評価が上がるかも……」

「そうね……」

心ここにあらずといった感じでぽつりとDJが返してきた。普段のDJにはこういうことがあまりないので、僕はつい気になってDJの顔をまじまじと見てしまった。

「無事にいけば、いいんだけどね」

DJの顔はいつの間にか曇り模様だった。本当に、人のいいおっさんだ。今週中にはちゃんと家賃を納めてあげよう、と心に決める僕であった。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に吠える その8

「なあー、聞いてんのか、ああーん？」

…… まったくもって、うかつだった。

あれだけ気をつけていたはずなのに……、今日はどこか浮かれていたから、こんなところで捕まってしまったんだろう。

いよいよ声優コンクールという日の、その前日のことである。

「調子乗るんじゃないって、何度言ったらわかるんだよ！ せっかくあたしらが何度も警告してやってんのに無視しやがって、このっ！」

もっちーから助言を受けた後の私は、リカちゃんにもう一度向き合うことを決め、とことん、何も言わない彼女に付き合った。リカちゃんが私に対し、言葉を発してくれるまでの根競べ。…… そんな状況が一時間も、続いたのち、リカちゃんはずいに折れて、それまでの親への不満や学校への不満、塾への不満、そして私自身への不満も含め、思い切り自分の想いをぶちまけてくれた。

嬉しかった、単純に。

彼女が私に全ての思いのたけを、今まで溜めこんできたことをぶつけてくれたことが嬉しかった。ようやく彼女に、信頼できる相手だ、と言ってもらえた気がした。

それから、勉強と関係の無い部分での相談ごとにも乗ってあげられるようになった。なんだか、昔の自分を見ているようで、どこか悲しく、だけど嬉しい気持ちになった。一日でも早く、リカちゃんが笑顔で勉強できるように、たとえ学校へ行けなくても、楽しい場を作ってあげられるように、私は頑張ろうと心に決めていた。

そんな風にリカちゃんのことを考えていたせいであろう、私の顔は明るかったと思うし、それが柳田さんたちの神経を逆撫でするものであることも重々承知していながら、私は柳田さんたちのよく使う（というかたむろしている）、人通りの少ないトイレの近くを通

ってしまったのだ。

「いいか、今すぐ声優コンクールも事態しろよ。お前なんかに出る資格はないんだからな。……聞いてたら返事くらいしろよ！ 黙ってちゃわかんねえじゃねえかよ！」

当然私は連れ込まれて、これまでにないくらいのレベルでの暴力を受けた。

お腹を蹴られ、足を蹴られ、胸を蹴られ……、またしても外からは目立たないところばかりを狙われた。両腕は抑えられているから逃れられない。私は必死に膝を丸めて胴体を守ろうとするが、うまくいかない。口からしょっぱい液体が流れた。

「泣くんじゃねえよ、会話になんねえだろが……、ほら、あたしらに謝れよ、ごめんなさいって頭を下げるんだよ、なあ！」

ぐいつと頭を掴まれて、無理やり上向かされる私。この頃には、もういろんなことがどうでもよくなっていた。ああ、結局こうなるのか……、色々頑張ったけど、無駄だったかのかなあ、私、もつちーやDJや、いろんな人に支えられてここまで来たけど、やっぱり間違ってたのかなあ……。柳田の言葉攻めに遭い、どこか本気でそんな風に弱気になってしまっていた、そのときだった。

「のんちゃん！」

聞き慣れた声がトイレに響いた。えっ、この声は……、そんなばかな。どうしてここに。

「ちっ……んだよ、てめえの彼氏かよ。ざけやがって」

トイレの入り口に立っていたのは、もつちーだった。驚いたような目でこちらを見つめている。悪態をつきながらも、人に咎められるのはまずいのだろう、早々にトイレから撤退していく柳田さんたちである。「どけよ！」柳田さんはもつちーの体を強く押すと、どたどたと廊下を走り去ってしまった。まったく、退散だけは一流な人々である。

「のんちゃん、大丈夫か。今のが柳田？」

「もつちー……、来てくれたんだね」

私は、こんなところでももっちゃんの顔が見られたことが、もっちゃんが助けに来てくれたことが嬉しくて嬉しくて、それまでとは違う温かい涙を流していた。

「DJが、ひよっとしたらということがあるから、コンクールまで面倒を見てやれって言ったから、念のため様子を見に来ただけ……。ごめんね、遅かったみたいだ。もっと早くこんな状態に気付いてあげられたら……。ひどい、こんなに赤くなってるじゃないか。すぐ医療室に行こう。あと、きちんと学校側にも報告しないと。これは立派な暴行だ」

「で、でも……。明日がコンクールの日なのに、あまり大ごとにするのは……」

「馬鹿野郎！ そんなこと言ってる場合かよ……。コンクールなんて関係ない、今、のんちゃんが困ってるんだから、ちゃんと助けてくれって、声を出さないとダメだ。手を伸ばさないとダメなんだ。助けを求めるのを我慢する理由なんてどこにもない」

「だけど……」

「だけでもヘチマもあるか！」

そう怒鳴って人を呼びに行こうとするもっちゃんの、その腕を、私はがしつと掴まえた。

「のんちゃん……、気持ちわかるけど」

「お願い！」

思った以上に大きな声が出た。私は内心でハラハラしながらも、懸命に続けた。しゃべるたびに腹に痛みが走った。

「明日まで……、明日まで待つて。明日のコンクールだけは、無事に終わらせたいの。何事もなく、問題なく、平和なままで……。みんなに心配かけずに。それが終わったら、助けを、ちゃんと求めるから」

「だけどのんちゃん……そんな体で、そんな声でコンクールなんて」
実際、私は行きも絶え絶えといった疲弊度であった。腹へのダメージが大きいので、声を出すだけでかなりしんどい。だけど……、

「明日は、頑張る。本気で、頑張るから」

「のんちゃん……」

もっちーは何も言わなくなり、力なくうなだれてしまった。ごめんね、もっちー。心配してくれているのに、こんなことを言っちゃって……。

だけど、大丈夫。もっちーの優しさは私にもう十分伝わっているし、これからは、辛い時は絶対にちゃんと抵抗する。もっちーにも相談するし、学校側にも抗議するくらいの度胸はついている。

私は、ちゃんと、助けを求める。

だけど、今日は、今日だけは。

「わかったよ。頑張ろう、のんちゃん」

もっちーはようやく、笑顔を見せてくれた。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に吠える その9

その日の夜のことである。

明日のコンクールに向けての壮行会も済ませ、のんちゃん応援グッズ（ハチマキ、タスキ、横断幕、メガホンなど。のんちゃんは予想以上に本格的に作られたそれらを見て引きつった顔をしていた）も無事製作を終了し、ワナビ荘の面々が寝静まった、日付の変わるくらいの時刻。空には丸い月がぽっかりと浮かんだ、明るい夜だった。

どうにも緊張と興奮から眠れずにいた僕は、キッチンに水を飲みに向かった。すると、開け放した窓の外から、微かに、誰かが歌う細い声が聞こえてくるのだった。

（こんな夜中に、一体誰が……？）

びっくりするくらいに綺麗な声だ。まるで、テレビが何かでしか見たことがない、ソプラノ歌手のような……。僕は窓からそっと顔を出して覗き込む。洗濯物の干してある、さして広くもないワナビ荘の中庭。そこには果たして、夜空に向かって美しい歌声を惜しげもなく響かせる、寝巻姿ののんちゃんの姿があった。月の光を浴びて、彼女の姿は、まるで彫像のように青白く輝き、その光景は、別世界の出来事であるかのような、現実離れた美しさを湛えていた。僕は息を吞んで彼女を見つめた。

今力カシの願い事が 叶うならば翼が欲しい

この背中に鳥のように 白い翼つけて下さい

この大空に翼を広げ 飛んで行きたいよ

悲しみの無い自由な空へ 翼はためかせ行きたい

パチパチパチパチ……。

歌がやみ、月夜にはただ一つの拍手が鳴り渡った。のんちゃんは

ハツと振り返り、僕の姿を認めると、一気にかあつと頬を紅潮させた。

「いい歌だね。かかしの歌？」

「も、もっちーの……、バカ」

「キッチンにまで聞こえる声で歌ってたのはそっちじゃないか……。まあ、でも、おかげで安心した」

僕はサンダルを履いて中庭に降り立った。足下の土の感触が心地よい。

「こんなに、綺麗な声で歌えるんだもんね……。のんちゃんの声だつてわからなかったよ。考えてみれば、僕はのんちゃんが演技をしているのは聞いていても、歌のトレーニングしているところをちゃんと見たことがなかった。そういう点で、僕はのんちゃんが声優としてどのくらい通用するのか、本当はちょっとだけ不安だったんだけど……、この実力なら十分すぎるくらいだよ、のんちゃん。今日のことも、全然影響ないみたいだね。自信持つて行きなよ」

「で、でも……」

僕に話しかけられて、のんちゃんからは先ほどまでの異様なオーラは消失し、すっかりいつものおどしたのんちゃんに戻ってしまった。だけど、僕はそんな恥ずかしがるのんちゃんの様子に、どこか安心している自分にも気付いていた。

明日の声優コンクールには、課題演技の部と自由演技の部がある。課題演技の部では課題として出された台本を読み上げ、自由演技では三分間という時間の中で、何でもいいから「好きなように、声を使ったパフォーマンスをせよ」ということである。おそらくのんちゃんは、その自由演技で今の歌を歌うつもりなのだろう。

なぜ、力カシなのかはわからないけど……。まあ、そこにはきつとのんちゃんなりの理由があるのだろう。

「もっちー……」

のんちゃんは僕のシャツの胸のあたりをはつしと掴んで、体を預けてきた。僕はドキリとして、どうしていいかわからなくなり、

その場に棒立ちになるしかなかった。「ど、どうしたの」僕は震える声で尋ねる。するとのおんちゃんは、「ううん」と小さな声を出し、ふるふるとかぶりをふった。おんちゃんの分厚いメガネが僕の胸に当たり、ごつごつという感触がした。

「ありがとう。もっちーのおかげで、頑張れる」

「あ、ああ。今日のこと？ いや、結局僕には何もできなかったし……。そんな、お礼を言われることじゃ」

「ううん、今日だけのことでなくて。これまでのこと、全部」

そして背中に手を回し、ぎゅっと抱きしめてくるおんちゃん。僕は、頭にかあつと血が昇り、どうしていいかわからなかった僕は、そのまま、何がなんだかよくわからないまま、彼女の肩に手をかけた。こういうときって、どうすればいいの、どうすればいいの……。やわらかいおんちゃんの感触が伝わる。僕は、情けないくらいに震える自分の手を、どうにかこうにか、おんちゃんの背中まで回すことができた。

（う……うわあ、あの二人、大人の階段昇ってますねえ……。い、いけないところ見ちゃってるみたい……。ドキドキします）

（馬鹿っ、声を出さない！ 聞こえちゃうでしょ！）
「えっ？」

聞き慣れた声が頭上から流れてきたので、僕は上を振り仰いだ。そこには、庭で抱きあうというこっ恥ずかしい姿をしている僕たちを、しっかりと観察している二人の女の姿が！ 言うまでもなく、それはハルとリョーコであった。

「ああっ……。み、見られたっ」

「撤退！ ハル隊員撤退です！ お邪魔してすみませんでした、どうぞごゆっくりっ！」

勝手に騒いでぴしゃりと窓の中へと退散する二人。と言うかハル、リョーコの部屋に泊まったのかよ……。

僕たちはなんとなくバツが悪くなって、体を少し離れたまま目を逸らしてしまった。まだ腕が少し触れ合っているところがさらに気

まずさを増幅させた。

「……ふふっ」

だけど、少しの沈黙ののち、意外にものんちゃんは嬉しそうに笑ったのだった。僕も釣られて笑ってしまふ。そして僕たちは再び目を合わせる。彼女の目には、幸せの光が宿っていた。

「もう遅い。明日に備えて寝よう」

「うん、そうだね……。ねえ、もっちー」

「うん？」

僕たちはワナビ荘に引き返ししながら、リョーコたちの部屋までは聞こえないように気をつけつつ、小声で会話。

「私、明日のコンクール、もしダメでも……、いいかなって、思ってる。ここまで色々な事があって、そして、いろんなつらいことを乗り越えて来られたから……。もう、昔の私じゃなくなったから。だから、もし明日結果が残せなくても、それでいいかな、って」

「ん……。そうか」

僕は頷いた。それでいいんだろう、と思う。誰も彼もが一番になれるわけじゃないけど、努力の過程で本人が変われたなら、その事実の方が、大切なんじゃないか。のんちゃんの姿を見ると、そんな風にも思えてくるのだった。

その夜、僕たちはリビングのソファで寄り添うように眠った。もう、僕たちを冷やかそうとする誰かは現れなかった。僕たちはただ、お互いの体温を心地よく感じながら、これまでにないほどの深く安らかな眠りに落ちていった。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に吠える その10

「おい、応援グッズは後ろのトランクに乗せろって言うてんだろ！これじゃ後部座席をグッズが占領してて誰も座れないじゃねえか！」

「み、みなさん押し合いへし合いしないでください。ドアが外れます」

「D」は体が大きいから助手席に乗ってよー！ 暑苦しくて会場まで持たないじゃないの！」

「あーもう、あんたたちうるさいから全員降りなさい！ どうせ会場そんなに遠くないんだからみんな電車で行けるでしょう！ まったくもー！」

「私は体が小さいからどこでもすき間に入って乗って行けますよー」

「み、皆さん落ちついてください。もともと詰めれば六人は余裕で乗れる車ですから……そうだよ、まー君」

誰がどのセリフの主かお分かりだろうか（と言って当てようとする方はいらっしやらないと思うのでさっさと先に進めようと思う）。僕たちはのんちゃんの声優コンクール会場へ向かうためにまー君のゴーストタクシーを召喚したわけであるが、結局全員乗り切らなかったなので、すったもんだの一悶着しているわけである。

そういえば、関係ないけどすったもんだってという言葉の響き、凄くエロくない？（本当に関係がない。話を盛り上げる気があるのか）ちなみにのんちゃんとはとくに会場入りしている。本番まであと一時間、きつと今頃彼女は緊張の頂点にいるに違いない。こんな時こそそばにいてあげたい気もするが、今ののんちゃんなら一人でこの試練を乗り越えられるのでは、という気もするのである。

「さて、全員乗りましたか……。出発しますよ、みなさん……」

まだ少しも運転していないのにせいぜいと肩で息をしているまー君である。無理やり全員を車内に押し込むのに相当の体力を使った

ようだ。まったくもって損な役回りである（人ごと）。

「あ、ちよ、ちよっと待って！」

「まだ何か……？」

リョーコの呼びかけに、さすがに疲れた顔でまー君が振り向く。そこにはぎゅうぎゅうと折り重なった四人の姿が。あまり長く振り返っていたい光景ではない。

「あと一人だけ、連れていきたい子がいるの！　ちよっと寄り道、お願いできる？」

「は……？」

どきどき。

すでに本番まで二十分を切っている。今回のコンクールの出場者は全部で六十人いるということだ。そして、そのうち、私の順番はちよっと十人目であった。全体の数を考えても、かなり前の方である。具体的には九人目より後で、十一人目より前だ（こういう意味のないことを考えてしまうあたり、いかに私が緊張しているかがリアルに伝わるのではないかと思われる）。

しかし……、私はステージ脇からそつと会場を盗み見る。審査員の先生方の他、おそらく出演者の関係者なのだろう、多くの観客が会場を埋め尽くしていた。中にはアマチュアながらに親衛隊がいるらしい子もいるようだ。いいなあ……、と思いつつ、自分にもワナビ荘のみんながいることを思い出し、つつい笑顔になってしまう私である。

だが、今はそのワナビ荘のみんなが見当たらない。どうしたんだろう、もっちーの話によると、全員でまー君のゴーストタクシーに乗ってくると言っていたけど……、ひよつとして渋滞にでも捕まっているのだろうか。それとも、事故にでも遭ったか。すぐにマイナス思考をしてしまう点、私はまだまだ変わっていない、と反省することしきりである。

（だけど……、本当にもうすぐだ）

どきどき。胸の鼓動は時間が近づくごとに高くなっていくばかり。本番三十分前に比べ、二十分前になるとおよそ二倍大きな音で心臓が鳴っている。この比率でいけば、十分前にはさらに二倍で最初の四倍、本番のときはさらに二倍で最初の八倍の大きさの鼓動となり、あまりの負担に心臓が止まってしまいそうだ（こんなことを考えられるあたり、まだ余裕があるのでは、という見方もできるにはできる。自分を客観的に見る視点は大切だ）

会場が、わっと賑やかになる。ついに一人目の候補の子が、演技を始めたのだ。課題演技のセリフを、よどみなく、美しい声で、すらすらと紡ぎ出す一人目の参加者……。私はゴクリと唾を飲んだ。思った以上にレベルが高い。この戦いを、私はぐぐり抜けていかなーといけーないのだ。

さて、そんな風に緊張していると、どうしてもトイレが近くなってしまう。私は、本番前にもう一度　　と思い、ステージ裏をそつと離れて女子トイレへと向かった。

そして、深呼吸をしながら用を足し、洗面台で顔を洗って、気合を入れるためにパン、と顔を叩いて、よし、と鏡の自分に向かって握りこぶしを作ってみたりして　　、そこで、私の表情は凍りついた。

「よお、楽しそうにしてんじゃない」

柳田さん。

やめて。

お願い、今日だけは。

鏡には、私の背後の個室に隠れていたのだろうか、意地悪い表情で私を睨みつけている柳田さんがはつきりと映りこんでいた。私は自分の足が、手が、震え始めるのを感じていた。やめて、やめて……、こんな、大事な時に。

今だけは、やめて。

「あたしもアンタが楽しそうにしていると嬉しいよ。ねえ、今日はどんなことして遊ぼうか」

「や、やめ、て……」

「あん？ 遊んであげよう、って言うてるだけじゃん。嫌がることなんて何もないよ。それともー、アンタは、あたしと遊ぶの嫌い……」

「や、やめて……やめて……」

そのとき、私の中で何かが吹っ切れた。

「やめてっ！ もう、私に構わないで！」

突然大声を出した私に、面食らった表情をする柳田さん。私はそのまま、頭の中がうまく整理できないままに、けどはつきりと、言葉を発し続けた。

「私、もう、あなたに構われたくない！ これが、これがあなたの遊びだっというのなら、私、あなたと遊ぶのが嫌い！ あなたの遊びに付き合うのが嫌い！ 嫌い、嫌い、大嫌い！ だから、もう私に構わないで、私で遊ばないで！ 私のことは、もう放っておいて！ 私も、柳田さんのことは、もう二度と、構わないからっ！」

「ん……だと、こらア」

柳田さんの表情が鬼のように歪む。私はすでに、目に涙をいっばいに溜めていたが、後悔はなかった。私は、言いたいことを言ったのだ。なにも、悔やむところなんてない。むしろ清々しいくらいの気持ちだ。私は、柳田さんの顔から目を逸らさなかった。

「てめえ……、黙って聞いてりゃ好き勝手言いやがって。今まで可愛がつて来た恩を忘れたのか、オイ！ こりゃあ、まだまだ可愛がり方が足りなかったみてえだな、おお！？」

柳田さんが私を殴ろうと拳を振り挙げた。私はギュッと目を閉じる。後悔はない。ここで殴られても、私は、自分の言いたいことを言った、自分の主張をまっとうした。誇りを持って、殴られよう。

しかし、拳は振り下ろされなかった。

「ああら、アナタ、うちの可愛いのんちゃんを可愛がってくれたのねん。それじゃあ、あたしからもたっぷりお返しに可愛がってあげなくちゃねえ」

「だねー。DJの猫っ可愛がりには半端じゃないから覚悟した方がいいよー、いじめっ子さん」

「なっ……、ど、どうして」

柳田さんの拳は中空で、DJの太い腕にがつしりと掴まれていた。彼の背後には、ハルさんとリョーコさんの姿も。

「み、みなさん……」

また、助けに来てくれたんだ。

私はじわりと暖かい涙が溢れてくるのを感じた。

「お、おめえ、男じゃねーか！　ここは女子トイレだぞ！　男が入ってくるんじゃない、セクハラで訴えるぞ」

「あら、イヤねえ。あたしは男でもあり女でもあるのよ。私のような人間にとって、性別なんて些細な問題なのオ。イケズなことを言うんじゃないの！」

そういう問題だろうか。私はいつもの調子のDJに、思わず吹き出してしまった。

「のんちゃん先輩、もうすぐ先輩の出番です。こっちから行きましよう、急いで！」

ハルさんが誘導してくれる。「うん！」　私は溢れる涙をぬぐいながら、伸ばしてくれた彼女の腕をしっかりと握った。温かい、ハルさんの体温が伝わってきた。

「さて、次はエントリーナンバー10、北原乃梨恵さん十八歳の登場です！　声優学校でもなかなかの好成績を収めていると評判の彼女、今回はどんなパフォーマンスを見せてくれるのか！」

ハルさんに引かれ、私は　、私は一気に、舞台の上へと躍り出した。そこで、私はあらためて、自分の置かれた状況に思い至る。

眼下には審査員の先生方の厳しい視線。会場いっぱいには、知らない人々の顔、顔、顔、それらが一斉に私のことを見つめているのだ。それもただ見ているのではなく、私がどんなパフォーマンスを見せてくれるのか、どんな声を出すのか　、期待している目、あ　るいは好奇の目を寄せているのだ。

もし失敗すれば、私は彼らを一齐に失望させることになる。
そのプレッシャーが、さっきのトイレの中以上に、私の足を震えさせた。

ど、どうしよう。

声が出て来ない。何かをしようとしても、体が動こうとしない。あれほど練習したのに、頭の中でシミュレーションも繰り返ししたのは。マイクスタンドの元へ歩み寄ることもできない。このままでは、何もできずに終わってしまう。どうすればいいんだろう、どうすれば、どうすれば……。

そのとき、はっと思い至って、私は会場内を見回した。そうだ、もっちー……。もっちーはどこにいるだろう。今、このかいじょうのどこかで私のことを見てくれているのだろうか。まー君は。みちるさんは。ついさっき見たリョーコさんやDJたちも、今のこの私の姿を見てくれているだろうか。

そして私は見つけた、横断幕を持って、ハチマキをして（のんちゃんLOVEと書かれていた、さすがに恥ずかしい）、メガホンを持って私のことを見つけてくれている、彼らを。まー君を、みちるさんを、……。もっちーを。

そして、もう一人、

「……リカちゃん」

どうして彼女がここに。一瞬疑問に思ったが、すぐにわかった。もっちーかりョーコさんあたりが、連れてきたのだろう。先生の晴れの舞台を見せるために、そして私にも、生徒が見ているというプレッシャーを与えることで、ちゃんとした演技ができるよう、気を引き締めさせるために。あるいは、授業中を思い出させるため、だろうか。

そうだ、ここは塾の教室だ。

私は思った。目の前にいるのは、偉い審査員の先生方なんかじゃなくて、かわいい生徒たち。私がこれからするのは、何の変哲もない、いつもの授業。まるで生徒にわかりやすく言い聞かすように、

語りかけるように、ゆつくりと、平常心でしゃべれば何も問題はない。

「 エントリーナンバー10番、北原乃梨恵。課題演技を始めさせていただきます」

そして私は、全身の力を抜き、いつもの教室にいる心地で、「授業」を始めた。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に吠える その11

（もっちー、どう？ あたし、間に合った？ 終わっちゃった？）
（しっ。今、始まったところ。ちょうどよかったね）

（ええっ、あれがのんちゃんなの！？ 別人にしか見えなかった…
…。あの子、あんなに上手かったの？）

リョーコが会場に戻ってくる。ほどなくして、DJが（手早く柳田という子を絞め上げた上で）会場入りした。こうして、ワナビ荘のメンバーが勢ぞろいしたわけである。

もし本番でのんちゃんがつかえるようなら、ちょっとくらい応援のセリフを飛ばしてもいいだろうか、などといういと画策していた僕たちだったが、現実には、全員が口をポカンと開けてのんちゃんの姿に見入るだけだった。ステージ上で演技するのんちゃんは、まるで女優のように輝いており、その姿はもはや神々しくすらあった。

課題演技を一度も間違えることなく終え、しなやかな動作でお辞儀をするのんちゃん。直前に急いで連れてきたリカちゃんも「先生、スゴイ……」と言葉が出ない様子だ。

そして自由演技の時間に入った。ここでの演目は基本的に自由であり、これまでの出場者はダンスや歌、既存の作品のセリフの演技や早口言葉など、いろいろなパフォーマンスに挑戦していた。総じてレベルは高い。

だが、のんちゃんは昨日、月の下で歌っていた「翼をください」を歌うはずだ。あれだけの歌声ならば、審査員の先生方も仰天するに違いない。僕はそう思い、期待に胸をときめかせながら、彼女が歌いだすのを待った。

だが、すうつと息を吸ったのち、彼女が口に出したのは、まったく違うものだった。

「今日は、誠に勝手ですが、この場を借りてお礼を言いたい人

たちがいます。私の人生を、……生き方を、変えてくれた人たちです」

ざわつ。

会場が一瞬ざわつく。こんな自由演技を行った参加者はこれまでに一人もいなかった。そもそも、これでは単なる語りであり、演技ではない。

だが、そんな雰囲気にも構うことなく、のんちゃんは淡々と続ける。

「まず、DJ。私がワナビ荘に入った時から、積極的に話しかけてくれて、たくさんいろんなことを教えてくれて、料理とか掃除の仕方とか、本当に、ありがとう。クラブでのDJも、大好きです。DJは、私にとっての、第二のお父さん、です」

「お母さんでもいいのよ」

DJはそう壇上ののんちゃんに呼びかけ、少しだけ笑いが起きた。「次に、リョーコさん……いつもいつも私に優しくしてくれて、ありがとう。あなたがいたから、私は本当に楽しく、BLや耽美な漫画の世界を知ることができた……」

「公の場でそういうことを言うな……」

がつくりとうなだれるリョーコである。

「そして、まー君、みちるさん。あなたたちのおかげで、たくさんモチベーションをもらうことができたし、幸せそうなおなたたちを見ていたら、私もたくさん幸せな気持ちになれた。ありがとう。ハルさんも、元気なおなたのおかげでワナビ荘がとっても明るくなった。あなたたちと漫画と一緒に描いたときは、正直徹夜は辛かったけど、凄く楽しかった。あんなに達成感を感じたのは、生まれて初めてだったかも。本当に、ありがとう」

突然の展開に面食らいつつも、会場は少しずつ静かになった。こういうドラマチックな展開は好きな人もいれば、くさい、と感じて好まない人もいるだろう。だが、結局はどちらでもいいと思う。ただ、彼女は、僕たちに感謝を告げたかっただけなのだろうから。

「リカちゃんも、私にとっては本当に大切な人の一人。あなたは昔の私に似ているの。あなたと話していると、昔の私と向き合っているような気持ちになって、それが凄くもどかしいときもあったんだけど、結果的にあなたのおかげで私はとても大きな成長をできたと思う。リカちゃん、本当にありがとう」

リカちゃんは、ガラス玉のような大きな目を見開いて、瞬きもせずのんちゃんのことをじっと見つめていた。彼女の名前が呼ばれると、ほんの微かに、こくん、と頷くのがわかった。

「ついでに、この会場にいないけど、カフカ。私の話を聞いてくれて、ありがとう。あなたがいないと、ワナビ荘は、ワナビ荘らしくないよ。いてくれて、ありがとう」

そこまで言って、セリフを一区切りし、のんちゃんは、ふうと深呼吸をする。

「そして……、もっちー」

最後にのんちゃんは、僕の名前を呼んだ。……さて、いったいどう来る。僕は思わず身構えた。

「……もっちー、私をお嫁さんに、してください!」

……ガーン。

ざわざわ、ざわざわ。

そう来るか……、そう来るか。僕は周りの好奇の視線を一身に浴びているを感じた。おいおい、どうするの……。なんだか気持ちだけが僕の肉体から逃避していくような、どこかぼんやりした気分で、人ごとのように僕は思った。

「もっちーのことが、大好きです! あなたのおかげで、私は好きな自分になった! だから、だから、ずっとあなたと一緒にいたい! もっちー、私はあなたの、お嫁さんにしてくださいっ、お願いしますっ!」

最後あたりの助詞の使い方がおかしかった気がするが、もはやそんなところを指摘する気力は僕には残っていなかった。

周囲の観客は、僕がどう返事をするかじっと息を殺して見守って

いる。ええい、ままよ。もうどうにでもなれだ。僕はメガホンを口に当てると、投げやりな口調で、一言、

「ああ！ 僕も愛してるよー！ ぜひ僕のお嫁さんになってくれ、のんちゃんーん！」

ぱち、ぱち、ぱち。

僕がそう告げた後に、まばらな拍手がどこからともなく起こった。ぱちぱちぱちぱち。やがてそれはさざ波のように広がっていった。ええい、くそつたれ、恥ずかしいったらありやしない。僕は思わずその場に顔を隠してうずくまってしまった。

「……嬉しい」

壇上ではのんちゃんが口を抑えて涙をいっぱいに溜めている。あー、泣くな泣くな、ますますどうしていいかわからなくなるじゃないか。こんなに恥をかかせやがって、あとでおしおきが必要だな。僕は思った。

しかしのんちゃん、すぐに姿勢を正すと、こほんと一つ咳払いして、

「……それでは、みなさんへの感謝の気持ちを込めて、歌います。

『翼をください』」

ブーッ。

そこで演技終了のブザーが鳴った。出演者は速やかに退場。次の出演者が順番を待っているため、原則として延長は許されないのであった。

ぶーぶーと観客からブーイングが跳ぶ中、司会進行は平然として「それでは、エントリーナンバー11番」と次に進めてしまふ。そしてやがて、何事もなかったかのようにコンクールはその後ろ流れでいった。

さて、のんちゃんのパフォーマンスは成功だったのか、失敗だったのか。それは、見る人によっては成功とも映っただろうし、外しているとも映っただろう（小説だこういう場面は感動的だが、現実においてはなかなか賛否両論な部分がある、というものである）。

まあ、いずれにせよ、のんちゃんはやりたいことがやれたので満足
そうな表情だった。

後で聞いた話だが、この後、のんちゃんは舞台裏で、緊張が一気に解けたせいでへなへなとくずおれてしまい、そしてそれどころか、その場で眠ってしまったというのである。どれほどの勇気を絞り出してあれだけのパフォーマンスをしたというのか、察せられて余りあるというものだ。

まったくもって、本当に、可愛い奴である。

第4話 うらぶれ案山子は月夜に吠える その12

「声優学校を辞めた!？」

それからしばらくして 本当にしばらくして、どのくらいしばらくかと言うと、その次の春が巡るくらいまでしばらくして、僕は驚くべき知らせを聞いた。

僕の恋人 すなわちのんちゃんが、声優学校をやめて、教育大に入学し直したのだという。

「うん。私、すっかり教育の道に目覚めちゃって。私、これから頑張って、学校の先生になるつもり」

一昔前からは考えられないようなしゃっきりとした姿勢、ハキハキとしたしゃべり方である。ちよつとネクラな頃なのんちゃんも好きだった僕からすれば、ほんのちよつとだけ、残念ではあるのだけれど（贅沢である）。

あの日、のんちゃんが出場したコンクールでは、残念ながらのんちゃんは賞を受賞することはできなかった。まあ、自由演技で声優としての演技を何ら発揮できなかったのだから、当然と言えば当然の結果である。だが、のんちゃんは少しも暗い顔をしなかった。ここにこと笑って、そのまま、ワナビ荘に戻った僕たちは夜通し打ち上げというなのんちゃん騒ぎをし、近所からのひんしゆくを買った（本当にごめんなさい）。

そして、のんちゃんは塾の仕事に今まで以上に打ち込み、リカちゃんとはすっかり師弟関係を築き上げ、その結果、リカちゃんは、別の学校ではあるけれど、学校のカリキュラムに編入し、不登校を脱する決意をしてくれた。そして、のんちゃんはそれをきっかけに、教育という仕事に心からやりがいを感じ始めたのである。

「声優は、いいのか。夢だったんじゃない」

「うん。今でも、ちよつとだけ惜しいかな、っていう気持ちはある。だけど、今の私には新しい夢ができたから」

桜舞う季節のこと。のんちゃんは、ぴしっとしたスーツを実に纏い、教育大学でしつかりと教育の勉強を受けることになった。塾での活躍を見ていれば、彼女がいずれいい先生になるであろう、ということは言うまでもなかった。

「ねえもっちー、良かったの？」

「うん？」

DJとリビングでせんべいを食べながら、僕はのんびりと話している。テレビでは、新生活応援フェア、だとか、入学・就職応援セールなどの広告が次々に映し出されている。

「のんちゃんがここを出ていく、ってこと、止めなくて。最近ここ意外にも、専門学校でもしつかり友だちを作ったみたいだし、おそらく新しい教育大でもたくさん友だちを作るわよ。のんちゃんすっかり垢抜けて可愛くなったから、男の子もたくさん寄ってくるかも不安じゃないの？」

「……そりゃあ、そんなこと言われたら不安にならざるを得ないけどよ」

僕は口を尖らせる。今のリビングには二人以外は誰もいない。バリバリ、とせんべいをかじる音が無駄に広い部屋に響く。

「この春からリョーコたちも出て行っちゃうわけだし、寂しくなるわねえ」

「でも、新しい借り手も見つかったんだろ？　なら、すぐにまた元みたいにワイワイやれるようになるよ。またいいワナビ仲間を探せばいいじゃん、DJならできるだろ。僕だって、まだしばらくはいる予定だしさ」

「そうよねえ、あんたもいずれはいなくなるのねえ、はあ……」

いつになくセンチメンタルなDJである。まあ、この歳にもなれば色々あるのだろう。こういうときは黙って聞いてあげるのが大人というものである（生意気）。

「もっちー！」

そうこうしているうちに、玄関先から元気な声が聞こえてきた。

僕の、大好きな人の門出である。僕も湿っぽい溜息なんてついていないで、張り切ってやらねばならない。

「ごめんね、引越しの手伝いまでさせちゃって……。入学式までに済ませたいとか、ちよつと無茶だったかなあ」

「いや、こういうのはできるだけ早くやっちゃった方がいいんだ。

大丈夫、だいじょうぶ……」

そう言いながらも運んでいる箆笥の重さに思わず腰を屈めてしまう僕である。「あらもう、何なの。情けないわねえ」と笑うDJであるが、奴から見ればたいていの男は情けない。

まあ、そんなこんなで、僕たちは新しい生活に移行していくわけである。僕は、愛する人と共に、これからワナビの道を歩んでいくことだろう。……すでに先輩となってしまった、まー君やリョーコの背中を追いかけながら。

さて、こんな風にして春といううつつつけない季節にして、なんとなく綺麗に終わりそうなこの物語であるが、実は、もうちょっとだけ続くんじゃよ。

そう、まだ大事な人のエピソードが描かれていないじゃないか。皆さま、お忘れだろうか、だとしたら僕は嘆かざるを得ない。ワナビ荘の登場人物たちに少しでも愛着を持って下さった読者諸兄ならば、おそらく、最後の話は誰のためのものか、おおよその目測はついていることと思う。

ぜひ、期待しながらページをめくってほしい（かつ、サブタイトルはまだ読まないでほしいという無茶な注文を試みる。わがままな語り部である）。

「ワン」

お前じゃねえよ。

第5話 おやすみDJ。 その1

月日が流れれば個人の世界は否応なしに変化していくものである。付き合う人間、住む場所、する仕事、趣味、読む本、見る番組、聞く音楽、寝るベッド……。習慣が人間を作り、環境が人間を変えてゆく。

ずっと同じ環境に人は長く住めない。それは、僕がさして長くない人生の中で、それでも身に染みて感じた、現実的な教訓だった。そして、僕はその長くは住めない環境の中で、青春を過ごした。

得難い友たちと、一生のうちに二度とは訪れないような、素晴らしい青春を送った。

のんちゃん、DJ、リョーコ、ハル、まー君、みちるさん、ついでにカフカ。

彼らと過ごした日々は、何物にも代えがたい僕の一生の宝だった。しかし、そんな宝物のような、愛おしい日々こそが、無情にも目の前をあっという間に過ぎ去っていき、そして引きとめることのできないものであると、僕はそれをはっきりと失ってしまったから気付いたのだった。もとはといえば、早く作家になって世に出て、「ワナビ荘」を出ていくことが僕らの共通の目標だったのだから、それは当然と言えば当然の流れであるの、だけけれど。

気付けば。

僕一人が、「ワナビ荘」に取り残されていたのである。

「だからあー、俺はそういう努力とかを正当化するのが嫌いなんスよね。別に努力がいけないわけじゃなくて、努力そのものを評価して、みたいな風潮？ あれが我慢ならないんス。なんていうか、どんな分野にしても結局は結果出してナンボ、だって思うんですけど」ワナビ荘のリビングである。僕の目の前にいる彼は、黒川といっ

て、まー君がいなくなった後に入ってきた新しいワナビ荘の住人だ。今もギターを片手に持ってたかき鳴らしており、夢はシンガーソングライターだそう。それはけっこうな事なのだが、朝でも昼でも関係なく歌って弾いてという生活なので、はっきり言って相当うるさい。イライラする。この音から逃れるためにワナビ荘を出ることすら考えてしまうほどだ。

「それなら結果を出せばいいじゃないか……。そんなことをここでグダグダ言っているのも何も始まらないぞ、それに努力はしないよりした方がいい、というだけの話だ。努力を認めるかどうかは個人の価値観によるものだ」

「うーん、優等生な解答っすねえ。正直、つまんないス」

僕は、よっぽど「君と会話している方がつまらないよ」と言っているのかと思った。僕の方が先輩に当たるので、一応自重はしたけれど。

まー君、のんちゃん、リョーコが出て行って、ハルやみちるさんも出入りしなくなってしまってから、ワナビ荘の雰囲気はガラリと変わった。まー君の代わりに黒川、リョーコの代わりに東田、のんちゃんの代わりに仁科という新しい「ワナビ」たちが入居してきたのだが、どうも、正直に言って、僕は彼らと反りが合わなかった。

東田は画家になりたいワナビだ。分厚いメガネをかけたいがぐり頭の青年で、毎日部屋にこもって、キャンバスと向き合っている。彼が通るといつも油絵の具のにおいがぷんぷん漂ってくる。一応料理や掃除当番は無難にこなすのだが、それだけなのである。積極的にコミュニケーションを取ろうとしてはこないし、基本的に無口で何を考えているのかわからない。僕が話しかけても知らん顔でいることが多い。「今時の他人に無関心な若者」というやつかもしれない。

そして仁科は、芸能人になりたい女性のワナビであった。子どものときに子役として映画に出演したことがあるとかで、それ以来「女優」を肩書にしているというが、よく聞くと出演作はそれだけの

ようだった。しかも、その作品は興行的にはコケているので、あまり出演した旨みもない。

だが、本人はそこでちやほやされてしまい、さらに運悪くもそれが当たり前だと誤解してしまったのだろう、いわゆる女王様体質になってしまったのだ。顔が綺麗なせいで周囲の男子からはよくモテたし、女優業はできずとも周りにちやほやされながらここまで来てしまったため、勘違いから覚めなかった、覚めるチャンスの得られなかった不幸なケースだ。ワナビ荘でも「ちよっと、靴を揃えておいて」だとか「私の分の夕食当番、誰か代わってよ」などとワガママを言っては誰にも相手にされず、機嫌を悪くしている。

まあ、そんな感じで、ワナビ荘の中は、それまでのメンバーの頃とは一転し、一気に雰囲気が悪くなってしまったというわけである。

しかし、そんなメンバー相手にも、DJの態度はそれまでと全く変わらなかった。僕はこれには素直に感服した。DJくらいの年の人から見ると、前のメンバーも今のメンバーも、同じ「子ども」でも映っているのだろうか。いずれにせよ、DJは僕が思っていた以上に器のどかい男らしいと知ることになった。

「ほーら、仁科、何やってるの。脱いだものをその辺に置いといたらダメ。きちんと洗濯籠にまとめなさい。ほら、下着もちゃんと整えて。女の子でしょ」（DJは女の子の裸を見ても眉一つ動かさない強者だ。単に彼から見たら子どももの裸も同然だからなのか、それとも異性に興味がないのか。おそらく両方だ）

「黒川、今日は食事当番でしょう。例外は許されないわよ、たとえば音楽の神が下りていようが何だろうが、食事の準備は欠かさずやらないといけないの。さもないと、音楽の神はおるか、グレートスピリッツにまで見離されちゃうのよ。食べる、というのは他社の命を食らう行為。そしてグレートスピリッツは全ての命の根源なのよ」（わかるようなわからないような文句だ。さしもの黒川も、DJお得意の「グレートスピリッツ」が出てくると、煙に巻かれざるをえ

ない)

「東田、あんたはちよつと愛想が悪過ぎるわ。芸術家には愛想はいらない、っていう方針なのかもしれないけれど、せめて同居人に対してはきちんと受け答えができるようにならないといけないわね。ようし、あとでじっくりと会話の練習よ。今夜あたしの部屋にくるよーに」(この後東田がどうなったか誰も知る者はなかった……。

(噓)

かように、DJはなかなか態度の悪い　　というか、かなり自分勝手な入居者たちに対しても根気よく説教し、叱り、語りかけ、改善させようとした。だが、彼らはそれをつつとうしがったり、無視したり、いずれにせよ真面目に聞こうとするものはほとんどいなかった。

僕はそんな光景を目の当たりにして、なんだか悲しくなってしまう。こんなにも優しいDJの好意を素直に受け入れられないだなんて、なんてつまらない連中なんだろう。こういうとき、のんちゃんやヨーコやまー君なら、どんな風に反応しただろう、ここからどんな面白い会話が生まれていただろう、ここからどんなドラマが生まれていただろう　、そう夢想せずにはいらなかった。明らかに以前のワナビ荘の住人たちの方が、クリエイティブな才能を携えていた、と思う。そうだったことは、こうした日常の一ページ、会話の端々にもうかがえるのだった。彼らは、生活の中野一瞬一瞬に、その口から放つ一言一言に、僕たちとの交流のひとつひとつ、その全てに　　何かを生み出していた。

僕の、前の住人の方が良かった、という想いは、口に出さずとも態度の端々には現れていたのだろう、ある日の夕食時、僕は些細な事で黒川と喧嘩になってしまった。

「俺、いつも思うンスよね。どうして望月先輩は俺たちに対するとき、不満そうな顔ばかりするのかー、って。気付いたんですけど、ひよっとして、悔しいんじゃないスか？」

「悔しい……？」

テーブルを挟んでの会話である。僕のことを好意的に思っていないらしい黒川が、妙に突っかかってきたのだが、僕は不覚にもそれに乗ってしまったのだ。虫の居所が悪かったせいかもしれない。

「いやー、だってそうじゃないスか。前にここにいたメンバーは、ほとんどが夢を叶えて、小説家になったり漫画家になったりしてデビューして出ていったんでしょ？ 望月先輩の彼女さんも新しい夢を見つけたわけだし。そうになると、作家になりたいっていうレベルにとどまって、未だにくすぶってるのって先輩だけじゃないですか。結果、俺たちみたいに一周り若い連中と一緒になっちゃまって。悔しいんじゃないスか、内心」

「……てめえ、何をわかった風な口を聞いているんだ」
僕はガタンと椅子から立ちあがる。ただでさえ会話もなく陰悪だった食卓がさらに悪い方向に凍りついた。仁科はこちらをおびえたような目で見ているし、東田はいつも通りのまったくの無反応で黙々と食事を続けている。

「僕は、あいつらと一緒に作品を作ったり、夢を語り合ったり、イベントに出たり、そりやもう、いろんなことをした。あいつらがいなかったら今の僕はない。あれだけの奴らだ、僕より先にデビューしたところで何の不思議もないし、僕があいつらにそんなに単純な嫉妬感情を抱くわけではない。……僕たちはお互いに尊重し合い、高め合える仲間だったんだ。お前たちと一緒にするな」

「それこそ失礼ッスねえ。先輩こそ、俺たちの何を知ってるっていうんですか。謝ってくださいよ。それに、そんなにいい仲間たちがいたんなら、そいつらについて出ていけばよかったじゃないスか。どうしてここに居続けるんです？ ……ああ、ひよっとしてあれスか。夢を叶えられなかった者同士、DJさんと傷の舐め合いってところですか」

「……いい加減にしろこの野郎！」

僕はテーブル越しに黒川に掴みかかった。お互い我慢の限界に来ていたのだろう、「上等っすよ、やってやろうじゃないすか！」と

黒川も応戦して食卓は滅茶苦茶である。料理は床に落ち、食器が次々に砕けた。「きゃあっ」と仁科が悲鳴を上げる。

「何やつとるんじゃクラア！」

キッチンからDJが鬼のような形相で現れた。掴み合ってもんどりうつ僕たちを認めると、DJは容赦なく僕たちの頭に鉄拳を食らわせた。ゴツン、という嫌な衝撃が頭の中に走る。激しい目眩がした。

とりあえず僕たちを大人しくさせたDJは状況を見て、何が起きたか簡単に把握したようだ。はあっと溜め息をついて、

「……あんたたち、もうちよつと仲良くできないの？ アタシは悲しいわ、ガキのケンカの仲裁役なんかやりたかないのよ。ココはみんながそれぞれに夢を叶える場所なのよ。足を引っぱり合っている時間なんて一秒でもいいの？」

「……………」

僕は何も言い返せずに、黙って俯くことしかできなかった。「ああ、つまんねえ」そう言って部屋に引込んだ黒川はやけくその様にギターをかきならし始める。僕はひとり、割れた食器や料理を片付け始めた。かちゃ、かちゃと情けない音が食卓に響いた。

仁科と東田は、そんな僕を薄気味悪そうな目で見ていただけだった。手早く自分の分の食事を済ませると、さっさと自室へ戻ってしまふ。こういうとき、のんちゃんたちだったらきつと片付けを手伝ってくれたのになあ……、などと過去のメンバーを思い出すと、自分のみじめさが余計に際立ち、涙がにじんでくるのだった。

力チャ。

そのときようやく、一人だけ僕を手伝ってくれる大きい手が横から差し伸べられた

「手伝うわよ」

DJだった。DJは僕に笑いかけると、ぶちまけられた自分の作った料理を、嫌な顔一つせずに、新聞紙で包むとゴミ袋に放り込む。

「DJ……………」

そこまでが限界だった。僕は、情けない、恥ずかしいと思いながらも、ぼろぼろと涙を流してしまった。

DJは何も言わずに、僕の頭にやさしく手を置いてくれた。大きく、無骨で、温かい手。僕はその手の大きさになんとか安心してしまつて、気が済むまで声を殺して泣いた。心の中には、いつかのワナビ荘の、わいわいとした賑わいが、彼らの声が、何度も繰り返し響いていた。

第5話 おやすみD」。 その2

「それは、たぶんもっちーが変えて行かなければならない状況なんじゃないかな。ある意味で、試練であるとも取れるね」

「試練……」

「うん。かつて私が直面したいじめ問題と同じようにね……。あ、もっちーそのソーセイジおいしそうだね。一個もらっていい？」

「一個って、一個しかないじゃねえか。おいコラ、勝手に食うなっ」
ファミリーストランのんちゃんと食事しているある昼下がりのことであつた。もう僕とのんちゃんは恋人というか、ずっと一緒にいる、ある意味で夫婦のような状態であつたので、せっかくのデートも新鮮味がない。もっとも彼女と会うだけで、「いつもの日常」の幸せを再確認できるので、それだけで僕は心から満足なんだけどね（ノロケ）。

「その子たちは、まだワナビ荘に入り立てで、私やもっちーより一周り年下の後輩に当たるわけだよ。そうになると、やっぱり子どもなのは仕方ないよね……私が入りたての頃そうだったように。だから、一緒になつて喧嘩してるようじゃ、やっぱりダメだと思ふんだ」
「まあ……、そりゃあそうなんだけどさ」

言いながら、ああ、のんちゃんは今本当に立派に自分の意見を言うようになったな……と、心のどこかで感心しながら、一方で寂しくも感じていた。なんだか、僕がいなくてものんちゃんは一人でも生きて行けるようになってしまった、そんな気がして。

「まず、なんでその黒川君だっけ、その子がもっちーに突っかかってくるようになったのか、考えないと。本当にもっちーに原因はないの？ 他の、仁科さん、東田君についても同じ。どうして彼らが馴染めないのか、彼ら同士が仲良くできないのか。もっちーがやったこと、もっちーの言動のひとつひとつを思い出してみて」

「僕の、言動……」

なんだろう。僕は彼らに、話が弾むようにいろいろ話しかけたり、それなりにアクションを起こしてきたつもりだし、彼らを怒らせたりするようなことは言ってはこなかったつもりだけど……、どうして、

「そう、それじゃないかな」

「うん？」

僕が列挙したいくつかの行動を、のんちゃんは鋭く指摘する。

「要するにね、どうしてももっちゃーは先輩だから、上から目線になっちゃうの。意識していなくてもね。それが鼻につくっていう後輩がいても、おかしくないよ」

「上から目線……」

言われてみれば……そういう節も、あるような、ないような。

自分で気付いていないということは、それだけ重症なのだろうか、僕は。

「彼らはね、きつと、『自分が一番』って思ってしまう、思ったがる年頃なんだと思うの。根拠はないけど、万能感、全能感が全身を支配して突き動かす、というような、そういう時期。だから、上から説教されたり、自分のやっていることに水を差されたり、っていうことを何よりも嫌うの。私も専門学校時代、周りの人たちを観察して感じたことだから、わかるんだ」

「万能感、か……。まあ、わからなくてもない気持ちだけど。じゃあ僕はどうすればいいのかな。彼らを持ち上げる？ 彼らの言うことを全面的に肯定してあげればいいんだろうか」

「その必要もないよ。そういうのは一歩間違えれば『媚び』になっちゃうから、逆に相手から嫌われる可能性がある」

のんちゃんは人差し指をぴんと立てると、

「だからね、『何もしない』っていう選択肢もあるんだよ」

「『何もしない』？」

「うん、そう。『何もしない』。相手の言うことに正論で対抗する必要もなければ、積極的に賛同する必要もない。要は、適当に流す

んだよ。ただ、相槌はちゃんと打ってあげてね。それだけで、相手は満足する。話を聞いてあげるだけで、そういう人とは仲良くなれる」

「つまり、真剣に応えない、ってこと？」

「ある意味ではそういうこと。たまに人間付き合いにすごく真剣になっちゃって、相手の言うこと全てに全身全霊で応えようとする人がいるんだけど、それは無駄なエネルギーだよ。人間関係、ある程度の適当さが必要なんだよ。人を嫌いになったり好きになったり、どうしても他人が気になるもんだけど、だからこそどこかで『別にどうでもいいんだけどサ』って思うべきなんだよ。その方がストレスが溜まらないし、案外うまくいく」

「……それって、のんちゃんが見てる生徒のこと？」

「……うん」

のんちゃんはアルバイトとして、今でも塾の講師を続けている。リカちゃんは今ではすっかり学校に馴染んでおり、塾はやめてしまったということだ（ときどきのんちゃんに会いに来るとは聞いているが）。

だが、学校で問題を抱えて不登校になった子や、勉強についていけなくなった子は、当然次から次へと塾へ入ってくる。のんちゃんはその一人一人に本当に真摯に向き合い、彼らの声に耳を傾け、そして彼らの問題に「うまく」対処しているのだった。

「なるほどねえ、確かに子どもならムキになりやすいし、いちいち相手に突っかからないと気が済まないってこともあるかもしれないなあ。僕たちものんちゃんを見習わないとなあ。いつの間にか、すっかり頼れる先生らしくなっちゃって。僕ものんちゃんの生徒になりたいぐらいだぜ」

「もっちゃんだって、私から見たらまだまだ生徒みたいなもんだよ」

「……さすがにそこまで言われるとへこむ」

しかし、のんちゃんの言うことも間違いなかった。僕は先輩として、もうちょっと「聞き上手」にならねばならない。そしてそのい

い例がDJだろう。真剣になりすぎて、相手を否定するようなことをせずに、うん、そう心がければ、ひよっとしたら僕も「いい先輩」になれるのかもしれない。

「……もっちー」

そんなことを考えている僕に、ふと、何かに気付いたかのように、のんちゃんが話しかけた。

「あのころのワナビ荘……、懐かしんでるの？」

「……、ああ」

のんちゃんが少しだけ寂しそうに言った言葉に、僕は頷いた。確かに、僕はあの、今はもうなくなってしまった「ワナビ荘」の姿を、どこかで追いかけているのかもしれない。

「私も気持ちはよくわかるよ。あの頃のワナビ荘、すごく楽しかったもんね。もっちーがいて、DJ、まー君、リョーコさん、ハルさん、みちるさん、みんないて……、毎日がお祭り騒ぎみたいだったね。騒がしくて、ゆっくり落ちつくような暇もないくらいに騒がしくて、最初はそれがちよつと疲れちゃうこともあったんだけど、だんだんそれがないと寂しいくらいになってきて……。今の私も、少し寂しいと感じてる。一人暮らしは、誰もいないもん。もっちーがよく遊びに来てくれるし、その点では昔の自分なんかとは比べ物にならないくらい恵まれてる、っていうのはわかるんだけど……。だけど、やっぱりあの頃のどんちゃん騒ぎが、懐かしくなるよ」

「……ああ、僕も、同じだ」

すっかり静かになってしまったワナビ荘の食卓。いま一つ弾まない会話。なんとなくギスギスした関係。昔のワナビ荘との落差が余計に、僕の心に影を落としていることは確かだ。

「だけど、仕方ないんだよね」

「ん」

「いつまでも同じ環境っていうのは続かないから。新しい環境の中で、自分の立ち位置をしっかりと作って、また新しい仲間と頑張っていけないと……。そりゃもちろん、全てがうまくいくわけじゃない

けれど、うまくいかないなりに、環境に適應する努力をしていかな
いと、そこにいる人たちに悪い、と思う」

「……そうだね」

新しい環境。

新しい仲間。

以前のそれがあまりにも心地よかつたせいで、どうしても不満が溜まってしまう毎日だけど、だからといってそれを態度に出して
いては彼らにも失礼というものだ。

人はみんな、違う。

いいところもあれば悪い所もある。

前のメンバーも、今のメンバーも。

だから、頭を切り替えて、新しい付き合い方を考えて、前に
進まないといけないんだ。

「ところでのんちゃん」

「ん？ 何？」

僕の呼びかけにつこり笑って答えるのんちゃん。

「……今日、のんちゃんち行ってもいい？」

「言うと思った。いいよ」

理屈では割り切れても、気持ちが寂しいのはまあ、仕方がないと
いうものだ。

このくらい、甘えるのはご容赦いただきたい。のんちゃんは僕の
恋人なんだし、放置するのも悪いしね。

……ノロケに関しても、うん、ご容赦いただきたい。もうなるべ
く書きませんから（ぺこり）。

第5話 おやすみDJ。 その3

「望月先輩、すみませんっした。ちょっと自分、調子に乗ってたところあったッス。許してっさい」

その夜ワナビ荘に帰った僕は（と、のんちゃんの家に行った場面を華麗にスルーしつつ）、突然謝ってきた黒川に面食らってしまった。

「あ、ああ……。あのときは僕も悪かったよ、反省してる」

言いつつ、DJにこつてりしぼられたのかなあ、と想像したりした。しゅんとしょげており、いつもの覇気がない。帰ったらしつかり目の相手に立ち向かうぞお、なんて気合を入れていた僕からすれば、なんだか拍子抜けな心持ちにもなる。

「まあ、もうちょつと君の話をちゃんと聞いてあげればよかったなあ、なんていう風にも思ってる。そんなわけで、なんなりと話してくれ、黒川君。僕が君の話の良い聞き役になろう。どんな意見でも突っぱねたりはしないつもりだ」

「え、い、いや、そういうのはいいス。別に」

困った顔で僕の申し出を断る黒川であった。うつん、せつかく歩み寄るチャンスだと思ったのに。僕が残念そうにしていると、仁科が頭に手をやって溜め息をついていた。彼女の反応を見るに、なんだか僕自身が残念なヤツになっているようだった。

「あらあら、帰ってたの？ もっちー。ただいまくら言いなさいよ」
そう言いながらエプロン姿で、おたまを持つという伝統的スタイルでキツチンから登場するDJ。その脇には、今日の食事当番の東田が、げつ、なんかDJの服のすそを掴んでるし。

「あああ、東田くん。服を掴まないで、っていつも言ってるのにい。もう、本当に甘えん坊なんだからあ」

ぞわぞわと嫌な感じに全身が栗立つ僕である。……ま、まあ、DJはDJで新しい住人と仲良くなっているようで、よかった、よか

った。

「そうだ、もっちーにお土産があるのよ。見て驚かないでよ、じゃーん！」

「あつ、それは……」

それは二冊の本だった。一冊は、ついに出版されたまー君とみちるさんの小説。そしてもう一冊は、ハル リョーコの手からなる、初の単行本であった。

「DJ、それって何？ 道塚魔太郎にハル リョーコ……。誰？」
「ここの、前の住人たちよ」

DJはとても嬉しそうな笑みを浮かべていた。僕はDJの手からそれを受け取ると、なんだかとても愛おしいものを手にしたような気がして、その表紙を思わず手で撫でてしまうのだった。タイトルは「ゴーストタクシーにうってつけの夜」。夜道を走るタクシーを中央に据え、その窓に驚いた女の顔が写っている、そんなホラー小説らしい構図の表紙だった。

ハル リョーコの作品は「マリーゴールドの少女」。あの日、ワナビ荘スタッフ総出で描いた例の作品を連載用に描き直したものだ。マリーゴールドの花言葉は「嫉妬」や「可憐な愛情」だったな、などと僕はリョーコの話进行を思い出す。

「……やたらと嬉しそうな顔をするんっすね」

「ん？ ああ」

僕は黒川が怪訝そうな顔をしているのに気付いた。

「普通、こういうときって、確かに嬉しいかもしれないけど、同時に嫉妬して、『くっそー、俺も！』って感じになると思うんすけど……。望月先輩の場合、それが無いんすか」

「もちろん、ないわけじゃないよ。だけど、正味な話、あいつらに嫉妬してもしようがないんだ。あいつらは嫉妬するのも馬鹿らしくなるくらい、ぶっ飛んだ奴らだった」

「へえ……」

興味ありそうな表情で返事をする黒川。僕はリビングのソファに

座り、本をパラパラとめくる。彼らによって丁寧に綴られた文字、絵、それらが僕の視界を、撫でるかのように優雅に通過していく。一ページ一ページに、彼らの息遣いが籠っているような気がした。なんだか、すぐ近くに彼らがいるかのような錯覚すら覚えるほどに。「そうねえ。あの子たちは確かにぶっ飛んでたわあ。私が今まで出会ってきた歴代のワナビ荘住人たちの中でも、ぶっちぎりだったかもね」

「へえ。DJがそう言うほどにねえ……。どんな人たちだったんですか」

ハル リョーコの漫画をめくりながら尋ねる仁科。そういえば、彼女は少女漫画が好きだとか、いつか聞いた気がする。

「そう言えば、僕も、DJがここの大家始めてから、どんな人たちが出入りしてきたのか、あまりちゃんと聞いたことがなかったなあ」

「これまでにどのくらいの人数が出入りしてきたんですか？」

「そうねえ、あなたたちを含めれば、ざっと五十人つてところかしら」

「五十人!？」

これには僕もびっくりした。そんなにもの人々がここに……。ということは、あれほど長い間に一緒にいたかのように思っていた僕たちメンバーも、DJからすれば、ほんの一時期一緒に住んだ入居者たちの一部にすぎなかった、ということか。

「今までどんな人がいたんです？ 一番凄かった人はどんな人ですか？ その人たちって今ではなにやってるんです？」

昨日まであんなに機嫌が悪かった黒川が、今では興味津々である人の心というのはわからないものだ。

「ふうむ。そうねえ、どこから話そうかしら」

ソファにどっかりと腰かけるDJ。そして彼につき従ってすぐ隣に座る東田。いつの間にか、仲の悪かったはずのワナビ荘の住人たちは、DJを中心に、輪を作りつつあるのだった。DJおそろべし。「これは、遠い遠い昔のお話。まだ私も若くて、右も左もわからな

い、世間知らずのころだったわ。私は突如事故で亡くなった叔父の土地を譲り受け、このワナビ荘の経営を始めたの」

DJは語り始めた。その、優しく、聞くものを安心させるような語り口で。

「眠くなつた人は自由に部屋に帰って寝てくれていいわ。でも、今から話すことは、とっても面白いわよ。このワナビ荘に住んだ中でも、とびつきりおかしな子だとか、天才肌の子だとか、はたまたとんでもないトラブルメーカーの子だとか、そういう話がいっぱいあるんだから。もし良ければ、ゆっくり腰を据えてお聞きなさい、我が子たち。あたしがこんな話をする事なんて、本当に滅多にないんだからね」

第5話 おやすみDJ。 その4

飛行機を下りると、東京の暑さがむわっと全身を包んだ。すぐに空港内へ向かう冷房の効いたバスに乗り込むのだが、日差しのうつとうしさはバスの中でも防げなかった。

なぜ東京は、こういう嫌な暑さなのだろう。僕は襟をぱたぱたさせながら空を仰いだ。ついさっきまでいた沖縄では、確かに肌を焼く日差しもきつかったし、湿気もそれなりにあったが、なぜかこういう、全身を痛めつけられるような暑さではないのだ。理由はわからない。悪いのは、東京の空気かもしれない。

僕が空港ビル内に入り、荷物を受け取り到着口から出ると、そこには笑顔の妻が待っていた。

「おかえりなさい。ずいぶん荷物が多いのね」

「これから僕が『ワナビ荘』を経営するわけだからね。いろいろとアパート経営に必要な本とかを読んだのさ。それにしても、東京は人が多いよね。早くも那覇に戻りたくなってきたよ」

「私はいつそ沖縄に住んでもいいんだけど……。あなたがこっちに住むって、決めたんでしょ」

「ああ」

僕は気持ちを奮い立たせるようにぐいっと前を向いた。

「僕は、作家になるんだからね」

まだ若かった僕は妻と同時に独身寮「ワナビ荘」の経営を始めた。ここがワナビ荘と呼ばれる理由は、夢を持つ若者たち、「なりたいもの」がある若者たちが集う場所だから。そんなところだったと思うが、まあ、それはある意味で後付けであり、実際には単なる偶然によるものだった。

寮の経営を始めたとき、部屋は全部で四つ。そしてそこに住んだ若者全員が、たまたま「なりたいもの」がはつきりしていたのだ。

一人は作家、一人は漫画家、一人は舞台俳優、一人はデザイナー。それぞれが夢に向かって努力を重ねる、そんな場所にこの寮はなっていた（一応付け加えておくと、漫画家とデザイナー志望だった若者は夢を叶え、作家と舞台俳優だった若者はそれぞれに別の分野で現在は仕事をしているが、それぞれに充実した人生を送っているであろうことは間違いない）。

もっとも、若者は皆何かしら「なりたいもの」を持っているかもしれない。理想の自分というものを、持っているのかもしれない。本当に無差別に入居者を選んでも、けっこうな確率で、その寮は「ワナビ荘」となるのではないか。僕はそんな風に思っている。

「wannabe」。なんとも良い響きではないか。

ワナビという言葉は、差別的ニュアンスで使われることもある。時には皮肉な意味を込めて、呼ばれることもあるそうだ。

だが、そんな風な冷たい視線を向けられたからと言って、僕たちワナビがそれを気にする必要があるだろうか。

たとえどんな理由があっても、何か目標があって、それに向かって必死で努力している人間を、皮肉な目で見たりする連中に対し、僕たちが気後れしたり、遠慮する必要があるとして、あるだろうか。

むしろ、上等じゃないか、何とでも言うといい、そう僕は思っている。

僕たちは夢を持つ者。それがどれほど実現からほど遠い、気宇壮大なものだったとしても、それを追いかける僕たちは、僕たち自身を誇りに思い続ける。

それが、僕たち、「ワナビ」だ。

ワナビというのは、誇り高き生き物、なのだ。

「これから……、ここで、私たちの生活が始まっていくんだね」

今でも思い出す。僕と妻が、この「ワナビ荘」で共同生活を始めた日のことを。

「ああ。立派に経営していこうぜ、このワナビ荘を」

「ところで、これからあなたをなんて呼べばいいかな。今まで通りでいい？ それとも」

「ああ、それは」

そうだ。呼び名は大切だ。作家はワナビ時代から、いわゆるペンネーム、二つ目の名前を持っているものだ。そう、呼び名と言えば

。僕は、僕の師である偉大なる人物の名前を思い出していた。

その人の名は「城島ダイヤ」。次々と人気作を生み出し、一世を風靡したライトノベル作家である。僕は彼に直接的に世話になり、いろいろと作品作りについても指導してもらった過去がある。

僕は思いついた。あの人の名前を借りてはどうか。ただ、そのままいただくのはさすがに失礼に当たるだろうから、ここは

「D」

「え？」

「ダイヤ・城島。略してD、だ。いい名前じゃないか」

「D……、D、ね」

妻は顔をほころばせた。どうやらナイス・ネーミングだったらしいと僕はひと安心する。妻は思っていることが顔に出やすい。だからこうして笑顔になってくれるということは、素直に成功した、と思っただけということだった。

「よろしくね、D」。ステキな作家さんになってね」

第5話 おやすみD」。 その5

「あ、もっちー！」

ワナビ荘の庭の木に水をやっている、懐かしい声が聞こえた。見ると、すっかり大人っぽくなったリョーコが門の外から覗き込んでいた。

「あらあら、あの無精だったもっちーがホントにワナビ荘の管理人やってるのねえ。うん、感心感心」

「……相変わらず一言多いな、リョーコは。まあ入れ、スイカも切つてあるぞ」

「わーい」

「おっじゃまっしまーす！」

今までリョーコの後ろに隠れていたのか、ひょっこりと現れるハルである。こいつはなんというか、うん、変わらないな。

「あー、カフカ！ まだいたんだ！？ 元気ー？」

「ワン」

カフカも嬉しそうに尻尾を振る。

「休日とは言え、こんなところに遊びに来て、連載は大丈夫なのか？ アニメの方も好調みたいだし、けっこう忙しいんじゃないの？」

「だいじょーぶ、もう五週間先の原稿まで終わらせちゃったから。」

あたしたちこう見えても業界では有名なのよ、描くのがやたら速い漫画家、つてことだねー」

「ああ、確かにお前は異常な速筆だからな……」

「あつ、リョーコさんにハルさん。お久しぶりです、よく来てくれました。今夜は泊まっていきますよね」

「あー、そうしたいとこだけど、アシさんにうちの鍵渡しちゃってるからなー。あたしたちが帰らないとアシさんが帰れなくなっちゃう……」

「鍵を郵便受けに入れてもらうとか」

「あーダメダメ、ウチのマンションそれでけっこう泥棒に入られてんの。申し訳ないけど、明日も早いから遠慮させてもらっわ。またの機会に」

「そうですか。残念ですけど、仕方ないですね」

そう言って、僕の妻、のんちゃんはにっこりと笑う。

リョーコたちがここで暮らしていた頃から、早くも十年の月日が経っていた。

DJの正体が城島ダイヤだったと知ったのは、彼が引退して沖縄に引つ込むと言い出した、つい半年前のことだった。

「あたしねえ、実は作家の城島ダイヤだったのよ」

「ふざっけんなああー!」

そう告白された時、僕は混乱してDJにリアットをしたたかに食らわせた。嘘だったら許せなかったし、本当だったらさらに許せない。僕が城島ダイヤの大ファンだと知っていながら、今まで隠してきたのはいったいどういう見なのか。

そして、かくして彼は本物の城島ダイヤだったのである（衝撃の展開）。

「あたしがみんなに見せてたのは、趣味で書いた原稿よ。自室ではずーっと商業用原稿を書いていたわ。あたしは自分で出版社に原稿を持って行く人間だったから、ワナビ荘にも出版社の人は寄ってこなかったしね。そもそも、来るな、って言ってたし」

なぜ隠していたのか、という問いには、彼は平然とこう答えた。

「そりゃあ、知られたくないからに決まってるじゃない。『あの』」

城島ダイヤがここに住んでる、なんて知られたら、嫌じゃない。有名人ならよくあることよ」

自分が有名人であることには絶対の自身を持っているDJである。そういえば、城島ダイヤはどこにも顔を出さないことで有名だったな……。今さらながらに、こんな身近に憧れの人がいたことに気付けなかった自分が憎い。

「そういえばDJはお昼はずっと引っ込んで何か書いてたしねー。私はてつきり応募用原稿書いてるんだと思ってたけど、そっかー、あの場所で傑作は生み出されていたというわけかー」

DJが城島ダイヤであるという事実を知った後のリョーコやのんちゃんは思いのほか冷静であった。ただ、「DJはやっぱりタダモノじゃなかった」という純粋な賞賛があっただけだ。

そして、話は戻るが、そのDJが執筆業を引退し、沖縄に引っ込むことに決めたのだった。

「あたしはもう体力的にもいいとこまで来ちまったわ。女房も子どももない身だけど、そろそろ、親孝行しなきゃね、と思って」

そう言って、彼は沖縄に住む高齢の両親のもとで一緒に住むことに決めたのだそう。若いころ、親の反対を無視して家を飛び出し、作家業を始め、さらに事故で亡くなった叔父の土地を拝借して「ワナビ荘」の経営を始め、そんな怒涛のような生涯を送ったDJが、最後に下した決断は、親と和解し、若いころ反発した親に今度は尽くすということだった。

彼がDJとして活躍していたクラブも（あまり出番がなかったのなんだか忘れ去られていそうだが）半年前に閉鎖となった。閉鎖パーティーの際は、多くのDJのファンたちが駆けつけて、かなりの規模の式典となった。やはりDJは、城島ダイヤとしてでなく、ディスク・ジョッキーとしても実に多くの人々を魅了していたのだな、と改めて思い知らされた。

そんなわけで沖縄に戻ることにした彼が、「ワナビ荘」の第二のオーナーとして指名したのが、地方公務員として就職し、自活しつつも、今でもワナビ荘で暮らし、作家業を目指し続ける僕だった。

「もっちゃん、第二の『DJ』を勤められるのはあなたをおいて他にはいないわ。よかったら、いえ、ぜひ、『ワナビ荘』二代目DJを襲名してちょうだい」

そんなわけで、僕はワナビ荘の経営権をDJから譲り受けたのだった（手続きなどがいろいろと大変で苦労した）。もったも、僕が

行っているのは経営だけで、この土地も建物の所有権も、名実ともに未だにDJのものである。

僕はDJについて、彼の実家へ行き、ご両親と対面した（なぜそういう流れになったかはわからない）。まだまだ元気でかくしゃくとしたお年寄りで、DJの生活的支援も必要かどうかもわからないくらいだった。なんというか、沖縄のイメージ通りであつた（ステレオタイプだろうか？）。

そして、こうしてワナビ荘へ帰ってきて、リョーコたちに襲名を報告して、その結果「お祝いしなきゃね」ということでリョーコたちがワナビ荘へわざわざやってきてくれた、という状況で　ようやく今に至る。

さて、ハル　リョーコの近況はというと、前述の会話からも分かる通り、彼女たちは今や誰もが知るところの（言い過ぎか）人気漫画家である。アニメ化もし、興行収入は好調。すでに映画化の話も来ているということだ。あの頃のワナビ荘メンバーの中では最も成功を納めた二人であるということができよう。

蛇足かもしれないが、リョーコの弟のユウジくんは長い長いリハビリの末、ある程度は仕事もできるようになり、現在ではデスクワークについている。社内野球というかたちで、念願の野球にも参加できているとのことだ。

ハルと母親のトモエさんとの関係は、その後詳しくは聞いていない。仕事上の付き合いはきっちりやっているとされるが、親子の関係がどうなのかは、僕たちが立ちいる必要もない問題だ。だが、何もあの頃のようなトラブルらしきものが見受けられないということとは、それなりにうまくやっているのだろう。

「あ、そうそう。あの二人は今度はベトナムへ行くって言った」

「あの二人って、あの例の二人？」

「そうそう、あの二人。また現地で職務質問を繰り返し受けることになるそうだね」

「いい加減やめればいいのに、ゴーストタクシー……」

まー君とみちるさんのカップルは、本を五冊ほど出したところで、突然作家業休業宣言を出したかと思うと、なんと世界中を旅すると言いだめたのだった。世界中でゴーストタクシー業でお金を稼ぎながら、その土地その土地の文化を知り、歴史を知り、生活を体験すること、それまでの自分になかったいろいろなものを得、吸収しながら有意義な人生を送っているのだという。ある意味羨ましい。（まだまだ世界は広がったです。僕たちは井の中の蛙でした）

まー君が感慨深げに語った言葉が印象的だった。

「まあ、あの二人ならどこへ行ってもうまくやることだろう。みちるさんがついてるんだし」

「そだねー。あの二人には日本は狭すぎるよ……ん、このジュースおいしい。のんちゃんが作ったの？」

「はい。ワナビ荘の庭で取れた野菜で作った、名付けて『ワナビジュース』です」

「うーん、『ワナビ』っていう言葉がますます野菜が何かに聞こえて来ました……」

そして我が妻　のんちゃんは、もう教師生活五年目に入る。現在は近所の公立小学校で小学二年生の担任をしている。

僕たちは、のんちゃんの教育大学卒業、就職に合わせて結婚をした。してみると実にあっさりしたもので、案外それまでの生活と変わらなかったことに純粹に驚いた。それくらい僕とのんちゃんの間は、安定していたというか、もはや一つの家庭として完成していたということなのだろう。

そして今、僕たちは晴れてワナビ荘で、念願の同居を果たしたのだ。僕が二代目DJとして、彼女とワナビ荘を共同経営する形で。
「ワン」

さつきからワンとかうるさいのがいるので、ついでに紹介しておこう。ワナビ荘のマスコットであるところの駄犬カフカは、結局大した見せ場もないまま、しかし十年という月日をまるで感じさせないくらいに、飄々と生きてきた。ある意味一番変化の無い奴である。

DJは沖縄に連れて行こうと思っていたらしいが、僕ができれば譲り受けたい、と申し出て、結局ワナビ荘に残ることになった。まあ、こいつがいないと、ある意味ワナビ荘らしくないしね。

「それにしても、結局DJいなくなっちゃったんだねー、この東京から。なんだか寂しくなるね」

「まあね。けどまあ、彼も親御さんに寂しい思いさせてたわけだし、里帰りしたのは正しい判断だと思うよ。それに、これからは僕たちがワナビ荘のDJとしてしっかりやっていかないと」

「DJ、最後になんか言ってた？」

「ん……、いや、別に。あの人はあえて口に出すタイプじゃないからなあ。ただ、最後に『あんたもさっさといいいもん書いて世に出なさいよ。そしてそんときや城島ダイヤの愛弟子として胸を張りなさい』って、いろいろとアドバイスをくれた」

「へー、どんな？」

「バーカ、そりゃ企業秘密だ」

「はー。しかし、こうしてると昔を思い出しますねー」

ハルがスイカをシャリシャリと食べながら何気なく呟いた。すでに日は落ちかけ、空は赤くなっている。みんなみんなと、夏を告げる蝉が鳴き始めていた。

「そうだなー、思い出すな。あの頃はみんな、若かった」

「何よー、今だってあたしたちは若いわよ。作家はいつまで経っても若いもんなの。老けるのはもっちーだけ」

「ねえ、みなさん、外に出てみませんか？ カフカの散歩も兼ねて、少しだけ、夕涼みに」

のんちゃん突然の提案である。彼女も昔が懐かしくなったのだろう。すぐさまハルが「賛成！」と立ちあがる。「ほら、せめてスイカ最後まで食べ」と僕がはやるハルをたしなめる。まったく、いくつになっても子どもみたいなところは変わらない。

「いいんじゃないですか、行ってきたらいいと思います」

そのとき、キッチンから黒川が声をかけてくれた。彼はもう丸十

年ここで僕と一緒に暮らしている。すっかり弟のような存在だった。

「メシの手配は俺がやっておきますから。先輩たちは思う存分、昔の思い出でも語ってきてください。積もる話があるんじゃない？」

「……悪いな。いつもお前には助けられるよ」

「いえいえ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2217w/>

ワナビ荘の住人たち

2011年10月9日03時20分発行